第 11 号の刊行にあたって

アジア現代女性史研究会代表　藤目ゆき

本号の特集テーマは「WIDF 調査団に参加したヨーロッパの女性－レジスタンスから朝鮮戦争停戦運動へ」です。アジア現代女性史研究会は本誌第 7 号（2012 年）に「WIDF 朝鮮戦争真相調査団に参加した女性たち」をテーマに特集を編み、東西冷戦がピークを迎えた朝鮮戦争の最中に鉄のカーテンを越える取り組みを行った国際民主女性連盟（WIDF）について研究する意義と課題を提示しました。その後の 5 年間、海外調査も行い、文献資料を収集し、本誌やその他の学術誌に研究成果を発表してきました。本号では、その成果発表の続きとして、デンマークのケイト・フレロンに関する論文と資料、フランスのジレット・ジーグレルの思想的背景に関する論文、新たに発見したドイツのリリー・ヴェヒターに関する資料紹介などを編集しています。

WIDF は「ヨーロッパにおける第二次世界大戦下のレジスタンス活動の中で築き上げられた国際ネットワークをベースに 1945 年に創立された女性の国際組織」として知られています。WIDF を研究対象として選んだ最初から、私たちもそのような、事典の説明にあるような知識はありました。が、当初私たちが持ち合わせていたのは、抽象的で概念的な、ごくささやかな知見やイメージだったことは否めない事実です。実際にヨーロッパ諸国における戦争・ファシズム・レジスタンスに関連する博物館を訪問したり、レジスタンス闘士の遺家族や研究者たちから話を聴いたりするにつれて、レジスタンスと WIDF のつながりやそのつながりの意味が、たんなる抽象的概念でなく、ヨーロッパのファシズムと戦火を生き延びた女性たち一人一人の人生が織りなした具体的な物語として浮かび上がってきました。本号にとりあげた 3 人もまた、第二次世界大期のファシズムと戦い、大戦後の東西冷戦状況の中、西側の国にありながら米国と自国政府の戦争政策に反対し、レジスタンスの精神を守り続けた女性たちです。

本号には、これらの特集記事とともに、アジア現代女性史に関連するエッセイや資料紹介の記事も掲載しています。中国における沈崇事件は国共内戦の初期の北京で発生した米兵の女子学生レイプ事件であり、反米闘争の高揚の契機になった歴史的事件です。杜春媚さんは東アジア史的視野からこの事件に取り組む在米研究者であり、本号に寄稿をいただいたことは大きな喜びです。このほか、地下資源開発の現場で生きるモンゴルの女性たちを扱ったモンゴル国営放送制作のドキュメンタリー作品に関する紹介記事、1956 年 8 月の原水爆禁止世界大会のために来日したソ連代表団が書いた日本滞在記の抄訳、そして、世界平和運動・ソ連・ロシアとの友好運動に生涯を捧げたインドのジャナキ・クリシュナンに関するエッセイなども載せました。

2017 年 3 月 8 日

★ ★ ★ ★

目　次

第 11 号の刊行にあたって ……1

■ 特集 「WIDF 調査団に参加したヨーロッパの女性 ーレジスタンスから朝鮮戦争停戦運動へ」

ケイト・フレロン・ヤコプスン
ーデンマークのレジスタンスから国際平和運動へ　藤目ゆき ……8

ケイト・フレロン・ヤコプスンの著作と資料
翻訳 レアケ・シュタイマン／池田高巌 ……32

『ノイエス・ドイチュラント』紙のリリー・ヴェヒター関連記事に寄せて
木戸衛一 ……64

朝鮮戦争調査直前のジレット・ジーグレル
『私は P.S.F.にいた』から読み解く　松田祐子 ……70

■ エッセイ・研究ノート・資料紹介

北京レイプ事件　杜春媚 ……88

モンゴルの地下資源開発の現場
ーモグラのように生きる「ニンジャ」の女性たちー　今岡良子 ……96

資料紹介
第二回原水爆禁止世界大会に出席したソビエト代表 A・ソフローノフの旅行記
抄訳・解説 エネビシ・藤目ゆき ……106

ジャナキ・クリシュナン
ーインドとロシアの友好運動に捧げた人生　藤目ゆき ……120

執筆者・翻訳者 紹介(50 音順) ……134

カバー写真 解説 ……137

★ ★ ★

アジア現代女性史
Contemporary Women's History in Asia

アジア現代女性史研究会
CAWA(Association for the Study of Contemporary AsianWomen's histoy and Gender)

特集

「WIDF 調査団に参加したヨーロッパの女性
ーレジスタンスから朝鮮戦争停戦運動へ」

ケイト・フレロン・ヤコプスン
―デンマークのレジスタンスから国際平和運動へ

藤目ゆき

（はじめに）

ケイト・フレロン・ヤコプスン（Kate Fleron Jacobsen, 1909-2006）[1]は、イーダ・バクマン(Ida Bachmann, 1900-1995)と共に、国際民主女性連盟（WIDF）が朝鮮戦争戦場へと派遣した国際女性調査団に参加したデンマーク代表の女性である。ケイトは 21 人の調査団員のうちで唯一人、「オブザーバー」としての立場を堅持した。彼女は保守政党で活動した経歴があり、リベラルで民主主義的な西欧的価値を信じ、ソ連や東欧の人民民主主義諸国に警戒心を持ち続けていた。WIDF 調査団には東西両陣営 17 か国から多様な宗

イーダ・バクマン（左）とケイト・フレロン・ヤコプスン（右）

[1] デンマーク語の人名表記に関しては、新谷俊裕・大辺理恵・間瀬英夫編『ＩＤＵＮ －北欧研究－ 別冊号　デンマーク語固有名詞 カナ表記小辞典』(大阪大学世界言語研究センターデンマーク語・スウェーデン語研究室、2009 年）を参照した。

教・思想信条・政治的立場の女性 21 人が参加したが、ケイトはそのような WIDF 調査団において、いかにも西側代表らしいイメージを与える女性だったと言えるだろう。

本稿は、アジア現代女性史研究会が取り組んでいる冷戦時代の国際女性運動に関する研究、とりわけ WIDF 調査団に関する研究の一部として、ケイトがどのような背景から WIDF 調査団に参加し、調査団においてどのような役割を果たしたのかを明らかにするものである。ケイトはデンマークでは著名なジャーナリストであり、デンマークの複数の人名辞典に詳しい伝記が載っている。特にナチス・ドイツがデンマークを占領した時期のレジスタンス活動に起源をもつ雑誌『自由デンマーク（Frit Danmark）』の編集者として知られている。が、それらの辞典には、彼女が WIDF 調査団の一員として活動した内容に関する詳しい言及はない。そこで本稿では、先ず第一章においてケイトの生いたちやレジスタンスの経験を概観し、その後の三つの章において彼女の WIDF 調査団への関与がどのようであったかを明らかにする。

ケイト・フレロンは、筆者が WIDF 調査団の研究を始めた当初から心惹かれる女性であった。WIDF 調査団でオブザーバーに徹した彼女がどのような人であったのかという関心はもとより、女性ジャーナリストの草分けであり、レジスタンスの闘士であった彼女の生涯が女性史的な興味をかきたてるからである。とはいえ日本には彼女の情報はほとんど何もなく、筆者にとってデンマーク語という言語のハードルも高かった。そこで筆者は大阪大学外国語学部デンマーク語科の田辺欧さん、そしてケイトと親しい友人であったホウマンとビアデ・フーイ・ブラスク夫妻の甥にあたるデンマーク人のティム・パリスさんに協力をお願いし、2012 年の夏にコペンハーゲンの王立図書館、KVINFO（デンマーク女性・ジェンダー情報センター）、レジスタンス博物館、デンマーク平和アカデミーなどを訪ねて資料を収集し、生前のケイトを知るデンマークの人々にお話を聞かせていただいた。デンマーク語の翻訳と通訳は、当時コペンハーゲン大学の学生であったレアケ・シュタイマンさんのお世話になった。本稿はこうして得られた諸資料を参照して執筆し、出典はそれぞれ註に示した。が、ケイトの著作はいずれも内容が豊かであり、本稿の主題に直接関係のある部分だけを引用するのでは物足りない。そこで、それらの一部の日本語訳を付属資料として添付することにした。本稿とあわせて参照していただければ幸いである。

第一章　ナチス・ドイツ占領下のレジスタンス

第１節　自由デンマーク

ケイト・フレロン・ヤコプスンは1909年6月16日、デンマークの首都コペンハーゲンに生まれた。父はヴァルデマール・フレデリック・フェルディナンド・フレロン・ヤコプスン(1869-1934)、母はノニー・マーガレト・バウディ(1885-1957)である。文化意識の高い、民族感情に価値を置く、裕福で保守的な家族の一人娘として育った。ケイトは、祖父のフェアディナン・バウディツに励まされて、幼い頃からジャーナリストになろうと決めていたという。両親は最初はそれに懐疑的だったが、後には娘を応援した。両親が離婚したということもあり、ケイトは結婚して子どもを生むという伝統的な女性の生き方を疑い、自立を希求して家を出る。1928年にマリー・クルーゼ高校を卒業した後、ヒレレズの『ノアシェラン・ヴェンストレブラズ』紙の記者となり、その後保守系の雑誌『全国ジャーナル』誌の記者として1930年から1942年まで勤めている。男性中心的なジャーナリズムの中で当初は女性分野の記事しか担当できなかったが、1934年にオーウ・スコック(Aage Schoch: 1898-1968）が『全国ジャーナル』編集長になると彼女が医療問題の責任者に任じられ、医療分野の記者としても活躍するようになった[2]。

第二次世界大戦下の1940年4月9日、ナチス・ドイツの軍隊はデンマークを占領した。デンマーク政府はこれに抗議したものの、結局「ドイツがデンマークの独立を認めるがドイツ軍がデンマークに駐留する」という占領軍による提案を受け入れた。そうした妥協がデンマーク人の安全にとって最善だとデンマーク政府は考えたのである。ケイト・フレロンとオーウ・スコックはドイツのデンマーク占領に批判的な態度をとった。そのためドイツからの要求によってオーウは1942年1月1日に『全国ジャーナル』を解雇されてしまい、ケイトもその後すぐに記事の主題の制限や減給という受け入れ難い要求をつきつけられた。それはいわば体裁の良い解雇通告であった。失職したケイトは、生計を立てるためにフリーランスで書き続け、図書の刊行も行った。1942年には、保守人民党の政治家でありドイツ女性協会や保守人民党女性委員会で活躍してきた保守系フェミニストのリスベト・ヒンスガウル(1890-1969)[3]と協力し、約30人の女性作家から寄稿を得て、『デンマークの女性』を刊行している。また、ケイトは『道を踏み外す若者たち』(1942年)や『われら若者』(1943年)といった本も出し、性と道徳に関

---

[2] 'Kate Fleron (1909 - 2006)': KVINFO（ジェンダー・平等・多様性のためのデンマーク研究活動センター）の女性人名辞典: http://www.kvinfo.dk/side/170/bio/668/

[3] ヒンスカウルについては、'Lisbet Hindsgaul (1890 - 1969)' : KVINFO(同前、女性人名辞典、http://www.kvinfo.dk/side/597/bio/443/origin/170/）参照。

する激しい論争を巻き起こした。この頃、ケイトはオーウと恋愛関係にあったが、ケイトは結婚を望まなかった。

ナチス・ドイツによるデンマーク占領下、保守人民党の指導者クリスマス・ムラと共産党の指導者アクセル・ラースンは広範なレジスタンスのための国民的団結をめざして交渉し、両党の協力を背景として 1942 年 4 月に超党派の非合法新聞『自由デンマーク』が創刊される。この雑誌は月刊で出版され、レジスタンスの非合法報道を牽引した。1942 年 12 月のある日、ケイト・フレロンは人民党支持者で『全国ジャーナル』時代の同僚だったオーレ・キーラリッチ(1907-1983)から連絡を受ける。キーラリッチは『自由デンマーク』の編集に従事していたのだが、『自由デンマーク』の関係者の多くが逮捕されるか警察の追跡を逃れるため姿を消しており、彼自身も逃走中であった。彼は、保守人民党の支持者として活動したことのあるケイトに、自分に代わって保守派の代表として編集部に加わるように頼みにきたのである。ケイトはこれを受け、1943 年 1 月に『自由デンマーク』の編集部に入った。それからの彼女の活動は、資料の収集・記事の執筆といった編集者・記者としての仕事のみならず、デンマークのレジスタンスを後援する英国の特殊作戦執行部 SOE（Special Operations Executive）のパラシュート部隊の支援や危険な地下活動を行う市民パルチザンたちのための隠れ家の手配にも及んだ。彼女はレジスタンス活動における多くの重要人物とコンタクトをとりながら様々な形態での非合法活動に従事し、レジスタンスの地下活動の世界で「クローウ嬢」の変名で知られるようになった[4]。

1943 年 8 月 29 日、それまで不承不承ナチス・ドイツに従っていたデンマーク政府は、ドイツからのレジスタンス鎮圧の強要を拒否し、内閣辞職にいたった。そこでドイツが政権を掌握し、デンマークは名実ともにドイツの「被占領国」となり、デンマークのレジスタンスは正統性を認められることになった。このような状況のもと、英国の SOE の支持を得て、1943 年 9 月、デンマーク共産党・『自由デンマーク』編集部をはじめとするデンマークのレジスタンス運動を担う多くの団体が地下活動の統一組織「デンマーク自由評議会（Danmarks Frihedsråd）」を創設する。その中心になったのは、共産党のバアウ・ホウマン、モーウンス・フォウ、 デンマーク統一党のアーネ・サアアンスン、リング（レジスタンス・グループ）のフローゼ・ヤコプスン、 『フリーデンスケ』紙のエアリング・フォス、オーウ・スコックらである。ケイト・フレロンにとって同志であり恋人であったオーウ・スコックは、パラシュート部隊や非合法出版物など多方面にコンタクトがあり、自由評議会に最初から参加した中心人物の一人であった[5]。自由評議会が設立されると『自由デンマーク』はその報道媒体として不可欠の役割を担い、ケイトは 1944 年春になるとレジスタンス情報網の拡大に応じて『自由デンマーク』週刊ニュースの編集も行うようになった。彼女は最後まで『自由デンマーク』の重要な運営会議に参加し続けた。

---

[4] Merete Harding, Inga Dahlsgård: Kate Fleron i Dansk Biografisk Leksikon, 3. udg., Gyldendal 1979-84. Hentet 19. januar 2017 fra http://denstoredanske.dk/index.php?sideId=289519

[5] Verner Jespersen: Aage Schoch i Dansk Biografisk Leksikon, 3. udg., Gyldendal 1979-84. Hentet 21. januar 2017 fra http://denstoredanske.dk/index.php?sideId=297128

第2節　フレスリウ強制収容所

1944年9月1日の深夜から2日の未明にかけて、ケイト・フレロンとオーウ・スコックはゲシュタポに逮捕され、コペンハーゲンの西部監獄に連行される。オーウはその後すぐにコペンハーゲンのカムプゲーゼにあるシェル・ハウスに連行された。元はデンマークのシェル石油が本部を置いていたこの建物は1944年に接収されており、デンマークにおけるゲシュタポの本部として利用されていた。ケイトは数週間後、西部監獄からフレスリウ収容所に移送された。フレスリウ収容所は、デンマーク人のドイツの強制収容所への移送を避けるためにデンマーク政府が1944年1月、デンマーク内に強制収容所を建設することを提案して設立された収容所である。ドイツの占領当局はこれに同意し、フレスリウ収容所はデンマーク南西のドイツ国境にほど近いフレスリウの村の近くに建てられた。1944年8月中旬から1945年5月のドイツ占領終結までに12,000人が収容されている。収容者のほとんどは男性であり、その大半はレジスタンスのメンバー、共産主義者やその他の政治犯であった。収容所内の生活条件は概して許容できる水準であったものの、およその数で12,000人のうち1,600人はドイツの強制収容所に移送され、そのうち220人がそこで死亡した。戦争が終わる頃、スウェーデン赤十字のフォルケ・ベルナドッティはスカンジナビアにある強制収容所に囚われた人々を全員スウェーデンに帰還させようとし、それと時を同じくしてデンマーク政府はドイツの収容所に囚われているデンマーク人の救出についてドイツと交渉した。その結果、多くの人々がドイツの強制収容所から解放されることになり、1945年の3月と4月に10,000人のデンマーク人およびノルウェー人がドイツを脱出した。こうして戻ってきた人々の一部はフレスリウ収容所に入れられた[6]。

フレスリウ収容所　　フレスリウ博物館のホームページより

[6] フレスリウ収容所については、' Frøslevlejrens historie (1944-1945) ':http://natmus.dk/museerne/froeslevlejrens-museum/lejrens-historie/froeslevlejren-1944-1945/及び"The Frøslev Camp Museum – a WW2 prisoner of war camp': http://en.natmus.dk/museums/the-froeslev-camp-museum/

ケイトがフレスリウに到着した時、女性収容者は 50〜60 人ほどだった。が、後には増えて、150 人近くになった。女性たちは 8〜10 人が同じ部屋に収容されており、午前 6 時半から 7 時の間に起床し、1 時間後、4 列に並ばされ、金切り声をあげるドイツ人の警備兵の監視付きで鉄条網の向こう側にある食事用バラックに行進することから一日が始まる。男女のバラックは鉄条網で隔てられており、女性たちは靴下の修繕のような軽作業、男性たちは重労働をわりあてられた。ドイツ人は鉄条網越しに話すことを禁じたが、収容者たちはそれを無視して鉄条網の両方から包みや手紙をやりとりし、勇気を与え合った。収容人数が増えて食料配給が不足してくると、ケイトたちは配給物をとっておき、パンやソーセージ、パテを包んで有刺鉄線越しに男性の同志たちに送ったという。

ケイトは解放後まもなく、『ベアリングスケ・アフテンアヴィース（夕刊）』紙にフレスリウ収容所について次のように書いている。

> 私たちに襲いかかろうと待ち構えている不吉な雰囲気が、同志たちの運命の不確かさについての苦悶とともに、つねに漂っていた。拷問、病気、死、そして「ドイツへの移送」の知らせは、悪夢のようにフレスリウ収容所にまとわりついていた。兵士たちがバラックからバラックへと押し入り、ドイツ行きとなった人々の名前を叫ぶのは朝の 5 時か 6 時頃のことだった。噂はすぐに女性たちのバラックに届き、ゆらめく炎のように恐怖が私たちの心に宿った。自分の息子が、自分の夫が、自分の友人が連れて行かれているのか？ 私たちのうちの誰かが連れて行かれているのか？
>
> 暗く霧の深い冬の朝、私たちは鉄条網のそばに立ち、群衆のなかで最も近いバラックの入り口から出て行った人物の姿をなんとか見つけようとした。出かけていって別れの言葉を告げることが許されるのは稀で、親しい家族が出発するときに限られていた。「ニルス！さよなら、ニルス！」と女性が叫ぶと、霧のなかから大きくはっきりした声で「さよなら！すぐに戻ってくるよ」という答えがかえってきた。そうして男性たちはナチの強制収容所の地獄へと行進していくのだった。[7]

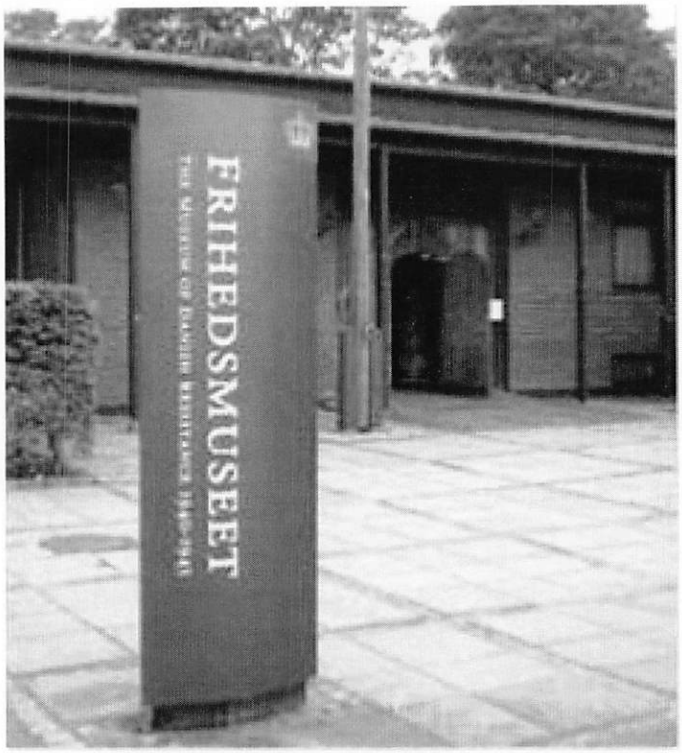
ケイト・フレロンは逮捕から 9 か月後の 1945 年 4 月 11 日に解放され、自由の身でドイツの降伏を迎えた。オーウ・スコックも、ケイトがコペンハーゲンに生還する少し前の 1945 年 3 月 21 日、英国の爆撃で破壊されたシェル・ハウスから脱出して無事だった。自由をとりもどし、愛する人々と再会したいというケイトの熱望は実現した。が、解放から数日も経つと未だ囚われているレジスタンスの同志たちを思い、罪の意識のような感覚に囚われた、とケイトは回想している。同志たちと一緒に解放の日を迎えられなかったのは、過ちだったのではないか？ 彼女は「自分が共同体を裏切ったように感じた」という[8]。

---

[7] Kate Fleronn, 'Blandt Kvinderne i Frøslev', in Berlingske aftenavis, 1945-05-11.
ケイト・フレロンは戦争が終わった後、『レジスタンス闘争のなかの女性』を出版し、そのなかに彼女自身のフレスリウ収容所での体験を書いた。

[8] 同前

レジスタンス活動を通して、ケイト・フレロンは変わった。保守的な家庭に育ち、かつては保守人民党に共感を抱いてその活動にいそしみ、保守派代表として『自由デンマーク』に参加したわけだが、バアウ・ホウマンやモーウンス・フォーのような共産主義者たちと共にナチス・ドイツに抵抗する地下活動を行い、戦争が終わる頃には保守派というより中道左派というような位置に立っていた。ホウマンたちとの友情は戦後に続き、ケイトは自身が共産党に入ろうとはしなかったものの、共産党との距離は近くなっていった。戦争が終わり 1945 年の夏に自由評議会が改称して「自由運動協議会（FrihedsbevægelsensSamråd）」が結成されると、ケイトもそのメンバーになった。彼女は編集者として戦後も『自由デンマーク』を引き続き発行し、それは 1982 年に停刊するまで、政府・政党から独立した自由な公論を喚起する雑誌として続くことになった。レジスタンスの最中にヨーロッパ各地に多数、レジスタンスの非合法誌が発行されていたが、戦後にこのように長く発行が続いた例は稀有だという。戦後のケイトが経験した別の大きな変化は、1949 年に事実婚の状態のオーウ・スコックとの間に娘リサが生まれたことである。オーウは戦後、『ベアリングスケ・ツーナ』紙、『ベアリングスケ・アフテンアヴィース（夕刊）』紙、『フレンスボルグ・アヴィース』紙などでジャーナリストとして働き、またレジスタンス博物館の幹事会長（1946-58 年）、占領下政治囚全国協会会長（1947-49 年）をつとめ、1968 年に他界するまでケイトの『自由デンマーク』発行を支えた[9]。



コペンハーゲンのレジスタンス博物館。筆者が訪問した翌年の 2013 年に火事で焼失。

なお、ケイト・フレロンは WIDF 調査団に加わる 1951 年まで、特に WIDF のメンバーとして活動していたわけではなかった。その彼女が WIDF からの招待に応じて朝鮮へ行ったのは、『自由デンマーク』の編集者として朝鮮戦争の現況を自分自身の目で確かめて記事を書きたいという念願があったからだろう。また、WIDF に対する興味もあったことだろう。WIDF は 1945 年、戦時下に生まれた反ファシズム・レジスタンスの国際的ネットワークを背景としてパリで創設され、1948 年には WIDF のデンマーク支部としてデンマーク民主女性協会（DDK)が結成されていた。DDK はアウネーテ・オルセン(1905 - 1990)

(9) 註(5)に同じ。

が会長、エレン・フーロプ(1871-1953)やヴォールフリッド・パームグレン・ モンクーピーター(1877-1967) らが理事をつとめ、男女平等の賃金や妊娠中絶の自由化といった女性の権利のための課題にも取り組んでいた。中心的な活動家の中には、インガ・ミレーデ・ノルデントフト(1903-1960)やルート・エリザベット・ヘアマン(1904-1973)のような、戦時下のレジスタンス活動の仲間たちもいた[10]。

仲間の見送りを受けるケイト・フレロン(右) とイーダ・バクマン(左)

第二章　WIDF 調査団唯一のオブザーバー

第 1 節　チェコスロバキア

WIDF 調査団に参加した女性のなかの 16 人は、最初の集合場所としてプラハに集まった。WIDF 加入団体であるチェコスロバキア女性同盟が調査団の受け入れ団体として各国の代表たちをもてなし、代表たちはプラハのアクロン・ホテルに宿泊した。先に到着した女性たちは次の合流点モスクワへ出発するまでの数日を、プラハやその近郊の見学などをして過ごした。ケイト・フレロンとイーダ・バクマンは、キューバのカンデラリア・ロドリゲス、英国のモニカ・フェルトンに続いてプラハに到着した。モニカは後に出版した旅行記に、初めて出会った時のケイトの印象を、「長身で色白で、とても綺麗だった。髪はカールして、バター色のフエルトの帽子に巻き込んでいた。細面で鼻筋が通ってとがり、

[10] DDK の女性たちについては、前掲の KVINFO の女性人名事典に詳しい。ルート・エリザベット・ヘアマンは、アウネッテ・オルセンが病気で会長職を退いた後、DDK の会長になった。

口が大きくてくちびるがふっくらしていた」[11]と書いている。

ケイトたちが滞在したとき、チェコスロバキアは大規模な粛正の最中であった。前の外務大臣ウラジミール・クレメンティスは前年の 1950 年に辞任させられており、どこかに連行されたまま行方不明であった。後に、クレメンティスは元党書記長ルドルフ・スラーンスキーらと共に「ブルジョワ民族主義・トロツキー主義・シオニスト」の国家転覆に関わった容疑で起訴され、1952 年 12 月 3 日処刑されることになる。ケイトは、人民民主主義の明るい未来を標榜するプラハにあって、その水面下に粛正が進められている緊迫感を感じとっていた。ケイトは後に発表されたチェコスロバキア滞在記の中で、イーダ・バクマンやモニカ・フェルトンと泊まったアルクロン・ホテルについて、そして「プラハにいることの不快」について、こう書いている。

> 後日、私は『ポリティケン』紙（デンマークの新聞）の一面でチェコの治安警察はアルクロンのすべての部屋に盗聴器を設置しているという UP 電の記事を読んだが、私たちの何人かは壁の中にマイクが仕掛けられているとは疑いもせず、デンマーク語や英語で大声でプラハにいることの不快さを言い募っていた[12]。

クレメンティスの消息が途絶えたのは不気味なことだった。「国民が崇拝していた人物の一人、民主プラハの政府公舎に掲げられた横断幕から慈父のような目で大衆を見下ろしていた男が一夜にして犯罪者に変わってしまう」。ところがプラハでは誰もが人民民主主義革命を礼賛し、「西欧資本主義や米帝国主義」に協力する「敵」や「裏切り者」の摘発は感謝してしかるべきこととされている。ケイトは、チェコスロバキア女性同盟の上品で教養ある女性たちが毎日 WIDF 調査団を賓客としてもてなしてくれることに感謝しつつも、居心地が悪く、ソ連と東欧人民民主主義を手放しに礼賛する物言いに閉口し、うんざりすることもあったようだ。戦時下の米軍によるチェコスロバキア爆撃の被害やチェコスロバキア難民に対する英国の冷遇の数々を聞かされて、ケイトは「まるで戦争中のあなた方の敵はドイツじゃなくて、米国や英国だったようだわね」と皮肉に応えたことがあった。国をあげて盛大に平和プロパガンダが行われ、ケイトは「スターリンとゴットワルトと平和のために」という乾杯とスピーチで息をつくことができないほどで、「大きなポスター、飛び立つ鳩、横断幕で目眩がする」ようだった。ジョギング中の若者たちに「何のために走っているの？」と聞くと、「平和のためです」と大真面目に返事をされて唖然とする場面もあったという。5 月 1 日のメーデーは「平和」をテーマに公的な祝賀行事が催され、クレメンティスの後任ゴットワルトによる朝鮮に関する演説で集会が始まったが、「見たところ誰もその話を聞いていなかった。もっとも、『米占領軍と戦う朝鮮人民への熱い連帯のメッセージ』が終わると、莫大な拍手が巻き起こった」と、ケイトは冷めた目で観察していた[13]。

---

(11) Monica Felton, That's Why I Went, Lawrence & Wishart, 1953, p.26.
(12) Kate Fleron, 'På rejse i den anderen verden. Nogle indtryk fra Tjekkoslovakie'（別の世界への旅ーチェコスロバキアからのいくつかの印象）, in Frit Danmark, Årg.10, nr.6(1951).S.12-16:12-13 頁
(13) 同前、13 頁

もっともケイト・フレロンはチェコスロバキアに対して悪感情だけを抱いたわけではなく、好意的な印象をも書き残している。初日の午後に訪ねた工業都市ゴットワルドフでは住宅水準の高さに気がついた。そして、「温泉、タトラ山のホテル・プラハ、そしてカルルスブルンという名のもう一つの海辺の町への訪問が、社会主義に向かう社会へのこの短い訪問の中で最も豊かなものとなった」(14)という。なぜなら、そこではふつうの労働者とその家族が、かつて特権階級だけが利用できた保養地の豪奢なホテルで休暇を過ごし、幸せそうに見えた。「上層階級の人々だけが享受することができる喜びについて感じる暗い不快感から解放されるという経験ができたことは良かった」と、彼女は振り返っている。

ケイト・フレロンはWIDF調査団の中で不偏不党のオブザーバーに徹する決心だった。プラハに集合した16人の女性が話し合い、朝鮮で見るべきものに関する合意文書を準備しようという意見が出てきたとき、モニカ・フェルトンは事前に合意文書を作ることに強く反対を唱え、政治的な立場や見方が異なる女性たちが構成する調査団なのだから、同じ物事を見てもその解釈が一致するとは限らない、と主張した。もちろん合意のできることなら署名するが、合意ができるかどうかは保証できない、と。他の代表たちからもそれに賛成の声が出た。特にケイトはモニカの意見に賛同し、モニカ以上にはっきりと合意文書の作成に反対した。自分自身が共同文書に署名することによって、いかなる党派にも属さない独立したオブザーバーとしての立場がそこなわれることを危惧していたからである。16人の間のもう一つの論点は、北朝鮮だけでなく南朝鮮をも視察地域に含めるかどうかということであった。ケイトとモニカは強くそれを望んだ。プラハでの話し合いに関する限り、他の女性たちも可能なら追求してみるべきだと考えているようだったという(15)。

第2節　ソ連・中国

調査団の次の合流点はモスクワであった。ケイト・フレロンのソ連滞在記には、体制の如何とは別の、穏やかで暖かく優しいロシア人気質に魅せられたことや、デンマークの孤児院と大差ないモスクワ郊外の孤児院を見学したこと、クレムリン宮殿のこと、見事な地下鉄やボリショイ劇場で鑑賞したバレエの感激などが書かれている。モスクワの地下鉄については、「（これは）人民への新しい社会の贈り物であり、かつては上流階級だけが宮殿のなかで楽しんでいた豊かさや喜びを享受するのが今では自分たち人民の順番なのだということを大きく保障するものとみなさなければならない」(16)と評している。バレエ「赤い罌粟」については絶賛し、「その才能、美しさ、想像力、壮大さのそろい踏みに心を奪われた。劇場は満員だったが、誰もがこの最後のきわめて民族的で国際主義的な、ロシア人と中国人の共産主義の宣言の場面では誰もが立ち上がった」(17)と賛辞を贈っている。このような滞在記から窺うことができるのは、彼女が教条的で硬直したスターリニズムに対

(14) 同前、16頁
(15) Felton, op.cit., pp.35-36.
(16) Kate Fleron, 'Spredte indtryk fra en rejse i den anderen verden. II. Genfindelser og opdageiser i Moskva Kate'(別の世界への旅ーモスクワの復興と発見）, in Frit Danmark, Årg.10, nr.7(1951).S.5-8: 7-8頁
(17) 同前、8頁

しては不快感や警戒心を持ちつつも、国々の政治体制の選択以前にそれぞれの国に存在する民族文化の持つ価値や平等と民族解放の実現をめざす社会主義諸国の努力に対しては賛辞を惜しまない、フェアな精神の持ち主だったということである。このバレエに贈られた称賛と共感は、それぞれの民族の解放はそれぞれの民族自身によってしか担われないが、その解放の闘いは国境を越えた連帯によって支えられているというケイト自身の所信の表出であり、その所信は彼女自身のレジスタンスの体験に発するものだっただろう。

それでもモスクワ滞在中にケイトの「オブザーバー」でいることへの決心に変わりはなかった。モスクワではソビエト反ファシズム女性委員会の副会長マリア・オブシアンニコワも加わって 17 人で相談会が行われたが、南朝鮮訪問をめぐって意見は対立した。ケイト・フレロンとモニカ・フェルトンは国連に調査団の南朝鮮訪問を認めるように求め、南朝鮮へ行けるよう試みるべきだと主張した。が、オブシアンニコワはそんな考えを馬鹿げているとみなし、プラハでケイトやモニカに同調していた女性たちも態度を変え始めた。モニカは後に、そうした意見対立のために一時は調査団は何一つとして合意に達することができそうにないように思われたほどだった、と回想している[18]。

中国の瀋陽で中国人の李鏗・白朗・劉清揚とベトナム人のリティクェが合流し、WIDF 調査団 21 人全員がようやく集合した。が、その最初の会議の場でプラハやモスクワから持ち越されていた争点が一挙に表面に出て、激しい言葉のやりとりになった。ケイト・フレロンとモニカ・フェルトンは、調査団は真相調査を目的に組織されているのだから、調査の実施前に合意文書を作ったり共通の立場を表明したりするべきではない、と強く主張した。他方、中国の白朗やソ連のオブシアンニコワ、そしてカナダのノラ・ロッドたちは、「朝鮮戦争がアメリカ帝国主義による侵略であり、その占領下で朝鮮人民が虐殺蛮行被害を被っている」のは明白な事実であり、調査団がそのような立場を採るのは当然のことだと考えていた。議論は紛糾したが、オブシアンニコワが歩み寄る発言をしたことを契機に、調査団は「真実を発見すること」という共通の目的に向かって旅程の打ち合わせや編集委員の選定といった具体的なプロセスに入ることができた[19]。

写真中央は李鏗、一番右はモニカ・フェルトン。空襲直後の安東。

ケイト・フレロンとモニカ・フェルトンの感覚や考え方は似ており、二人とも共産党員でもなければ WIDF のメンバーでもなく、西欧の民主主義的価値に親しんでおり、様々な立場の女性たちが調査団を構成しているこ

(18) Felton, Op.cit., p.49.
(19) Ibid., pp.64-71.

とに高い価値を感じていた。しかし、報告書の編集に関しては二人のスタンスに違いがあった。編集者であり作家でもあるメンバーとしてケイトも編集委員の候補に挙がったが、オブザーバーの立場をとると決意していたケイトは辞退した。無責任な部外者の位置に留まろうとしたからではない。ケイトは戦場の真実を曇りなく自分の目で確かめるために、そうすることが必要だと考えていたのである。その一方、モニカは自分から立候補し、編集委員に加わった[20]。

WIDF 調査団は瀋陽から寝台列車で夜に出発し、未明に朝鮮との国境への町・安東に到着した。米軍の空爆は中国領内にも及んでおり、安東の街も大きな被害を受けていた。駅につくやいなや、ケイト・フレロンはすぐに「既視感」を感じたという。

> 戦時中の暗い街、何か起こる気配、静かな怒声、武装した兵士、迎えられジープへと護衛されるときのピリピリした行動。通りを通る急ぐ速度。私はこれらをすべて知っていた[21]。

戦禍が及んでいた中国・朝鮮国境は、第二次世界大戦下にナチス・ドイツによって占領された母国の暗い日々を彷彿とさせたのである。

第三章　WIDF 調査団の朝鮮訪問

第 1 節　新義州と平壌

調査団が鴨緑江を渡り、最初に踏みしめた朝鮮の土地が新義州である。彼女たちは新義州で市長と市民から概況の説明を聴いた後、数人ずつに分かれて空爆で廃墟と化していた新義州のあちこちを歩き回った。ケイト・フレロンはイーダ・バクマンと連れ立って、人々の生活を自分自身の目と耳で感じとろうとした。大人たちは見慣れない白人女性を見つけると興味をもって自分から話をしに来たり、家を焼け出されてから仮住まいをしている防空壕の中に招き入れてくれたりしたが、子どもたちは怖がって、彼女たちが近づくと逃げていってしまう。そこで初日からケイトたちは一包みのお菓子をプレゼントし、子どもたちと仲良くなることを思いついた。モニカ・フェルトンが離れた所に立って見ていると、ケイトとイーダが、小さな男の子の手をひいて赤ん坊をおんぶしている女の子にプレゼントの包みを渡して話を聞いていた。後でケイトとイーダに聞くと、その女の子は 6 歳で、空襲で家を失った後、家族は防空壕で暮らしていた。母親は爆撃で死に、父親は一日中働いているので、その女の子が赤ん坊と 3 歳になる弟の世話をしているのだという[22]。

---

(20) Ibid., pp.71-72.
(21) Kate Fleron, 'Spredte indtryk fra en rejse i den anderen verden. IV.Kvinder i det nye Kina'（別の世界への旅ー新中国の女性たち）, in Frit Danmark, Årg.10, nr.9(1951).S.11-15: 15 頁。
(22) Felton, Op.cit., p.92-93.

絶えず空襲警報が響くような状況のなか、安全のために調査団の移動は夜間に行われた。朝鮮民主女性同盟は、WIDF 調査団が活動拠点として使うことができる「本部」として、平壌の近くの場所に施設を手配していた。女性たち 21 人は暗くなってから新義州を出発し、発見されにくいように互いの間隔を大きく開けた数台の車両に分乗して「本部」に向かった。モニカ・フェルトンとノラ・ロッドが乗ったジープは溝にはまったり道に迷ったりとトラブルが続いて長い時間がかかったが、それでも未明に「本部」に着いた。ところがケイトとイーダの乗ったジープは溝にすべりこんで動けなくなり、二人は近くの村まで歩くほかなくなった。幸運だったのは、彼女たちがその村の村長の家で数時間眠ることができ、さらに翌日の午前中に住民たちと交流するチャンスを得たことだった。村長はドイツ語ができ、通訳も引き受けた。同日午後にケイトたちが調査団「本部」に合流すると、村人たちの名前と話を記録したノートをひっぱりだしてモニカたちに見せ、聞き取った内容を聞かせた。それは米軍占領中の女性への拷問やレイプ、食糧の破壊など、信じたくない内容であったが、ケイトもイーダも村人たちから聞いた話を疑っていなかった[23]。

モニカ・フェルトンによれば、WIDF 調査団の「本部」は平壌から 24 キロほど離れた郊外にあったが、その場所に居ても雷鳴のような空爆の音が聞こえ、爆弾が炸裂する閃光が見え、頭上の屋根が振動するのを感じたという。WIDF 調査団はこの「本部」で、安東まで通訳たちを伴って調査団を出迎えた韓興珠、朝鮮民主主義人民共和国の文化宣伝相であり新義州で調査団を迎えた許貞淑と再会し、朝鮮民主女性同盟の朴正愛とも初めて顔をあわせた[24]。調査団の女性たちはここで新義州に関する報告を文書にまとめている[25]。

朝鮮民主女性同盟会長 朴正愛　右:文化宣伝相 許貞淑

「本部」から平壌市への移動も夜間であったが、5 月 18 日の夜から 19 日の未明にかけて空襲が続いたため、やむをえず一行は防空壕へ退避し、そこで日が昇るのを待った。5 月 19 日は丸一日を平壌で過ごしている。牡丹峰では破壊された仏寺を訪ねた。彼女たちはここで、許貞淑の父親であり、日本植民地支配時代から抗日民族解放運動家であり、当時金日成総合大学総長であった許憲から話を聴き、柔和な人柄の許憲が取り返しのつかない文化財の破壊に悲憤する姿に接している[26]。調査団は、広々とした田園の中にある寺の位置から判断して、米軍の爆撃機が何か他の目標を狙っていたとはとうてい信じられなかった。平壌では大学や学校、博物館、さらに病院も空

(23) Ibid., p.98-109.
(24) Ibid., pp.111-112.
(25) 新義州に関する報告は、WIDF 調査団報告書の第 1 章である。前掲『国連軍の犯罪』205-208 頁。
(26) Felton,Op.cit., p.112.

襲の被害にあっていた。病院は赤十字の印がついていたにもかかわらず焼夷弾を落とし、そのために焼け死んだ患者たちもいたという。調査団一行が平壌に滞在した 5 月 19 日だけで 5 回の警報が鳴り、その同じ日に約 1 週間前に落とされた時限爆弾が 3 つ、調査団のメンバーと地方組織の代表が話し合っていた場所のすぐ近くで爆発した。平壌はいたるところ廃墟であった。調査団は 4 グループに分かれて 4 時間近く市の様々な場所を訪れたが、その間誰一人として四方の壁と屋根のある家を一軒も見なかった。防空壕暮らしの平壌市民たちからは米軍占領中のさまざまな恐ろしい体験を語られた。米軍がオペラハウスやその付近の住家を軍用娼家にして朝鮮の女性を街頭から拉致して連行したという証言や、女性団体のメンバーが性的な拷問を受けて惨殺され、その幼児まで生き埋めにされたという証言も聞くことになった。調査団は翌日「本部」に戻り、このような調査内容を 21 日付の報告文書にまとめている[27]。

Delegationen holder møde i landsbyen uden for Pjen-Jang, hvor vi havde hovedkvarter. Ved bordet sidder fra venstre: den belgiske dr. Hannevart, Ida Bachmann, formanden, mrs. Rodd, Pak-den-Ai, den koreanske demokratiske kvindeorganisations præsident, englænderinden Monica Felton og den franske delegerede mde. Gilette Ziegler.

平壌郊外の WIDF 調査団の本部にて。テーブルの左からベルギー代表アンナヴァツ、イーダ・バクマン、ノラ・ロッド、朝鮮民主女性同盟会長 朴正愛、英国のモニカ・フェルトン、フランス代表ジーグレル

(27) 平壌に関する報告は、WIDF 調査団報告書の第二章である。前掲『国連軍の犯罪』208～215 頁。

第2節　平安南道

5月22日から24日にかけて調査団は北朝鮮の4地域に分散して調査を行った。ケイト・フレロンとイーダ・バクマンはフランス・ベトナム・アルジェリア・チュニジアの代表たちとともに平安南道を調査するグループに入り、江西や南浦を訪ねた。

ケイトは後に、「南浦は人々への災厄に私たちが最も強烈な衝撃を受けた都市だった」と書いている。米軍占領中に1,600人の朝鮮人が殺害されたという南浦では、米軍撤退の後も空爆が続いていた。調査団訪問の3週間ほど前にも激しい爆撃があり、ケイトたちは生き残った人々の無残な姿にふれ、瓦礫の中を少し歩く度に、家族を失った住民たちの悲痛な声を聞くことになった。永洞里とよばれる町の一角は焼野原となり、どの家族も数人、多い場合は10人もの家族を失っていた。彼女はこう書いている。

> 「両腕がない、ぼろを着た、汚れた男性が私たちの前に立って話したことを私たちは誰も決して忘れないだろう。彼の声は最初は小さかったが、次第に大きくなり、復讐の叫びと変わっていった」。
>
> 「ぼろを着た子どもたちをもつ家を失った母親、そして子どもを失った母親がいた。3週間足らず前までは一緒に暮らしていた家族を失った孤児たち、年配の女性たちや男性たちがいた」。
>
> 「廃墟の下の死体からのぼる吐き気を催させるような臭いが町中に漂い、ワゴンが通ると爆撃された道路にほこりが厚い雲のように吹き上げられていた。私たちがそこにいるあいだに二度、瓦礫の山が崩れるようなドーンという音がした。子どもたちがそれに登っていて、一緒に崩れ落ちたのだった。あまりにも危険な場所だった」。

非軍事施設を軍事攻撃の標的とすることは国際法違反である。しかし、ケイトたちは南浦で「軍事的標的が破壊された後も米軍の空爆は終わっていない－この町が瓦礫の山となり、人々がわずかにもっているぼろ着をまとい壕や洞窟のなかで暮らすようになったときでさえも」という事実を彼女自身の目で見たのである(28)。

調査団は、米軍を信じた人々の悲運に関する証言も得た。南浦のプロテスタント教会の牧師ホ・ヨンユク（46歳）は、「米軍が撤退して中国軍が来ればキリスト教徒が迫害される」、「原爆が落とされる」といった宣伝や噂を信じて米軍と共に南へ逃れようとしたキリスト教徒たちが、教会が用意した船に乗り込んだところ甲板で米軍機から銃撃を受けて殺されたと語った。教徒たちは、これは何かの間違いだと思い、祈りの言葉を捧げ、賛美歌を歌ったが、銃撃はやまず、多数の教徒が死傷したという。牧師は朝鮮語で話し、通訳がそれを英語に翻訳したのだが、この通訳はある箇所で翻訳に困り、言葉につまり、「牧師は『その日はソドムとゴモラのようだった』と言ったのですが、私はクリスチャンではないのでどういう意味かわかりません」と話したという(29)。ケイトが報告記事の中でそん

---

(28) Kate Fleron, 'Rapport fra Nord Korea: Korea er brændt - hus for hus', in Frit Danmark, Årg. 10, nr. 4, juli 1951.p.10.
(29) Kate Fleron and Ida Bachmann, 'Grusomme udryddelseskrig - i Korea, Den':

な通訳の不手際にも言及したのは、もちろん「ソドムとゴモラ」という火炎の中で世界が滅亡するイメージが印象的だからだろう。が、「住民が何を語ったとせよ、通訳者が政治的に好都合な内容に変えて伝えたのだろう」という類の邪推への対抗として、彼女は通訳事情にもふれておこうとしたのかもしれない。通訳者に騙された愚か者として調査団を嘲笑するような態度は実際にしばしば帰国後の調査団員がでくわした反応だったのだが、彼女たちにとってそれはすこぶる心外であったに違いない。調査団は通訳を介した言葉だけを鵜呑みにしたのではなく、朝鮮語で語る人々と通訳者の双方の口調や表情や態度にふれ、人間的な交流の中で話を聴いたのであり、通訳者たちが分からないときは分からないと伝えられた。「ソドムとゴモラ」の音は確かに聞き取ることができるが意味は分からなかったという通訳者のエピソードからは、そんな通訳事情の一端も見えるのである。

ケイト・フレロンたちが訪ねた江西郡では、新井面[30]の集団墓地の調査も忘れがたいものになった。案内をした人民委員長李良淑は、1950 年 10 月 20 日から 12 月 7 日までの米軍占領期間に 1561 人が殺され、そのうち 1384 人は銃殺、354 人は 8 歳以下の子どもであり、57 人は絞殺、50 人は生き埋め、35 人が殴殺、さらに 35 人が焼殺されたと報告している。米軍に死体を埋める穴を掘らされた農民たちもいた。彼らの知らせを受けて、米軍の退却後、住民が同胞たちの埋められた穴を掘り返し、WIDF 調査団の訪問までに 300 体の遺体の身元を確認し、それらを集団墓地に移して埋葬していた。ケイトたちは犠牲者の母親、妻、父親、子どもらに連れられて新井面の墓地を訪ねた。山を登ると台地があり、小さな数多くの埋葬塚があった。キム・ウンイク（30 歳）は夫の塚を指し示し、民主的な教員であった夫は山に隠れたが米軍に見つかって殺され、彼女自身も米軍に捕らえられ、1 か月ものあいだ夫の居場所を訊問され、毎日殴打されたと話した。「米軍がやったというのは確かですか？」と確かめると、彼女はそんな愚かな質問をされるとは思ってもみなかったという顔つきでケイトたちを見つめ、「もちろんです。米軍です」と答えた。「あなたを殴ったのも米軍ですか？」と重ねて尋ねると、やはり同じ答えが返ってきた。キム・クムスン（61 歳）も夫、娘、娘婿が眠る墓地を指さして、米軍が家に来て 3 人を連れ出して殺した、と話した。占領軍の撤退後、死体が埋められていた穴を掘り出すと、娘は銃で、夫と娘婿は銃剣で殺害されており、その両手は切り落とされていた。彼女もまた、殺害したのは米軍だと断言し、「私たちはこの辺りで李承晩軍を見たことがありません。ここにいたのは米軍だけです」と話した。彼女たちの話から調査団は、米軍が朝鮮のレジスタンスのリーダーだとみなした人々だけでなく、その人々の家族をも「人質」として捕まえ、拷問や処刑をしていたことを悟った[31]。

Information, 1969-12-03.

[30] 新井（신정　シンチョン）は、1929 年に桐林面・豊井面および新興面の一部が合併して発足した平安南道江西郡の面である。現在は、甑山郡に編入されている。他方、黄海道には信川（신천　シンチョン）という地名があり、発音が似通っているため紛らわしい。
WIDF 調査団報告書は、デンマーク語の表記では Shin Cheng(新井）と Shinchen（信川）とを分け、チェコスロバキアでは表記が Cín-Cun(新井）と Síncen（信川）と異なっているが、英語版では、両方とも Sinchen であり、区別されていない。日本語版では江西郡の新井面についても「信川面」と表記しているが、これは誤りである。

[31] Kate Fleron and Ida Bachmann, 'Grusomme udryddelseskrig - i Korea, Den' in Information, 1969-12-03

その台地と道をはさんだ向こう側にある泰昌山では、調査のために墓地の内部を自分の目で見ることになった。泰昌山だけでも八つの集団墓地があり、その一つは長さ 80 メートル、もう一つは 70 メートルと、死体を二段に積み重ねるのに十分であった。ケイトたちはその墓地の中に、腐敗した遺体が二段に並べてあり、遺体は手を後ろ手に縛られており、いくつかの頭蓋骨が打ち砕かれているのを見た。その外貌や衣から地域の朝鮮人の遺体であることは明瞭であった。泰昌山にケイトたちを連れてきた女性の一人、タン・プクトン（44 歳）は穴を掘り返して近親者を発見した時の話をした。彼女の兄弟の遺体は、頭を膝の間につっこんで、手は背中で縛られたまま座っている状態で見つかった。目をひらいた死体、背中に赤ん坊をくくりつけたまま殺された母親など、あまりにも怖しかったのでまともに見ることさえできなかったと語った。キム・キスン(58 歳）という農夫は、息子と義理の娘と孫たちが自分が隠れている間に生き埋めにされた、と証言した。彼は後からその場所を探し出し、手を背中でしばられている死体を自分で掘り出したという(32)。

後にケイトは、「その遺体は、北朝鮮軍に殺された南朝鮮の人々の遺体だったのだろう」といった類の邪推に反駁して、もしそうだとしたら集団墓地に調査団を案内した人々もまた南朝鮮の人々だったはずだと、次のように書いている。

> これらの集団墓地、そして北朝鮮のいたるところにあるすべての集団墓地に埋められているのは、北朝鮮人に殺された南朝鮮人かもしれない！それならば、耐えがたい腐臭がする墓地のそばで私たちと並んで立っている途方に暮れた人々は、南朝鮮からやってきた犠牲者の家族でなければならない。夕方に村の郊外の畑で私たちのまわりに腰を下ろしていた人々も同じことになる。そこでは茫然としている人もいれば、泣き叫ぶ人もいた。(33)

そこに眠る近親者のことを話した人々の慟哭、憤怒、悲嘆に直にふれたケイトは、この人々が真実を語っていることを五感で感じ取った。WIDF 調査団は当時から今日まで「中国や北朝鮮の言うことを信じて騙された愚か者」といった冷笑を浴びせられることがしばしばだが、調査団が信じたのには信じるだけの理由があったのである。

---

(32) 前掲『国連軍の犯罪』231～240 頁。平安南道を訪問した調査報告書は、WIDF 調査団報告書の第四章である。
(33) 'Rapport fra Nord Korea', Op.cit., p.11.

第四章　帰国後のケイト・フレロン

第1節　冷ややかな反応

デンマークに帰国したケイト・フレロンは、朝鮮の戦禍を人々に伝える活動に取り組んだ。モニカ・フェルトンが英国に帰るやいなや英国政府によって開発公社総裁の地位を追われたというニュースはデンマークにもすぐに伝わった。ケイトはモニカの解雇を「西側の自由という民主主義政治の理想が今では蝕まれている証拠」だと受けとめ、「もはや西側の人々が自らのリベラリズムへの信念や共産主義的独裁に対する倫理的精神的優越性を論じても、その主張を真剣に受けとめることはできない」と強く非難し、朝鮮の現状に関する最初のまとまった記事を『インフォメーション』紙（6月16日）に寄稿した(34)。同紙は、『自由デンマーク』誌と同じく、占領下のレジスタンス時代から発行が続いていた新聞である。ケイトはさらに英国の労働党系の『ニュー・ステーツマン』誌にも投稿し、モニカが一貫してWIDF調査団の調査が公正なものになるように尽力した事実、彼女が韓国訪問を希望しながらも技術的理由から断念せざるをえなかった事情を明らかにした(35)。

ケイト・フレロンが朝鮮における米軍の戦争犯罪を弾劾したことは、英国のモニカ・フェルトンの解職とあいまってデンマーク国内でも物議をかもし、親米的な人々からの憤慨や攻撃や冷笑的な反応をも呼び起こした。リベラル左派とみなされ、ケイトの記事を掲載した『インフォメーション』紙でさえ、同日の別の紙面に、「ケイト・フレロンは吊るし首にされるべきか？」というセンセーショナルな表題でフェルトンの解職とそれに対するケイトの批判を揶揄するような記事を載せている。それは、「フェルトンを絞首刑にしようというような考えはまったく不条理であり、そんな主張は取り下げられることになるだろう」と言う一方、モニカ・フェルトンの解雇が西側の自由を掘り崩し、自由を高揚させる可能性を損なうものだというケイトの意見を「大袈裟でバランスに欠ける」と一蹴し、「自分たちはケイトのような憤怒も無念も感じていない」と言明し、「フェルトンは旅に出かけ、見てきたことを世界に発表することができたが共産主義国では同じようなことはできなかったであろう」、「私たちが生きる社会の基本的要素に反対する人は、その社会のための政治的職務に就くことができると期待すべきではない」と述べる。他方、モニカやケイトが言うことを確信的共産主義者の発言のように受けとるのもバランスに欠けるとし、「彼女たちは戦争と呼ばれる恐怖を目撃したが、その戦争の原因、そしてその目標、すなわちより大きな恐怖を防ぐという目的を見落としている。彼女たちは石をたたく子どものようだ。そして自身の不器用さと欠点によって、最後には自分たち自身を傷つけてしまうのだ。しかし、子どもたちは吊るし首にされることはない」と文を結んでいる(36)。

重大な議論を「女・子どもの幼稚なたわごと」のように扱う社会の女性差別主義的風潮に、ケイトは怒り心頭に発したことだろう。それから18年余り後、ベトナム戦争が大きな社会的関心を集めていた時期に彼女はこう書いている。

---

(34) Kate Fleron, 'Slutningen og begyndelsen paa en rejse til helvede（地獄への旅の終わりと始まり）', in Infomation, 1951年6月16日）
(35) Kate Fleron, "Mrs. Monica Felton', in New.Sttatesman, 7 Jul 1951
(36) 'Bør Kate Fleron Hænges?', in Information,　1951-06-16.

「1951年に朝鮮戦争を間近で経験した私たちは、現在のベトナム戦争について読むと奇妙な感じがする。残酷さと虐殺は同じだが、西側の反応はまったく異なっている。人々はもはやかつて起こったようなやり方を支持していない。米国やイギリスの政府でさえ、ソンミ村虐殺に関する目撃証言に眉をひそめている。1951年には誰も目撃者たちを気にとめなかった。彼女たちは生命を脅かされ、職を取り上げると脅かされ、ある者は監獄に送られ、総じてまったくあてにならない人々だと宣告された。見てきたことを語った私たちは、もちろん「単なる」女性だった。女性たち、買収されない女性たちはそれだけで私たちの世界では「世間知らず」だとされた。」

「ナパーム弾、焼夷弾、時限爆弾などを使った大規模爆撃や火を消すために水を汲みに出かけようとした人々への銃撃など私たちがいたるところで目撃した建物や人間に対する破壊・殺戮は、それが自分たちの手を血まみれにする行為ではなかったとしても、ジェノサイドとみなされるべきであり、大虐殺と呼ばねばならない」。

「北朝鮮の外務相は、米国がその旗の下で戦争を遂行している国連にこれらの爆撃について報告した。国連からの返答はなかった」。

「また、女性調査団は全世界に向けてその報告書を発表したが、そこに述べられている事例を調査するそぶりを見せる政府はなかった。国連でさえそうだった。

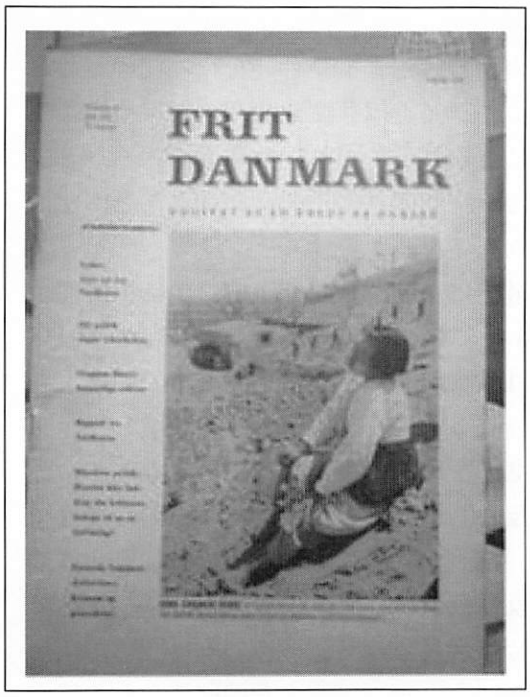
何百万人もの人々ー米国の人々でさえーが、朝鮮での戦争についての私たちの情報に心を動かされた。しかし、マッカーシズムの時代には、政府やマスメディアはマッカーサーの司令部と米国からのメッセージと一致した情報に従わねばならないと感じていた。それがドイツによる占領とそこへの服従からの解放からわずか6年しか経っていないデンマークでも起こったことは見るにも苦々しかった。」(37)

第2節　朝鮮戦争に関する講演・記事・図書

それでもケイト・フレロンとイーダ・バクマンの朝鮮報告に真剣に耳を傾ける人々もまた確かに存在した。二人を送り出したデンマーク民主女性協会やモーウンス・フォーやバウア・ホウマンらのような共産主義者たちはもとより、朝鮮戦争を憂慮して平和を願う多くの人たちもまたケイトたちの話を聴きたがった。トーマス・クリステンセンが『パシフィステン(平和主義者)』紙に書いた記事によると、7月4日にはオーフスで、Mellemfolkelig Samvirke（国際協力のための NGO)がケイトとイーダを招待して講演会を催し、そこに600人から700人にのぼる人々が彼女たちの話を聴きにやってきた。イーダは、米国にも国連にも一国の内戦に介入する権利はないと主張し、北朝鮮に対する戦争が朝鮮の民間人を攻撃している実態を話し、あらゆる外国の軍隊の撤退を訴えた。ケイトは、自分は懐疑的な態度をもちながら朝鮮へ行ったが、実際に自分の目で見たことによって、朝鮮における戦争が人道にもとるものであると言わざるをえなくなったということを強調した。彼女は空襲を避けるための夜の移動がどのようであったか、家や病院さえ破壊され尽くした廃墟でどのように人々が生きているかを目に浮かぶように語り、朝鮮における戦争は国連が

(37) 'Grusomme udryddelseskrig', Op.cit.

関与しているがゆえに私たち全員に責任がある、と訴えた。クリステンセンは、彼の記事の中で「私たちは自分たちの責任を果たし、ケイトに続こう。私たちは戦争を終わらせ、民間人への蛮行を禁じるジュネーブ条約が実施されるように活動しよう」と呼びかけた。そしてケイトとイーダがデンマーク人の反省と責任性を喚起した価値を強調し、デンマークの大半の新聞が彼女たちの意見を否定したり歪めて伝えている、と批判した(38)。



このような人々に励まされつつ、ケイトは『自由デンマーク』誌上にWIDF調査団で朝鮮を訪ねた報告を発表した。7月号の表紙にはうちひしがれる朝鮮人女性の写真と、「無慈悲な爆撃で子どもたちを失えば誰でも彼女と同じだろう」というキャプションがみえる。この号にはケイトが訪ねた平安南道の報告に加えて、江原道や慈江道に行ったグループの報告も収録された。8月号はモニカ・フェルトンたちが訪ねた黄海道の安岳や信川の調査報告が載っている。その表紙には、幼い孫を抱える老婦人の姿が載り、キャプションには、彼女の息子は殺され、娘は虐待を受けたために病臥しているという説明があり、この老婦人に会った調査団メンバーが写真の裏に書いたメモも紹介されている。「これは娘の子どもです-----布で巻き付けられているその子は、肉が落ちているようでした。母乳がなく、食べ物を与えることができない」と。これらの記事は、1951年末までに一冊の単行本『北朝鮮：破壊された国からの報告』にまとめられ、コペンハーゲンのホッフェンスベルスケ社から出版されている（Nord-Korea: Rapporter fra et Hærget Land, København, Det Hoffensbergske Etabl, 1951）。その後も、日本の植民地支配と朝鮮民族解放闘争を紹介する記事「知られざる朝鮮より」（『自由デンマーク』11巻2号、1952年、10-12頁）や「南朝鮮における朝米対決」（『自由デンマーク』

(38) Thomas Christensen, Krigens sande ansigt（戦争の真実の姿）, in Pacifisten. Juli 1951 s.80 デンマーク平和アカデミーのホームページ :http://www.fredsakademiet.dk/tid/1900/1951/juli/juli114.htm

1953 年 9 号 15-18 頁）などの記事を書くとともに、図書『北朝鮮: 1951 年の世界の果てへの旅』(1952)といった単行本も刊行している（Fra Nordkorea：Indtryk fra en rejse til verdens ende, foretaget i maj 1951. Helge Kühn-Nielsen Privattryk, 1952）。

WIDF 調査団への参加は、第二次大戦下のレジスタンスの経験を通して保守派から中道へとシフトしていたケイト・フレロンが、さらに左派へとシフトする契機になった。冷戦の激化を背景に、かつて親しかった富裕市民層の人々の多くが西側の冷戦政治と折り合いをつけていったことに失望し、ケイトは共産党やその大衆組織の主張や運動にさらに近くなり、共産党に入ろうとはしなかったが、共産党やその同調者たちとの友情は深まった。

ケイト・フレロンの本の表紙
Fra Nordkorea：Indtryk fra en rejse til verdens ende, foretaget i maj 1951.
（北朝鮮：1951 年の世界の果てへの旅）
Helge Kühn-Nielsen Privattryk, 1952

本節の最後に、朝鮮戦争停戦協定調印の直前、1953 年 6 月にコペンハーゲンで開かれた WIDF の世界女性大会について述べておこう。この大会には 67 か国から 611 人の女性が参集したが、WIDF を共産主義者が後援する組織とみなす冷戦の風潮を反映し、西側の女性団体からの参加は少なかった。主催国デンマークの WIDF 加盟団体である民主女性協会は、前年 1952 年にルート・ヘアマンが新たに会長になり、多数の女性団体に招待状を送っていた。が、西側の女性団体からの反応は概して消極的だったのである。ケイト・フレロンは、世界女性大会の会場では西側諸国の代表が自国の女性の闘いとその成果にふれず、東側諸国の代表が誰も自国に関していかなる点も批判しなかったことを「悩ましい」と感じ、「残念なことにこれは東側諸国の代表たちの通常の、めったに破られることのない態度であり、東側諸国の代表は皆政府と一体であり、西側諸国の代表は皆自国の政府に反対しているというのが大会の状況で、それが公正でバランスのとれた大会という印象を損ねた理由である」と考えた(39)。しかしケイトにとって重要なのは参加団体の東西バランスではなく、国境を越える女性の連帯の内実であった。彼女はコペンハーゲン世界女性大会をふりかえる記事の中で、インドネシアからやってきたハディプラボウド夫人のことを共感をこめて紹介している。ハディプラボウド夫人はインドネシアの中では共産党とは対立する人民党に属しているが、ケイトとの個人的なうちとけた対話の中でコペンハーゲン世界女性大会に対する大きな共感と満足を語ったという(40)。ケイトは世界中の女性たちが、これまで帝国主義と人種差別主義のために閉ざされていた国境を超えて結集したことに大きな価値を見出していたのである。

大会期間中、元 WIDF 調査団の女性たちは、「朝鮮訪問から 2 周年」を記念して、2 日

(39) Kate Fleron, 'Møde med en ny verden. Tanker omkring K.D.Y.s internationale kvindekongres', in Frit Danmark, Årg.12, nr.4(1953).S.9-10, 14-15
(40) 同前

目の夜、大会を休んでケイトの家に集った。ケイトが招待主として、豊富な美酒やごちそうをゲストに振舞い、乾杯の音頭をとった。中国代表団としてコペンハーゲンにやってきた白朗は、その集まりについてこう記録している。

> ケイトは各人の杯に酒をついでまわり、自分の杯を高く上げて言った。
> 「今日は世界で最高の友人が私の家に来ていただきました。心から最愛の友人たちを歓迎します。私は、朝鮮に行った体験を一生忘れられません。そして私たちの戦闘の友情を忘れることはできません…」と言いながら、真心のこもった涙が流れた。彼女は、1杯目の杯で涙を飲み干し、続いてまた第二杯目をつぎながら言った。
> 「私は偉大な中国を忘れることはできません。中国の貴重な支援がなかったら、私たちの任務はこんなにうまく成し遂げることはできなかったでしょう。白朗さん、中国のため、乾杯させてくださいな」
> 全員が杯をあげた。全員の視線が私の顔に集中した。私たちの祖国に対する愛と敬意がこめられていた！ 特に、次から次へと称賛され、私は中華民族の謙虚という伝統―自己表現に慣れていないーを受け継いでいたが、私の愛する祖国を誇りに感じずにはいられなかった。(41)

白朗が回想するこのエピソードを通して、ケイト・フレロンがWIDF調査団への参加と朝鮮訪問が自身にとっても重大な価値のある経験になったと意識していたことがよく分かる。ケイトが調査団においてオブザーバーの立場を選択したことは、当初はWIDFとの距離感や懐疑の念の表現でもあっただろう。しかし、ケイトはその調査活動に協働した世界の女性たちと友情を深め、朝鮮から帰ると精力的に朝鮮の平和のために活動し、コペンハーゲン世界女性大会の最中には元調査団の仲間たちを自宅へと招いて再会の場を用意する主役になったのである。

帰国後のオーフスにおける報告会でケイト・フレロンが強調したように、一切の予断を排して調査団にオブザーバーとして参加したケイトは自分自身の目で朝鮮の戦禍を確かめたのであり、それだけいっそう彼女の朝鮮報告には迫力と説得力があった。彼女は彼女自身がオブザーバーであることを通して、WIDF調査団が予め報告内容が定まっているような形骸的集団でなく、様々な立場の女性が真実の探求のために一致協働する生命力ある集団として形成されるのに寄与し、彼女ならではの立場からWIDF調査団が見出した朝鮮戦争の実態を世界の人々に伝えることに貢献したのである。

(41) 西田千津訳／白朗「遠方の友を懐かしむ」『アジア現代女性史』第10号、2015年、120頁。

(終わりに)

ケイト・フレロン・ヤコプスンは、政治的立場の違いを超えて人々が団結してナチス・ドイツと闘ったレジスタンスの精神を第二次世界大戦後にも守り続けた。大戦後、冷戦の激化を背景に、ファシズムを経験したデンマーク社会にあってもレジスタンス時代の協働精神が失われていったことに苦渋を感じていたケイトは、西側の冷戦政治に埋没していくかつての保守派の仲間たちに落胆する一方、『自由デンマーク』に依拠し、左派の友人たちと共に活動を続けた。

1951 年の WIDF 調査団はケイトにとってもう一つの転機になったと言えるだろう。朝鮮訪問以降、ケイトは世界各地に展開する抑圧された人々のレジスタンスと国際連帯運動にいっそう関心を向けるようになり、1960 年代から 70 年代にかけてはデンマーク共産党よりもラジカルな論陣を張るようになる。ベトナム戦争時代、ケイト・フレロンはデンマークのラッセル法廷に参加したメンバーになった。ラッセル法廷とは、英国の哲学者バートランド・ラッセルらの提唱によって開かれた、ベトナムにおける米国の戦争犯罪を裁く民衆法廷である。1966 年 11 月に設立され、67 年 4 月にスウェーデンのストックホルム、同年 11 月にデンマークのロスキレで開催され、数々の具体的証拠を挙げて、米国の有罪を宣告した(42)。ケイトは 1969 年には朝鮮へ二度目の訪問を果たしている。米国の帝国主義的介入に対抗するジャーナリスト国際会議に出席したのである。そのとき彼女は平壌で、ロスキレのラッセル法廷で出会ったウィルフレッド・バーチェットと再会している。この国際会議に 100 人以上が参加していたが、その中で朝鮮戦争最中に朝鮮に来たことのあるジャーナリストはケイトとバーチェットだけだった(43)。ケイトはまた 1971 年にはスカンジナビア女性代表団として北ベトナムのハノイを訪問している。

ケイト・フレロンのベトナム反戦運動は、WIDF 調査団参加当時の朝鮮に平和を求める運動とまっすぐにつながっていた。彼女は米国のベトナム戦争が朝鮮戦争で行われたジェノサイドの再現であり、日本や韓国を巻き込んでベトナムに介入を続ける米国が再び朝鮮戦争を再燃させかねないと指摘し、ベトナム戦争の停戦と朝鮮の平和的統一を支持して活動し、朝鮮やベトナムに対する米国の帝国主義的介入を批判する記事を次々に発表した。「アジア人はアジア人どうし戦わせよ」(『自由デンマーク』1965/1966 年 4/5 号 8-10 頁)、「朝鮮・米国・日本」(『自由デンマーク』1967/1968 年 6 号 10-12 頁)、「朝鮮を見よ!」(『自由デンマーク』1968/1969 年 10 号 7-9 頁)、「北朝鮮再訪」『ポリティケン』1969 年 10 月 28 日フレロンとバクマン「恐るべき絶滅戦争 ベトナム戦争のモデルとしての朝鮮戦争」『インフォメーション』(1969 年 12 月 3 日)、「板門店のパンサーたち—非武装地帯の米兵たちの間で」『自由デンマーク』28 巻 8 号(1969・1970 年)などである。また 1971 年には、ウィルフレッド・バーチェットの英語の著作『朝鮮再訪』をデンマーク語に翻訳し、出版している。また、1976 年から 1977 年までデンマーク・ベトナム協会の議長をつとめた(44)。彼女はこれらの国際的な社会連帯活動によって高い評価

(42) 'Russell Tribunal in Fjord Villa': http://kulturstroeg.dk/russelltribunalet-i-fjordvilla
(43) Kate Fleron, ' Efterskrift', in Willfred Burchett, translated by Kate Fleron, Korea igen : Overs : fra Again Korea : Rhodos, (1971), p.217.
(44) 'DVF' s første formand er

を得て、1972年にPH賞、1976年にホーチミン記念金章を受賞している(45)。

以上に述べたとおり1951年のWIDF調査団は、ケイト・フレロン・ヤコプスンがジャーナリストとして、著述家として、また活動家として高い評価を受け、歴史に足跡を残した冷戦時代の国際連帯活動の起点になったとも言えるのである。

---

dødˈ（「初代会長の死去」）:デンマーク・ベトナム協会:http://www.davifo.dk/sites/default/files/userfiles/file/pdf/vn-ajour2006-2-nekrolog-kate-flereon.pdf

(45) 註(4)に同じ。

ケイト・フレロン・ヤコプスンの著作と資料

フレスリウの女たちの中で
『ベルリンスク・アフテンアヴィース（夕刊）』1945年5月11日

ケイト・フレロンは吊るし首にされるべきか？
『インフォメーション』1951年6月16日

北朝鮮からのレポート：朝鮮が焼き尽くされている
『自由デンマーク』(10巻4号) 1951年7月

別の世界への旅　ーチェコスロバキアの印象
『自由デンマーク』(10巻6号) 1951年9月、12-16頁

別の世界への旅Ⅱ　ーモスクワでの発見と再発見
『自由デンマーク』（10巻7号）1951年10月、5-8頁

新しい世界との出会い　ーWIDFの世界女性大会から考えたこと
『自由デンマーク』1953年4号　9-10頁、14-15頁

朝鮮での恐るべき絶滅戦争　ーベトナム戦争のための手本
『インフォメーション』1969年12月3日

＊本文中の註はレアケ・シュタイマンによる。
＊これらの記事とともにあった写真については、それらのキャプションのみを訳出した。
＊……の部分は、英語原稿が欠落している部分。推測できる訳語は【　　】で挿入した。

Blandt Kvinderne i Frøslev

フレスリウの女たちの中で

'Blandt Kvinderne i Frøslev' : Berlingske aftenavis. :1945-05-11
『ベルリンスク・アフテンアヴィース（夕刊）』1945年5月11日

ケイト・フレロン　著
レアケ・シュタイマン／池田高巌　訳

4月11日、私はフレスリウの収容所から解放された。私の強い願いは実現され、再び自由の身となった。愛しい人々と再会するという何か月間も夢見てきたことがついに現実のものとなり、デンマークのブナ林で春を迎えたいという深い願いはかなえられた。私は幸福だというべきではないだろうか！ 最初の数日はほとんど私が信じてきたとおりであった。しかしその後、当初はかすかな不安と感じていたものが、次第に私のまわりに網を広げはじめた。私は束縛され遠ざけられているように感じ、理性が認識を拒絶するある奇妙な罪の感覚にとらわれた。あらゆる合理的な想定にもかかわらず、戦争が終わる前に解放され、それゆえにフレスリウ収容所の運命が決まる最後の不確かな時期に同志たちと一緒にいられなかったことは、私の過ちだったのではないか？ そうした時期が－秋に、冬に、そして約束された春の日差しのなかで－やってくるというのが、バラックのまわりを一緒に歩いている私たち皆の思考の焦点だったのだ。私は自分が共同体を裏切ったように感じた。私は偶然によって収容所の外に出ることができ、アネモネやレンギョウが忘れないだろう肖像にとって代わった。フレスリウはこの新しく発見され呼び戻された日々の生活の背後にある影のかかった現実となった。

今では私が有刺鉄線よりも強い何かで縛られていたことを認識しているが、収容所に存在しているということは奇妙なもので、その閉ざされた境界線のなかでは、非常に多くのことを心に抱くのだが、そのようなことは他の場所では決してないだろう。普通の市民的なふるまいが通用しないこの場所では、人間や事件が新しい言葉で言い表されている。ドイツとの国境から数キロのここでは、人々は「どちらを選ぶべきか」というスローガンの下で生きていた。

逮捕されたとき、私はフレスリウ収容所のことをあまりよく知らなかったが、その位置は危険を感じさせた。情勢が要求するならば、囚人たちは南に移送されるのではないか？ 疑いなくそのような計画はあった。しかし、西刑務所の情報機関がトイレの壁に刻んだメッセージが希望を与えた。それは「フレスリウを恐れるな」、「デンマーク人は偉大な自由を提供する」と書かれていた。それは頼もしく思えた。40時間の眠れない旅を経て最終的にこの収容所に到着したとき、私は失望した。さびれた平野のなかの暗い松林に面した黒がかった茶色のバラックが、降り注ぐ雨にかすんで見えた。なんとも悲しい光景ではないか？ いや、しかし、何か月も柵の付いた窓から雲がただよう灰色の空を眺めていただけの人々にとっては

ひとつの啓示であったのだ。その木造のバラックにはドアに取っ手があり、内も外も好きなように歩くことができて、宮殿のようだった。寝台に横たわると……クリームをいっぱいにのせた……とドイツのバターや焼いた豚肉を挟んだパンがあり、星が輝く夜空が見え、私は自分の経験に満足するところだった。松林から吹く静かな風は私にほとんど完全な自由の幻想をもたらした。しかし、それは壁に沿ってせわしく動く警備塔からのサーチライトの光線によって突如としてさえぎられることになる。ーそこで私は自分が囚人であることをあらためて思い出すのだった。

西刑務所に数週間から数か月いた後にフレスリウに送られたほとんどの人々、オデンセのフスマンズ高校やヘルスィングウーアのヴィベア、あるいは全国の他のドイツのひどい監獄にいたほとんどの人々にとって、新しい環境は大きな改善であった。十分な食料があり、必要な人には特別な配給もある。新鮮な空気があり、共同生活がある。私がこの収容所に到着してまもなくの頃、ある若い少女がこの収容所にいるくらいなら西刑務所に戻ったほうがましだわ、と言った。私は彼女の態度がまったく理解できなかった。しかし後にー彼女と同じ意見にはならなかったがーその考えは変わった。ある人々にとっては絶えず 8 人から 10 人の女性たちと同じ部屋にいることはとても苦痛なのだということが分かったからだ。そうした人々は刑務所での生活に戻ることをむしろ望んでいた。私たちのほとんどはときおりこの世界から隠れることさえできないという絶望に襲われた。

これはフレスリウの同志愛の裏側だ。フレスリウでは鎖でつながれているわけではないが、隠してきた感覚が抑えきれなくなり、涙がまぶたの裏側を熱くするときに都合の良い場所がない。行くことができる唯一の場所は、有刺鉄線の張られたフェンスの南角にある砂利の山だけだ。一人にはなれないが、そこにさびしく立ち、なんとか自分をコントロールしようとたたかうのだ。その無言の背中は、近づいてくる人を脅かすように挑戦的だ。

私たちがフレスリウに到着したとき、そこには 50〜60 人の女性がおり（最終的には 150 人近くになった）、互いに隣接するふたつのバラックに分けられていた。男性用の大きな収容所は鉄条網で分けられていた。

ドイツ人はフェンス越しに話すことを禁じたが、それはしばしば破られ、包みや手紙が有刺鉄線を行き来した。ドイツ人は好きなように脅したり罰を与えたりすることができたが、そのやりとりを止めることはできなかった。それはフェンスを隔てた双方に大きな勇気を与えた。

女性たちはフレスリウで何をしていたのか？ ほとんど何もしていなかった。ベッドを整え、交替で部屋を掃除し、かまどに火を入れる。これが毎日、あるいは 10 日毎に続くのだ。それ以外にはバラック全体の掃除に関係にした仕事がある。…2 週間に一度床を洗う。その他に女性囚だけの雑用として、収容所の靴下の破れ目の修繕があった。靴下は信じがたいほどいっぱい穴が開いており、つま先やかかとの部分がなかったり、時には上部がないものさえあったけれども、つぎあてをする場所の要領を飲み込めば、たいした仕事ではない。収容所の衣服を登録する事務所もあった。

収容されていた 5 か月間のうち、私は毎日 3 時間この仕事をした。ドイツ人の警備員にとっては私たちがすべきことを見出だせないということは日々の悩みだった。彼らは時折り、すぐに洗濯を始め、収容所の衣服を分類して洗い始めるように言っていた。国立博物館の審議官エレン・アンデルセンがその長に指名されたが、彼女がその責任をこなすことができた

のかどうかは証明されなかった。計画を開始すべきこの技術的専門者はついに現れなかった。こうしてドイツ人は女性囚人が何もしないということを受け入れざるをえなかった。

私たちは午前6時半から7時の間に起床した。1時間後、4列に並ばされ、金切り声をあげるドイツ人の警備兵ードイツ人兵士はいつも金切り声をあげていたーにガードされて、有刺鉄線の張られたフェンスの外に連れ出される。私たちの収容所のメインの道路を下って前方にある部屋に行く。そこが食事用のバラックだった。他の食事の時間は午後1時ごろと午後6時ごろにあった。西刑務所での噂は間違っていた。食事は悪くはなかった。私たちによい食料を提供してくれたデンマーク政府のたゆまぬ努力に感謝したい。朝食は……ミルクと砂糖の入ったオートミールのお粥、パン、ライ麦パン、コーヒーだった。昼食は甘いスープ、バターミルクスープ、トウモロコシのプリン、野菜スープなどで、夕食にはぶつ切り肉やレバーの伝統的な食事*1で、ある週は魚、その次の週には豚肉とサヤエンドウ、白キャベツ、緑キャベツなどの炒め物が交互に出た。日曜日には焼肉を食べることができた。夕食にはパンとチーズと2、3の添え物がついた。バターは欲求を満たすのに十分なほどあった。夕食にはビール、ミルク、紅茶がテーブルに並んだ。収容所は1,000人を収容するように造られていたので、収容者が2,000人かそれ以上になると食料が不足してきた。肉体労働をする男性は空腹をしのげなかったが、私たちにとっては配給はそれでも十分だったので、私たちは配給物をとっておき、パンやソーセージ、パテを包んで有刺鉄線越しに男性の同志たちに送った。

私たちはどのように時間をつぶしていたのか？ 収容所の言葉で言われているように、本を読んだり、縫い物をしたり、編み物をしたり、カードに興じたり、バラックの周りをぶらぶらしていたのだ。私たちは何時間も重い泥のなかを歩き回った。自分の仲間内では何年過ごしてもおそらくは知ることができないような人物を知るのはこのそぞろ歩きのときだ。フレスリウでは……な抑制に囲まれた生活はなく、関係は他人によって決められる。ここはすべての社会的境界線が取り払われているひとつの社会なのだ。

男も女も皆、「dus」になった。*2 外部の日々の状況は、夕食の肉を手に入れたり、ガスの配給を確保したりすることよりも大きな問題に直面しており、人々は慣習を捨て、自分たちが最も必要としていること、すなわち連帯を欲した。そのため会話は豊かなものになった。それはあれこれの女の会話ではなかった。彼女たちはよく現状を耐えしのぐ方法、未来に向き合う方法を見出そうとした。「もし私の息子が死んだら。もし夫が処刑されたら。もしドイツに送られることになるとしたら」ーこれは絶望の叫びに聞こえるだろうか？ そうではない。それはもっとも悪い可能性に正面から向き合い、もしそれが起こったときに備えようとする真剣な試みなのだ。それは不幸に打ち克つ力を強めようとするものだった。それが無駄ではなかったということは明らかだ。フレスリウで泣き声を聞くことは滅多になく、神経質な発作もなかった。ドイツ軍が息子を射殺したという知らせを受け取った女性たちは一言こう言った。「デンマークのために死んだ息子の母親であるということは誇るべきことじゃない」。

---

*1 Forloren hare, Frikadeller という食べ物

*2 以前はデンマーク人は、知らない人を丁寧な「De」で呼び、友達や家族は「du」で呼んでいた。親しくなって、「De」ではなく「du」で呼ぶようになることを「At blive dus」（dus になる）と言う。

もし好奇心の強い男性が午後3時から4時のあいだにH17とH18のバラックに立ち寄ったとしたら、すべての部屋の女性たちがパンを焼き、紅茶を飲んでいるのを見て、ここは17歳から70歳までの女性のために居心地のよいペンションだと思うかもしれない。私たちがよく寄宿学校の生徒のようだと感じていたように、それはまったく間違っているとは言えないかもしれない。ただひとつ違うのは、私たちの世話をする厳格な教師ではなく、ドイツ兵がいることだったが、なんとかしてその目を盗みだまそうとするという点では同じだった。私たちは時々、何時間も恐れや不安をすべて忘れ、学生時代以来なかったほど笑い転げた。それは良いことだった。しかし、私たちに襲い掛かろうと待ち構えている不吉な雰囲気が、同志たちの運命の不確かさについての苦悶とともに、つねに漂っていた。拷問、病気、死、そして「ドイツへの移送」の知らせは、悪夢のようにフレスリウ収容所にまとわりついていた。兵士たちがバラックからバラックへと押し入り、ドイツ行きとなった人々の名前を叫ぶのは朝の5時か6時頃のことだった。噂はすぐに女性たちのバラックに届き、ゆらめく炎のように恐怖が私たちの心に宿った。自分の息子が、自分の夫が、自分の友人が連れて行かれているのか？ 私たちのうちの誰かが連れて行かれているのか？

暗く霧の深い冬の朝、私たちは鉄条網のそばに立ち、群衆のなかで最も近いバラックの入り口から出て行った人物の姿をなんとか見つけようとした。出かけていって別れの言葉を告げることが許されるのは稀で、親しい家族が出発するときに限られていた。「ニルス！さよなら、ニルス！」と女性が叫ぶと、霧のなかから大きくはっきりした声で「さよなら！すぐに戻ってくるよ」という答えが返ってきた。そうして男性たちはナチの強制収容所の地獄へと行進していくのだった。

11月28日に移送されてきたときには、10人の女性の名前がリストに挙げられていたが、ナチの親衛隊少佐がドイツにある自分が管理する収容所にこれ以上女性を送ることを許可しなかったので、その名前は削除された。12月11日、この同じ女性たちは釈放を言い渡された。しかし、1時間半後、彼女たちの喜びは終わりを告げた。釈放というのは誤りで、彼女たちは西刑務所に送り戻されることになっていたのだった。彼女たちは12月14日にそこからドイツへ移送された。なぜこの10人だったのか？ 誰もそれに答えることはできない。彼女たちの前や後の多くのケースがそうであったように、彼女たちはゲシュタポの犯罪的な気まぐれの犠牲者であったのだ。

フレスリウの女性たちは初期のころは、非合法活動に関与した容疑の女性か、自由の戦士の代わりに人質とされた女性だけだった。しかし、末期には政治囚の収容所に何もしていない若い女性たちの集団も混じっていた。彼女たちはドイツ国防軍の兵士に伝染病をうつしたか、ドイツ兵から何かを盗んだか、あるいは他の何らかの方法でドイツ国防軍の信頼を損ねた女性たちだった。この収容所のゲシュタポの責任者はこうしたドイツからの女性を使って女性バラックの状況についての情報を手に入れようとした。しかし、彼女たちはそのためには愚かすぎたので、結果は良いものではなかった。彼女たちの存在はきわめて不快だったが、しかしこうした女性たちはフレスリウの【収容者たち】に影響を与えたり、私たちの喜びと悲しみの連帯を妨害しようとしたりはしなかった。このことは私たちの同志的関係の擁護すべき忘れがたい部分だった。

「すぐにすべてが終わる」ーこの言葉で互いを励ますことができなかったことがどれほどあっただろう。今ではすべてが**終わっている**。そして誰もが家路につこうとしている。緑の

ブナ林と花咲き実を結んだ木々があなたを待っている。

Bør Kate Fleron hænges ?

ケイト・フレロンは吊るし首にされるべきか？

Information. - 1951-06-16
『インフォメーション』1951 年 6 月 16 日

無署名記事
レアケ・シュタイマン／池田高嶽　訳

あるイギリス下院議員が、労働党の女性党員で女性調査団とともに北朝鮮を訪問してきたモニカ・フェルトンを大逆罪で告訴すべきだと主張している。イギリスの法律では、大逆罪の唯一の刑は絞首刑である。この主張は真剣に検討されることになるという。

この最後の部分は信じがたい。モニカ・フェルトンが絞首刑にされることはおそらくないだろう。しかし、絞首刑に向けた理論的な論証が提唱されるだろうことは大いにありうることだ。なぜなら、反逆行為に関するイギリスの法律は 1351 年に遡るといわれているが、そこでは、反逆者とは「王国内にいる国王陛下の敵の味方であり、王国内であれどこであれ敵を支援している者たち」と述べられているからである。フェルトン夫人はまた、ある意味でイギリスが目下ほとんどの国連加盟国とともに戦っている北朝鮮の共産主義者を支持・支援しているモスクワのラジオで自分の北朝鮮への旅について語っている。

しかし、もし反論が法律の分野に持ち出されるならば、北朝鮮はイギリスによっても国連の活動に参加しているどの国によっても国家として認められておらず、イギリスと戦争を行っているわけでもない。

他方、攻撃に対する国際正義を主張するために、北朝鮮に対する十字軍が続いているが、それは世界平和を脅かしてきたし、今も脅かし続けている。
それはともかく、フェルトン夫人を絞首刑にしようというような考えはまったく不条理であり、そのような主張は取り下げられることになるだろうと指摘するだけで十分であろう。

しかし、モニカ・フェルトンが北朝鮮に関するコメントのためにイギリスの小さな町スティーブニッジの都市計画委員会の委員長職を解雇されたという事実はどうなるのか？ フェルトン夫人と共にこの旅をおこない、今日その旅の印象を描いた最初の記事を『インフォメーション』に掲載している編集者ケイト・フレロンは、この解雇は西側の自由のすべての防衛線を掘り崩し、全体主義の共産主義国とは対照的なこの自由を高めるすべての可能性を傷つけるものだと考えている。彼女は、この解雇に続いて、西側世界で他にも同じようなことが起こるならば、民主主義と全体主義独裁にはもはや何の違いもないと信じているようにさ

え思える。

ケイト・フレロンの主張はおおげさすぎると思われるかもしれない。というのも、単純に言って、モニカ・フェルトンは実際に旅に出かけ、見てきたことを世界に発表することができたが、共産主義国では同じようなことはできなかったであろうからである。またさらに、私たちが生きる社会の基本的要素に反対する人は、その社会のための政治的職務に就くことができると期待すべきではないからだともいえるかもしれない。

しかし私たちは、怒りと残念さ、あるいはその双方の欠如をはっきりとさせるためにこう書くのだが、人々はフェルトン夫人の運命の帰趨に関係した動員をおこなうことができる。民主主義国は、それが独裁国で用いられているのと同様の手法を原則的に受け入れないと主張し続けるならばより強いものになる。そうした手法がますます使われ、それがしばしば起こり、民主主義により多くの汚点がつくならば、それは私たちが戦い追い出そうとしている制度にますますよく似たものになる。

したがって、ケイト・フレロンが私たちの自由あるいはその欠如と東側諸国における自由の欠如を同一のものとして特徴づけていることは、ほとんど信じられないほどバランスを欠くものである。彼女や彼女と意見を同じくする人々のように、民主主義への奇妙にもナイーブで絶対的な要求をもっている人々もいるようだ。もしそれが汚点をもっていればーそしてもちろんそれには汚点もあるのだがー、それはそれ自身を自由な民主主義と呼ぶ権利を失い、それはすぐに完全に暗黒と同一視されてしまうのだ。

Rapport fra Nord Korea: Korea er brændt - hus for hus :

北朝鮮からのレポート：朝鮮が焼き尽くされている

『自由デンマーク』(10巻4号) 1951年7月
Frit Danmark, Årg. 10, nr. 4, juli 1951.pp.9-16.

ケイト・フレロン 著
レアケ・シュタイマン／池田高巌 訳

これまで私は記事や発表で朝鮮滞在中に私自身が見聞きしたことだけを描いてきたが、この記事では『自由デンマーク』の読者に、朝鮮の異なる場所への三日間の旅の後で共通の集合場所ー平壌郊外のある小さな村ーに戻ってきたときに調査団の他のメンバーが報告したことを短く要約して紹介したい。

『自由デンマーク』8月号での安岳その他の場所からのレポートの引用で、朝鮮についての話は終わる。そのレポートはイギリス人の調査団メンバー、モニカ・フェルトン夫人の参加を得て完成された。

調査団とその構成についていくらかの説明をしておこう。調査団は国際民主女性連盟によって募集された。私たちは朝鮮民主女性同盟議長の許貞淑および朴正愛が代表する北朝鮮政府から招待された。許貞淑は約10年間にわたって日本に対するパルチザン戦争に参加した。朴正愛は12年間、日本人がつくった収容所に入れられていた。

調査団はカナダ、キューバ、アルゼンチン、アルジェリア、チュニジア、イギリス、デンマーク、オランダ、ベルギー、フランス、イタリア、東西ドイツ、オーストリア、チェコスロバキア、ロシア、ベトナム、中国の18か国を代表していた。中国からは3人が調査団に参加したが、それはデンマークを除いて複数名の代表が参加した唯一の国だった。

調査団の個々のメンバーは、その描写に多くを費やそうとは思わないが、端的にいって、自分の責任を自覚する女性たちだった。そのうちの幾人かは戦争とレジスタンス運動の経験があり、ごくわずかのメンバーを除いてそのほとんどは研究者だった。

調査団（通訳と写真家を含め総勢27人）は朝鮮に到着すると、まず第1日目を鴨緑江のそばの新義州という都市で過ごし、夕方に平壌近郊まで200キロ以上の長距離をジープで移動した。私たちは皆、まだ戦争の被害を受けていない小さな村ーこの村は主要な道路から遠く離れた所にあり、木々に覆われていたので空から探査されていなかったーで宿泊した。平壌に滞在している間に私たちは3グループに分かれた。さらに、4つのワーキング・グループに分かれて南部、東部、北部とそれぞれ異なる場所に向かうことになった。

私たちはその後再び村に集まり、ともに故国に戻った。私たちは5月16日から17日にかけての夜に朝鮮に到着し、12日間の滞在の後、5月28日から29日にかけての夜に朝鮮を離れた。

訪問したすべての都市で、私たちは同じものー廃墟と人々の悲惨ーを目撃し、同じことーあまりにも悲劇的な話と人間の粗野さーを聞いた。そしてどこでも、私たちは同じことー信じがたい絶え間ない戦争の恐怖ーを経験した。

今朝あなたの家が爆撃され、母親が焼け死んだとする。しかし、それだけではまだあなたが損失と悲しみによってこの戦争に犠牲を捧げたことを意味しない。戦争はさらなるものを欲する。1時間もしないうちに、かれらはあなたの子どもたちが遊んでいる廃墟を爆撃するかもしれない…。あるいは井戸で水を汲もうとしていたあなたの父親にマシンガンの銃弾が撃ち込まれるだろう。

平和が訪れるまでは、それでも十分ではない。それはすぐに起こるだろう。

イーダ・バクマンと私がアルジェリア、チュニジア、フランス、ベトナムからの調査団メンバーとともに訪れた黄海に面する南浦からのレポートで、私が朝鮮で経験したことを報告したい。

南浦の恐怖

南浦は人々への災厄が私たちに最も強烈な衝撃を与えた都市だった。戦争前、この都市には6万人の市民がいた。南浦は1950年10月22日から12月5日までアメリカ軍に占領された。平安南道の地方政府の委員長ソク・チャンナム（石昌男）がその数を私たちに教えた。占領期間中、占領軍は1,511人の人々を殺した。その半数以上は女性と子どもたちだった。

南浦は新義州や平壌と似ていたーつまり**廃墟と化していた**ーが、平壌のように系統的に破壊されたわけではなかった。12月5日に撤退したとき、占領軍はいくつかの建物を燃やし、

そこにあった食糧を破棄するか持ち去っただけだった。

南浦は爆撃の標的にされてきたが、もっともひどい爆撃は**今年の5月6日のもので、イーダ・バクマンと私がこの都市を訪問したのは、それからまだ3週間も経っていないときだった。**

南浦で私たちが経験したのは恐怖の一日だった。人々は最後の爆撃からの興奮がまだ冷めやらないでいた。私たちが行き、立ち止まった場所では、一群の人々が私たちについてきた。人々は私たちの近くに集まり、彼らに起こった不幸ー親しい者を失ったことや家が破壊されたことーを私たちに語った。

ほこりと死体の臭いを通して

いたるところに廃墟、貧困、悲しみがあったが、とりわけ永洞里とよばれる町の一角は、不幸の頂点に達していたように思われた。この地区は坂の途中にあり（むしろ「あった」といったほうがよい）、3週間前には花咲いていたアカシアの木々が今では煙突とともに黒焦げになって光っており、それが灰と瓦礫の上にある唯一のものだった。

「この丘は墓地に変わってしまった」と生存者の一人が言った。「ここで暮らしていたすべての家族はそれぞれ3〜4人、多い場合は10人の家族を失った」。

わたしたちはこれまでは抑制を解き放った激しい怒りに出会わなかった。朝鮮人は通常、その不幸を抑制された態度で表現する。しかし、ここでは違っていた。両腕がない、ぼろを着た、汚れた男性が私たちの前に立って話したことを私たちは誰も決して忘れないだろう。彼の声は最初は小さかったが、次第に大きくなり、復讐の叫びと変わっていった。

家を失った、ぼろを着た子どもたちをもつ母親、そして子どもを失った母親がいた。3週間足らず前までは一緒に暮らしていた家族を失った孤児たち、年配の女性たちや男性たちがいた。

その日はとても暑い日で、廃墟の下の死体からのぼる吐き気を催させるような臭いが町中に漂い、ワゴンが通るとほこりが爆撃された道路に厚い雲のように吹き上げられていた。私たちがそこにいるあいだに二度、瓦礫の山が崩れるようなドーンという音がした。子どもたちがそれに登っていて、一緒に崩れ落ちたのだった。あまりにも危険な場所だった。

ある人は、朝鮮には一定数の重要な軍需産業があり、1950年8月31日に6時間にわたって徹底的に爆撃された南浦の大規模な肥料工場も軍需製造施設に転用が可能だった、と思うかもしれない。300人の労働者が死んだのはひどいことだが、この爆撃や他の疑わしい工場への爆撃には反対しがたい、と言う人もいるかもしれない。しかし、**軍事的標的が破壊された後もアメリカ軍の空爆は終わっていない**ーこの町が瓦礫の山となり、人々がわずかなぼろ着をまとい壕や洞窟の中で暮らすようになった時点でもーという事実と折り合いをつけることは難しい。

南浦で私たちが宿泊した場所は市庁舎がかつてあった丘の洞窟だった。調査団メンバーのうちの2人はひどい病気だったが、とにかく旅に同行した。彼女たちはにんにくの臭いがする小さな部屋で椅子に座って快適でない日を送らなければならなかった。しかし、外の日光とほこりと破壊された町の臭いの中にいることのほうが一層ひどいことだった。

しかしここで、私たちがやってきて滞在するのに苦労した他のすべての場所と同じように、**私たちが**数日間でこの地獄から抜け出すことができたことに感謝しなければならない。しか

し、朝鮮人はそこで暮らさなければならないのだ。

翌日、私たちは信川面の集団墓地を訪問した。アメリカ軍**第24歩兵連隊**が10月20日から12月7日までこの地方を占領していた。

死の谷の集団墓地のそばで

この日の私たちの経験は、悲しい塚、埋葬塚に囲まれたある山の中腹で始まった。山腹を取り囲む集団墓地の遺体のなかで身元の分かっているものはほとんどない。

どのような人々が処刑され、これらの墓地に投げ捨てられたのか？ 疑いをかけられた人々だ。しかし、誰が疑われたのか？ 私たちのまわりには多くの人々、近くの村の住民で、この墓地に埋められた人々の近親者たちがいた。調査団はかれらの話や名前を記録した。

その記録から逮捕がどのような手続きをとって行われたのかが分かる。アメリカ軍は連行してきた人々をレジスタンス運動のメンバーだと非難した。親戚が朝鮮人民軍に属しているだけでそのようにみなされた。次いで、アメリカ軍は彼らが農民組合、女性団体、協同組合など、ソ連による朝鮮占領の時期に設立されたか、それらを引き継いだ朝鮮政府が設立した団体のメンバーだと強く疑った。人々がそのような団体に属していなかったとしても、容疑者を逮捕するまで人質として拘束した。私たちは重ねて、逃げてきたこれらの人々や墓の中に一人あるいは何人かの近親者を発見した人々に話を聞いた。彼らの中には自分で墓を掘り返した人もいた。

卓伏同という44歳の女性は、頭を膝につっこんで、手は背中で縛られたまま座っている兄弟の遺体を発見した、と私たちに語った。

金基順という58歳の農夫は、息子夫妻とその子どもたちが生き埋めにされた、と語った。彼自身は息子たちが埋められたのと同じ地区に隠れており、地元の人々に助けられた。地元の人々はアメリカ軍に集団墓地を掘らされていた。金基順は息子たちを見つけたが、彼らはすでに死んでいた。

私たちが訪れた集団墓地は泰昌墓という山にあった。長さは80メートルで、死体は二段に積み重ねられていた。山のいたるところに同じような墓地があると私たちは教えられた。それはまさに死の光景だった。身元が確認されたのはわずか数人の遺体だけだった。その遺体は谷の向こう側に移され、塚の下に埋葬された。

遺体と血まみれの衣服

これらの墓地に埋められたのがアメリカ人なのか、それとも朝鮮人なのか、私たちははっきりとは分からなかった。そこで、人々はいくつかの遺体の覆いをとって私たちに見せた。それは疑いなく朝鮮人だった。私たちは後ろ手に縛られた遺体、砕けた頭蓋骨、血まみれの衣服、靴、縄切れを見た。少し離れたところに別の埋葬塚があり、そこには20人の子どもの遺体が埋められている。私たちは子どもたちの遺体を見なかった。

これらの集団墓地、そして北朝鮮のいたるところにあるすべての集団墓地に埋められているのは、北朝鮮人に殺された南朝鮮人かもしれない！ それならば、耐えがたい腐臭がする墓地のそばで私たちと並んで立っている途方に暮れた人々は、南朝鮮からやってきた犠牲者の家族でなければならない。夕方に村の郊外の畑で私たちのまわりに腰を下ろしていた人々も同じことになる。そこでは茫然としている人もいれば、泣き叫ぶ人もいた。かれらに何度も

何度も自分たちが経験したことを尋ねなければならないことは気まずいことだった。以前に李承晩の兵士がいなかったかどうか尋ねたときはいつもーこれは調査団の他のグループが活動していた朝鮮の他の場所でもそうだったがー私たちは繰り返し同じ答えを受け取った。「この辺りにはアメリカ軍以外はいなかった」。

私たちはこの地区の委員会の委員長から死者の数と殺害方法を教えられた。1,561 人が殺され、そのうち 1,384 人が銃殺され（男性 932 人、女性 452 人）、57 人が絞殺され（男性 42 人、女性 15 人）、50 人が生き埋めにされ（男性 30 人、女性 20 人）、35 人が殴り殺され（男性 25 人、女性 10 人）、35 人が焼き殺された（男性 32 人、女性 3 人）。男性と女性というのは正確でない。殺された男女のなかには 8 歳以下の子どもが 354 人いた。

これは真実ではない、国連軍の兵士はこのような振る舞いをしない、といわれている。私もそうであることを願っている。満足のいく調査委員会が、朝鮮で私たちが示された証言記録が偽りかどうかを判断しなければならない。

写真：
＜上段左＞ 新義州の残骸を眺める女性調査団
＜中段左＞ 絶望を抑えきれない老女
＜下段左＞ 安岳の集団墓地からーこれらの男性たちは生き埋めにされた
＜中段右＞ 典型的な朝鮮の都市の写真
＜上段右＞ 祖母と一人だけ生き残った彼女の孫
＜中段右＞ 平壌の委員会のメンバー
＜下段左＞ 安岳の墓地のそばに立つ委員たち
＜中段左＞ 平壌の街頭で

写真：調査団は平壌郊外のある村で会合をもった。そこが私たちの本部となった。
机を前に座っているのは左から、ベルギー人のアンネヴァル博士、イーダ・バクマン、
団長のロッド夫人、朝鮮民主女性同盟委員長の朴正愛、イギリス人のモニカ・フェルトン、フランス人のジレット・ジーグレル。

東部と北部への旅

以下の内容については、前述の記事と同じようには責任をもてない。しかし、それを私に語ってくれた女性たちとそのレポートを信頼している。悲しいことに、その内容は私自身が経験したことと極めてよく似ていた。

5 月 22 日から 24 日にかけて、調査団のあるグループが江原道文川郡の万先村（平壌から 150 キロ）と元山という都市を訪問した。旅の参加者はベルギー人の生物学博士のジエルメ・アンネヴァツ、チェコスロバキア人で調査団の書記のミルセ・スヴァトソヴァ、中国人で調査団の副団長、北京の女子大の学長で中国民主同盟の代表である劉清揚、そして 4 人目のメンバーはイタリアの国会議員エリザベータ・ガロであった。

このグループはーすべてのメンバーがレポートに署名しているがー平壌、江東、山東を通過した黄海から日本海までの朝鮮を横断するジープでの夜間移動の間に、農民たちが夜に畑を耕しているのを目撃したという。農民たちにとってそれが飛行機からの機銃攻撃からの絶え間ない恐怖なしに長時間働くことができる唯一の時間帯だからであった。

万先の近くで、調査団のメンバーたちは広い山林地帯が焼けてしまっていることに気づいた。それは焼夷弾の投下によるものだった。焼夷弾は容器を可燃物で満たした爆弾で、木々や作物をだめにしてしまう。

万先は1950年10月14日から12月5日までアメリカ軍に占領された。アメリカ軍と朝鮮人民軍との交戦が何回かあったが、アメリカ軍は3日間戦った後、村に侵入してきた。しかし、かれらは数か月間、たえず追い散らした敵軍に包囲されていたのでより強力な手段をとったのだろう。アメリカ軍はこの辺りの自軍の陣地から撤退する前、すべての村々を焼き払い、安全に逃げ延びることができなかった住民たちを万先に追い立てた。数日後にかれらは幾人かの女性を釈放したが、彼女たちはすばやく山に逃げるか、廃墟に隠れることができた。約500人の男女が捕まえられ、54人が殺され、76人が元山に送られたが、誰もかれらをふたたび見ることはなかった。

アメリカ軍が撤退した直後に、この村は焼夷弾で爆撃された。

女性はレイプされ、子どもたちは飢えで泣き叫ぶ

このグループは自分や自分の近親者が被害を受けたこの地方の多くの住民たちについて語った。高里の27歳のある女性は、夫が郵便局に勤め、彼女自身は小さな家の面倒を見つつわずかばかりの田畑を耕していたが、夫と2人の子どもたちとともに逮捕された。下の子どもは1歳になったばかりだった。彼らは殴られ、「アカの家族」だと責められた。彼女は夫と別々にされ、その後夫と会っていない。アメリカ軍は彼女と彼女の子どもたちを元山の監獄に送った。彼女はほんのわずかな食事しか与えられなかったので、子どもに乳をやれなくなった。兵士たちが監獄のなかから少女を選び出し、レイプしたと彼女は語った。彼女は20日間投獄された後、朝鮮人民軍の手によって解放された。

（女性たちが語った自分たちの夫が受けた被害など、この地区では多くの目撃記録がある。しかし私は自分自身が犠牲となった女性たちが語ったことを引用することにする。私たちが接触した証言者たちは前もって選ばれていたのか、それとも自分たち自身で選ぶことができたのか、と私はよく尋ねられた。私たちがどこかの場所に到着したとき、とても多くの人々が私たちのまわりに集まるということがよくあった。そのため私たちは私たちに話す人の数を制限しなければならなかった。そうしなければ私たちはいまも朝鮮にいたことだろう。村々の壕や洞窟から自由に移動できたならば、自分たちが話したいと思う人を選ぶことができただろう。

女性と子どもたちが皆殺しにされる

元山は先述の通り日本海の近くにあり、北江原道の最大の都市である。労働党の北江原道委員長である崔光烈は私たちに次のように説明してくれた。戦前、元山には12万3,127人の市民がいたが、今では5万7,000人だけが残っている。何とか人が住める家は3分の1だけになった。元山には精油所と造船所があったが1950年8月に破壊され、10月14日から

12月9日まで占領された。その後、3月31日まで元山は膨大な数の空爆と海からの砲撃にさらされた。軍艦からの砲撃で518人が負傷し、498人が殺された。そのうち241人は子どもであった。

調査団のメンバーが元山にいるあいだにも海からの砲撃があり、それは5月23日から24日にかけての夜に激しくなった。その夜、11人の市民が殺され、3人が軽傷を負った。

悲しい数字を示すことになるが、江原道での女性とこどもの戦争犠牲者の数は4月1日までに女性2,298人、子ども2,292人にのぼっている。676人の子どもが孤児となった。

証言を聞いたなかに全権花という49歳のプロテスタントの宣教師がいた。彼女の義理の娘で25歳の尹順子は深夜に起こされ、2人の娼婦とともにワゴンに連れ込まれた。彼女は稲田に逃げ込もうとしたが捕らえられ、レイプされ、銃殺された。全権花の兄弟の全忠寛とその妻は、それぞれ12月29日と12月24日に元山の街頭で機銃掃射で殺された。全権花はこの夫婦の6人の子どもを育てなくてはならなくなった。

38歳の農婦、李錦順は女性団体のメンバーで、元山の世洞里に住んでいたが、10月25日に1歳の子どもと一緒に捕まった。彼女は元山郊外の葛麻里の監獄に投獄された。彼女は毎晩尋問され、背中や腹を殴られた。彼女は11月10日に釈放された。その5日後に彼女の子どもは死んだ。彼女が釈放されてから10日後の11月20日、彼女の夫が捕まった。7日間の激しい拷問の後、彼は安辺郡世源面の春田に連れて行かれた。釈放後、李錦順は春田で他の38人の遺体とともに夫の遺体を発見した。

人間も家畜も追い払われる

ドイツ民主共和国のヒルデ・ハーン、西ドイツのリリー・ヴェヒター、作家でジャーナリストの中国人パイ・ラン、オランダ人弁護士のトレース・ヘイリゲルスからなるグループは朝鮮の北部を訪れた。

彼女たちの行程は平壌から介川へと向かい、それから熙川、江界、満浦へ行き、平壌に戻ってくるというものだった。

旅行中、調査団は少なくとも6つの山火事を見た。そのうち2つは彼女たちの目の前で燃え出した－ひとつは平壌から介川に行く途中で、もうひとつは熙川から介川に行く途中で発生した。どちらの場合も、彼女たちは飛行機の音を聞き、それに続いて地面から火柱が立つのを見た。その後に火が燃え広がり、木々に燃え移った。

介川面は介川の町と5つの村からなっている。1950年10月21日、介川はイギリス軍、カナダ軍、オーストラリア軍、トルコ軍および数百人の李承晩軍の支援を受けた米陸軍第26・第27装甲師団に占領された。占領は40日間続いた。

介川面には1万3,000軒の家があったが、その半数以上は破壊されていた。占領軍が退却する際に真っ先に火を放ったのだった。また、この地域の家畜の数も劇的に減少していた。戦前には7,600頭の牛がいたが今も残っているのは2,200頭であり、7,800頭いた豚は300頭に、鶏は10万羽から1,000羽に減ってしまった。

この地域には8万人以上の住民がおり、その8割は農民だったが、今では6万人になった。アメリカ軍は銃殺、焼き殺し、**殴り殺し**によって1,342人を殺したという。この調査団グループがこの地域の委員長であるキム・ビョンホ（金炳午）に、これらの犯罪は**アメリカ軍**がやったというのは確かなことかと尋ねると、彼はアメリカ軍がやったことに間違いなく、他

の軍隊はそれに関わっていないと答えた。

母親は拷問され、息子は銃殺される

調査団グループは介川の馬場里2番地に住む李真賢という女性に話を聞いた。彼女は調査団のメンバーに、妹は農民として政府から勲章を受け、この地域の女性団体で役員をしていたが、アメリカ軍に殺された、と語った。占領軍が近づいてきたとき、李真賢は一緒に逃げようと妹を説得しようとした。しかし、妹は自分の任務からそれはできないと思い、できるかぎり早く追いかけていくと約束した。

李真賢は妹の子どもたちを連れて自分だけが逃げた。しかし、妹が追ってこないので妹の8歳の息子とともに戻り、妹に何が起こったかを発見することになった。李真賢は、裸にされ木にくくりつけられている妹を見つけた。兵士たちは妹を殴りつけながら、夫の居場所や彼女の団体について尋問していた。彼女が答えようとしなかったので、電気ショックによる拷問がおこなわれた。この若い女性は数日間拷問され、この町の住民たちはそれを強制的に見せられた。彼女の8歳の息子は兵士たちの前に飛び出して行き、そして銃殺された。その母親も最後には殺された。

李真賢も捕らえられたが、妹との関係を隠し、なんとか生きながらえた。

介川では女性と子どもの群衆が調査団のメンバーのまわりにやってきて、口々に自分たちの悲劇を聞いてほしいと訴えた。車有淑という老女は、アメリカ軍が自分の家にやってきたとき、人民軍に参加して負傷して家に戻ってきていた息子が…と語った。呉仁粉はキム・ユンジュという彼女の20歳の娘が数人の兵士にレイプされ、溺死させられたと語った。

李順実という名前の若い女性は、兵士たちに捕らえられ、12日間裸のままにされた。

破壊された町ー爆撃は続く

このグループは、慈江道にある江界を訪れた。慈江道は朝鮮の最北の道で、人口もわずかでそのほとんどは農民である。敵軍はこの道を占領しなかった。この道の**人民委員会**の委員長である李珠善は、地方政府はあらゆる手を尽くして難民の救助に努めているが、かれらに食料と避難場所をあてがうことは大きな問題である、と説明した。難民が北に逃げると、アメリカ軍の飛行機が彼らを銃撃する。アメリカ軍は畑の牛や道で荷を運んでいる家畜も銃撃する。江界には4万人の住民がいたが、何度も爆撃されている。この道の山岳地帯の村々で焼かれたり爆撃されたりしていない村はない。江界での最大の爆撃は12月12日に起こり、それによって町はほとんど完全に破壊されてしまった。アメリカ軍は主に焼夷弾を落とし、続いて時限爆弾を投下した。時限爆弾は落とされてから20日までのあいだ、さまざまな時間に爆発した。2月初め、すでに破壊されたこの町に新たに激しい爆撃が加えられた。このときは主に時限爆弾が投下されたので、町を逃げ出した住民たちはその後20日間町に戻ろうとしなかった。

この調査団グループは、この一帯の唯一の軍事目標は鉄道と駅であり、それはすでに10月9日に破壊されていたと述べている。中国と朝鮮の国境にある満浦では、町の人民委員会の委員長が、この町には1万2,500人の住民がいたが、11月12日の爆撃でひどく破壊されてしまった、と語った。しかし、この町は12月7日に再び爆撃され、あえて廃墟のなかで暮らしていた人々が350人以上も殺された。

このグループはレポートのなかで、暗い地下室の片隅で子どもたちが3人だけで暮らしていたと書いている。最も小さい子どもは2歳で、最年長の少年は13歳だった。この子どもたちの親は12月7日の爆撃で死んだのだという…。

På rejse i den anderen verden. Nogle indtryk fra Tjekkoslovakie.

別の世界への旅　ーチェコスロバキアの印象

Frit Danmark, Årg.10, nr.6(1951).S.12-16:ill
『自由デンマーク』(10巻6号) 1951年9月、12-16頁

ケイト・フレロン　著
レアケ・シュタイマン／池田高嶽　訳

国際民主女性連盟が極東に向けて送った調査団の旅の主要な焦点はもちろん朝鮮だが、1万 7,000 キロの長旅の途中で、私たちは現在の西欧ではほとんど出会う機会がない環境や人々とも接した。

この記事や今後の記事で私が描こうとするのはいわゆる鉄のカーテンの東側への旅だが、それは時と環境に狭く規定され、強く制限された個人的な見聞であって、それ以上に理解されるべきではない。諸問題の原因を探るようなことは、多くの理由で不可能だった。世界の東側を旅する調査団のメンバーは、まるで叔父や叔母に手厚く保護されたパリの 17 歳の少女のようであった。身体と心を包む柔らかいコートのように手厚いもてなしを受けたが、そのコートが時には暖かすぎ重すぎるように感じることがあるということは何も秘密のことではない。

あぁ、こう書いている今も、もしチェコスロバキア、ロシア、シベリア、中国で私たちを受け入れてくれた人たちが、私が今ここに書いていることを読んだなら、どんなに困惑し、そしておそらくどんなに傷つくだろうかと思わずにはいられない。かれらは惜しみなく心から私たちをもてなしてくれたし、おそらくかれらの多くは自分たちの努力に深刻な欠点があったとは考えられないだろう。しかし、独りになりたい、独りで経験したいという私たち西側の人間の欲求はかれらがゲストに対する義務だと感じていることとはまったく正反対のもので、かれらが**理解できない**ほどのものなのだ。

これが東側諸国への旅をとりまく環境だが、しかしそのことは行く先々の様子を自分で見たり感じたりすることがまったくできないということを意味するわけではない。私は自分の記事のなかにチェコスロバキアやロシアや中国についてのすべての真実が書かれていると主張するものではない。それはよくいわれるように「雰囲気を通して経験された」**別の世界**の断片的な印象にすぎない。

東側諸国を旅する共産主義者ではない西欧人の心理状態は、その環境についての判断をき

わめて不安定なものに、積極的な方向と否定的な方向の両極端に揺れ動くものにする。この心の揺れ動きを背景に、経験したことはたやすくその自然なバランスを崩してしまう。ただそれが自分の国とまったく**変わるところがない**ということだけで、あまりに妥当で普通な場面で立ち止まり、いぶかることになる。それはとても滑稽なことだ。その一方で、単に東側諸国では何か危険なことが起って当然だという事実に事前から備えてきたというだけで、奇妙で恐怖をあおられるような環境を受け入れてしまうのだ。好むと好まざるとにかかわらず、鉄のカーテンを通り抜けると、物事をなりゆきで判断しているのだ。

写真：ハイタトラのグランドホテル－チェコスロバキアの労働者が休暇を過ごす豪奢なホテルのひとつ

クレメンティス、犯罪者

極東への旅の途中で私たちが最初に降り立ったのはプラハで、そこで私たちはアルクロン・ホテルに宿泊した。後日、私は『ポリティケン』（デンマークの新聞）の一面でチェコの治安警察はアルクロンのすべての部屋に盗聴器を設置しているというUP電の記事を読んだ。この情報は「ウィーンの信頼できるチェコ情報筋」によるものだという。

もし盗聴器がプラハの私たちの部屋でなされた、いらいらした批判的な意見を記録していたとしたら、あぁ、私たちはなんと危険なことをしていたことだろう。私たちのうちの何人かは－少なくとも私自身は－壁の中にマイクが仕掛けられているとは疑いもせず、デンマーク語や英語で大声でプラハにいることの不快さを言い募っていたのだ。

なぜ不快だったのか？ このときは大規模な粛清の時期であり、街の緊迫した雰囲気から私自身も逃れられなかったからだ。この街では水面下で恐ろしいことが起こっていたが、味気ない堅苦しい文章以外にはどんな情報も得ることはできないでいた。クレメンティスはどこに？ 彼はどこにいるべきか？ しかし、国民に崇拝されていた人物の一人、民主プラハの政府公舎に掲げられた横断幕から慈父のような目で大衆を見下ろしていた男が一夜にして**犯罪者**に変わってしまうというようなことは奇妙であり、理解しがたいことではないのか？ まったくそうではないのだ。誰もが革命には西欧資本主義やアメリカ帝国主義に協力する多くの敵がいることを知っており、裏切り者が暴露されたことに感謝すべきなのだった。しかし、ゴットワルトが同じ運命を辿らないとは誰も保証できない。われらがゴットワルトよ！ しかし、彼を見てみれば、彼は善人－常にこの社会の弱点に寄り添う善人なのだ…。

敵はアメリカやイギリスだったのか？

私たちを受け入れてくれたのはチェコスロバキア女性民主協会で、上品さと配慮をもって毎日私たちをもてなしてくれた女性たちは高い教育を受け、知的水準も相当高かった。しかしある日、私は自分が最も共感したことを知らせる必要があると感じた。私は無防備なチェコスロバキアの都市に対するアメリカ軍の無慈悲な爆撃や、イギリスに避難場所を求める貧しいチェコスロバキアの逃亡者に対するイギリスの振る舞いの数々を教えられた。それではまるで戦争中のあなた方の敵はドイツじゃなくて、アメリカやイギリスであるかのようだわ、

と私は言った。

この西側への憎悪ーそれが「自然な」ものか宣伝によって造りだされたものかは実際には分からないがーは東欧ではどこでも見られるものだが、それはここでも平和のプロパガンダとは調和していなかった。この平和のプロパガンダはチェコスロバキアでは極めて激しく行われている。スターリンとゴットワルトと平和のために、あるいは、平和とスターリンとゴットワルトのために捧げられた乾杯とスピーチで息もつけないほどだ。大きなポスター、飛び立つ鳩、横断幕でめまいがする。5月1日前後には、誰もが**「平和のために」**あらゆることをしていた。私は車での移動中、道の向こうからやってきた若者たちと会ったときのことを決して忘れないだろう。「何のために走っているのですか？」と私が尋ねると、チェコ人の小柄な通訳は嬉しそうにこう答えた。「平和のためです。チェコスロバキアのいたるところで人々が平和のために自発的にジョギングしている姿を見ることができますよ」。

彼はこの平和のための努力を見てとても誇らしげな顔つきをしていたので、私たちはこの**「自発的な」**ジョギングについて何か言うことを静かに自制した。

写真：カルルスブルンで休暇を楽しむ鉱夫

メーデーのデモは公的祝賀行事

5月1日のデモンストレーションは毎年ごとに特別テーマが設定され、今年のテーマは**「平和」**だった。メーデーの性格はこのような考えを裏切るものだっただろうか？ いや、そうではなかった。東側諸国でのメーデーのデモンストレーションは戦闘的な調子のものではなく、公的な祝賀行事であり、政治的プロパガンダは一少なくともプラハの場合は一行進が続くにつれて徐々に祝祭の性格を帯びるようになる。（軍事パレードは軍の休暇のときに行われる。）

ゴットワルトの朝鮮についての演説で集会が始まったが、私が見たところでは誰もその話を聞いていなかった。もっとも、「アメリカの占領軍と戦っている朝鮮人民への熱い連帯のメッセージ」が終わると、莫大な拍手が巻き起こったけれども。

その後、社会主義世界の巨人たちー存命の者も亡くなった者もーを描いた大きな横断幕を先頭にデモ行進が始まった。スターリン、マルクス、ラ・パッショナリア、マティス、金日成、毛沢東、そしてシロキーと並ぶクレメンティスの後継者ゴットワルトの姿が描かれている。兵士や色鮮やかなラインが入ったカーキ色の軍服を着た軍幹部たちが子どもたちを肩に乗せ、手に花をもって行進している。しばらくすると、行進は民族衣装を着た若者たちによる踊りに変わり、横断幕はグロテスクな張りぼての人形にかわる。人形は自由の女神の手で押しつぶされている子どものトルーマンや木馬に乗ったマッカーサーなどかれらが嫌う人物たちの姿をしている。しかし、このプロパガンダには暗さはなく、生活様式の一部になっている。

このメーデーの昼間の数時間、新しい民主政府によってチェコスロバキアの幸福と可能性を示すためにあらゆることがおこなわれ、ほとんどすべての人々はいつもは美しいプラハを悲しい街にしているあの陰気な集団のことを忘れていた。プラハの人々が貧困やその他の理

由でとても悲しげに見えるとすれば－かれらが以前よりも陰気になったのか、それとも現在は以前よりも陰気でなくなったのかは私には比較する根拠がないので何ともいえないが－、私がそのような想像をしてしまうのはおそらくベネシュやマサリクの運命に関する私の知識のせいであろう。

人々の物質的生活水準を適切に描き出すことは難しい。というのも、人民共和国やソ連邦ではお金の影響をいくぶん架空のものにしてしまう制度がとられているからだ。食糧や衣服といった生活必需品は配給制になっていて適切な価格で購入することができるが、追加で買おうとすればどれも高い値段がする。私は配給の規模についてどうしても満足のいく理解ができなかった。私が得た答えにはとまどいや矛盾が多く、すでに月の初めには配給されたものをすべて使ってしまったという若い学生の世帯の発言から、配給量は非常に制限されているのではないかという印象を受けた。

この国で最良の衣服をドルで－ドルだけで－買うことができるダラックスという店を訪れたとき、その質や意匠は－私たちの国の郊外にある普通の店と比べてみても－貧弱だという印象をもった。しかし、その価格は－デンマーク・クラウンに換算してみて－法外に高かった。

心からの願い：早く民主主義を手にされることを

私たちはプラハを発ち、車でタトラ山に向かった。初日の午後、私たちはかつてバタという名で製靴で有名だった街で、現在は人民民主主義共和国の工業都市であるゴットワルドフに着いた。その外観は想像していた通りのもので、殺風景で機能主義的であり、生産と労働者の必要をみたすために設計された典型的な都市であった。この地方の民主女性団体を代表して3人の女性が私たちを歓迎してくれた。1人はトラクターの運転手で、もう1人は農業労働者（しかしトラクターの運転手になりたいと思っている）で、3人目はレコード工場の労働者だった。彼女たちは大きな百合の花束をもって背筋を伸ばして、何時間も私たちを待っていた。花束を私たちに手渡す前に、1人が微笑みながら短いあいさつをした。「何と言ったのですか？」と私たちは尋ねた。「彼女は、お会いできて嬉しいです、みなさんの国でも早く人民民主主義が実現することを心から期待しています…、と言ったのです」。

高い住宅水準

心に響くこうした善意の言葉とともに、私たちはゴットワルドフのクラブハウスに向かった。それは巨大なホテルのようで、これが労働者階級とその家族が余暇を過ごす場所なのかと思われた。公式の歓迎のあいさつはなかったが、私たちはダイニングルームで腰かけ、お茶を飲み、打ち解けた会話を聞いた。私たちの周りでたくさんの活動が行われているようだった。退出するとき私は偶然にホールにつながるドアを開けた。そこではビリヤード台が長い列をなし、若者たちが熱心にゲームをしていた。その隣の部屋ではアマチュアのオーケストラが練習をしていた。

旧バタでは労働者たちのための家族住宅が建てられていたが、現在ではその傾向が変わっている。私たちは建設中の建物を示された。イギリス人の調査団員モニカ・フェルトンは都市設計者で、イギリスの鉱山都市の建設に関わったことがあったが、さらにいくつかの建築物を見た後で、チェコスロバキアの空間と資材の水準は非常に高く、イギリスよりもうまく

造られていると語った。私たちが訪れた家にはセントラル・キッチンとランドリーがあり、借り手は１人につき食糧、ランドリー、光熱費を含む家賃を払う。家賃の額は世帯収入にもとづいており、収入の低い世帯は収入の多い世帯よりも家賃が安い。ゴットワルドフでは劇場や映画館の料金は一律で、街のすべての交通機関で使える１か月間のパスも安い値段で購入することができるそうだ。

遅くなったので、視察できるはずだった工場はすでに閉まっていた。もしそれらの工場が軍需生産に変わっていたら？ 私には**分からない**。私たちはそれは製靴工場だと教えられた。

写真：プラハでのメーデーのデモの写真から

姿を変えた温泉

私たちはゴットワルドフにもっと長く滞在したかった。それは新しい社会との出会いを象徴していた。ここではその新しさは文化的純粋性のなかに現れているように思われた。しかし、元々の計画になかったので、それができるとは思えなかった。そこで私たちは温泉に移動した。私たちは夕方に到着し、レストランの女性たちの歓迎を受けた。私たちが唯一の客で、彼女たちが出した食事はここがかつてヨーロッパの有名な国際的保養地のひとつとして名高い場所であったことを思い出させた。夜に街を歩いたが、旧式のホテルや不恰好な邸宅、ひどい音楽館、よく整備された公園のなかの奇妙な格好の井戸など、他の温泉地と区別がつかないほどよく似ていた。

私は豪華なベッドで眠りに就いた。それは、かつては退位させられた公爵や冒険好きな公爵夫人が夜の退屈なバカラの後で休息するために横たわったベッドだった。

しかし翌朝、見事な芝生を見渡すと、有名な、あるいは悪名高いリゾート客がいる気配はなかった。客層が変わったのだ。私が見たのは頭にスカーフを巻いた老女たちが杖を頼りに苦労して歩き、関節炎の治療に向かっているところだった。この温泉の主人が私たちを見送った。激しい雨の中、彼の大きな傘に入れてもらって車に向かって歩いているとき、彼は言った。「この温泉は少しばかり上品さを無くしましたが、今では本当に必要としている人たちだけがここに来るようになりました。ここは年中営業しています」。

私にとっては、この温泉、タトラ山のホテル・プラハ、そしてカルルスブルンという名のもうひとつの海辺の町への訪問が、社会主義に向かう社会へのこの短い訪問のなかで最も豊かなものとなった。労働者とその家族、その他の人々は、かかりつけの医師に山で余暇を楽しむことをアドバイスされ、ハイタトラの豪奢なホテルで休暇を過ごす。ここでも外見の上品さは失われてしまっているが、人々は夜にはカードに興じ、ブラウスやスカートで踊る。スーツは着古されたものだが、そこにいるのは本当に休暇を必要としている人々だけで、幸せそうに見える。労働者たちは所属する労働者団体を通してここに休暇に訪れる。私たちの通訳は、880 チェコ・クラウン（約 115 デンマーク・クローネ）を彼女の所属団体に支払っており、近い将来に保養地に行けることを楽しみにしている、と語った。旅費も支払った額のなかに含まれている。国家が送ることを決めれば－いや、部屋があれば－、これらの印象的なホテルに泊ることができるが、最良の季節であるこの時期にはめったにないことだが、

「民間人」は1日200クラウンでここに泊ることができる。

このような政治的変革の結果が相対的にたやすく得られるものだということは真実だ。具体的な状況の広さと深さについて多くを示す必要はない。人々は以前とは違って保養地を訪れ、豪奢なホテルに泊まっている。しかし、多かれ少なかれ社会の上層に属する人々だけが享受することができる喜びについて感じる暗い不快感から解放されるという経験ができたことは良かった。

Spredte indtryk fra en rejse i den anderen verden. II. Genfindelser og opdageiser i Moskva

別の世界への旅II　ーモスクワでの発見と再発見

『自由デンマーク』（10巻7号）1951年10月　5-8頁
Frit Danmark, Årg.10, nr.7(1951).S.5-8

ケイト・フレロン　著
レアケ・シュタイマン／池田高嶽　訳

「ソビエト連邦ほど深くそして暖かく人々とたやすく接することができる場所はないだろう。

あなたはすばやくー時に必要なのは一目見ることだけだー友人をつくり、すぐに強い共感の絆で結ばれる。ソビエト連邦ではー他の場所とは違ってー人々は深い人間性の感覚と変わらぬ兄弟愛の波を楽しんでいる、というのが私の正直に思うところだ。本当の喜びー愛と愛情から私の胸は高まり、目には涙が浮かび上がる。

私がキャンプで会った子どもたちはよく育ち、よく世話されて、丁寧に扱われており、幸せそうだった。かれらの目は澄み、信頼と希望でいっぱいだった。私は仕事終わりの集会場で労働者たちと会ったときにも、それと同じ表情、喜びに満ち溢れた顔に出会った。」

これはイギリスで出版された書物『神は躓く』のなかのアンドレ・ジイドのエッセイからの引用で、そのなかでかつての共産主義者たちあるいはソビエト連邦の支持者たちが過去の見解を捨てている。

ロシア人のまわりにオーラのように存在するこの精神の暖かさは、ソビエト連邦を訪れた敏感な旅行者がすべて記しているものであり、このエッセイの著者も例外ではない。

私もまた私たちに寄せられるこの穏やかで優しい性格に魅せられた。しかし、これはレーニンやスターリンがもたらしたものでも、共産主義制度がソビエトの人民のなかに育んだものでもない。これはロシア人民の特徴の一部なのであり、トルストイやドストエフスキーやゴーリキーを読めばこの愛すべき優しさを再発見するだろう。

これらを読めば、より多くのこと、ツァーリズムとともに失われたと思っていた古きロシアの特徴が、ソビエト社会主義共和国でも存在し続けていることを再発見できる。そのひとつの例がインテリアだ。モスクワの中心部のホテルに宿泊するということは、少し奇妙なことだった。ほとんどすべての場合、私はそのプラシ天とシュロ、ほどよくほの暗い雰囲気で、古いフェニックス・ホテル（！）を思い出した。部屋には作り付けの棚と刺繍がほどこされた白い布で飾られた大きな椅子を挟んで隅々に眩い黄色のひだのついた絹のシェードがある。ベルを 7 回鳴らすと 70 歳以下ではないだろう給仕がやってきて、うやうやしく何か御用でしょうかと尋ねるが、そのストライプのリンネルの両肩に付いている金色のレース飾りに気づかないわけにはいかない。

すべての階の階段の前には年配の女性が座っている。彼女たちは演出にはおそらく必要はないが、しかしそこによくなじんでいる。鍵の入った引き出しがある机の後ろで、彼女は部屋に誰が入るのかを決めるのだ。彼女は頭からつま先まで黒地に白い飾りのついた服を着ており、動くとそれがガチャリと音を立てる。

理解できないことは耐えがたい

私たちが泊まった部屋の窓からはクレムリンの壁とルビー色の星がついた塔が見えた。16 のドームがある赤の広場のワシリー聖堂も眺めることもできた。とても奇妙で、外国人には醜いとも美しいともいいがたい。

醜いのか美しいのか、善か悪か、間違っているのか正しいのか？ 判断に迷うときが何度もある。前提条件が崩れているからだ。この異国の領土とその問題に触れたとき比較の根拠が崩れる。古くからあると同時に新しくつくりだされ、しかしそのすべてが私たちとはあまりに異なる環境に密接に関係しているので、それらを理解することは難しい。

かつて私が熱心にイタリアへの旅を語ったとき、今は亡きある有名な保守政治家が言ったことがある。「それは素敵だったかい？ 私はデンマークの国境の外に出たことがない。ここで起こっていることを把握するだけでも大変なんだ。だから他の国に出かけたとしても、自分は全然理解できないと思う。そして、私は自分が全然理解できない場所にいることが本当に好きじゃないんだ」。私はモスクワにいたとき彼の言葉を思い出し、そして初めてあまりにも奇妙で理解できないという耐えがたい感覚を抱いた。そしてそれは新しい国の新しい生活条件を経験しているという私の喜びにいくつかの場面で影を落とした。しかしそれはいくつかの場面でのみのことだった。なぜなら、つまるところモスクワで数日間を過ごし、広大な領土を飛行機で旅したことで、自分がかつてはわずかに想像していただけの**別の世界**に触れることができ、その光景や雰囲気を知ることができたからだ。

驚きがなかったロシアの孤児院

モスクワに着いた女性調査団が避けられないことがいくつかあった。そのうちのひとつは孤児院への訪問だった。私たちはモスクワから 20 キロ離れたところにある孤児院を訪問した。この孤児院は 1939 年に建てられ、3 歳から 7 歳までの子どもたちのための 130 の部屋がある。この孤児になった子どもたちのための家は、モスクワ郊外にある 55 の孤児院のひとつだ。太った黒い瞳の院長は微笑みながら、この小さな子どもたちは政府の教育計画により、注意深く組み立てられた時間割で育てられていると語り、政府とは何の関係もない子ど

もたちでいっぱいの風通しのよい部屋を指し示してみせた。同じことが保育士や教師たちにもあてはまる。かれらのトレードマークは微笑み、親切さ、優しい声だ。

子どもたちは私たちに歌や踊りを披露してくれた…。私はデンマークで多くの孤児院を訪れたことがあるが、ロシアの孤児院では何か心理的な衝突、何か**新しいこと**を感じるのではないかと予測していた。しかし、それは空振りに終わった。政府の時間割や子どもたちの養育はデンマークの孤児院と少しも変わるところはなかった。このモスクワ郊外の孤児院が最良のもののひとつだとすれば、私はデンマークにはより近代的で設備の整ったーより実際的で明るいが、より飾られていたり居心地がよいというわけではないー孤児院があるといわねばならない。大きな遊び部屋ではすべてのものが刺繍のほどこされた白い布で覆われていた。数え切れないほどの花瓶でさえ、白い垂れ布で飾られている。白くない唯一のものといえば水槽だけで、それは触れることができず透き通っていた。寝室では濃い色をしたベッドに雪のように白いカバーがつけられていた…。

壁からは、よく育った幸せそうな子どもを膝の上にのせて父親らしく微笑むスターリンが見下ろしていた。

赤い世界の神々

スターリンの肖像は写真、描画、絵画、彫刻など（ほとんどすべての芸術形式）になっているが、それは単に全ロシアの父たるツァーリとその配偶者を写した帝政時代の写真の代わりというだけでなく、ロシア人の祈りと願いを受け止めるべくあらゆる場所に飾られていた聖母マリアとその幼子イエスを描いた色鮮やかな聖像画の代わりでもある。現在では同じように祈りと願いを受け止めるためにスターリンの肖像が掛けられている。そして、赤の広場にある霊廟の棺のなかには、レーニンが聖者として安置されており、逆説的だが彼の子どもたちの現世的な必要を見守っている。

私たちはレーニンの墓の前の行列については知っており、何年も前からそのことを聞いたり読んだりしていたが、それでも自分たちの目でその列を見て驚いた。生徒たち、手にバスケットをもち頭にスカーフを巻いた女性や少女、兵士たち、ズボンをはいた太った男たちなど様々な人が並んでいた。**向こう側へと歩く人々**。

私たちはレーニンも見た。私たちの若い精力的な通訳は調査団の先頭に立ち、行列とは直角に入り口へと真っ直ぐに歩いていった。警備員に一声かけると、列の先頭の人々は動いて、私たちが通る道をあけた。かれらは腹を立てたのだろうか！ いや、明らかに違っていた。かれらは私たちを優しく興味深そうな顔つきで見ていた。われわれの聖地を見たいというこの外国人たちを歓迎しよう…。どうしてかれらが私たちのところにきたのかは皆目わからないが。

「私はこういうのは好きじゃない。少数の選ばれた人が並んでいる人々の先頭に行くことができるなんてレーニンの精神にはない」とオランダ人弁護士のヘイリゲルスが言うと、イギリス人のモニカ・フェルトンが意地の悪い笑みを浮かべて振り返り、自分がそうだったらどうする、と尋ねた。

この他には誰も笑うことはなかった。予想していたように行列はゆっくりと前に動き、まるでこの聖人が昨日死んだかのように哀悼を捧げ、そして墓を通りすぎていった。レーニンはー聖者であろうとなかろうと、歴史の中の巨人の一人であるー蝋人形のように横たわって

いた。強い投光機のライトがレーニンの頭からつま先までをすっぽりと包み、それが彼を保護するガラスよりも彼の世界と私たちの世界の境界線を描いていた。

レーニンは写真で見てきたとおりの顔をしていたが、死後の彼の顔は、ありし日の彼の顔を思い起こすと、当時よりもある種のはかなさがあり、穏やかで、さっぱりしている。彼の肌にはあらゆる異物が見える。それは薄気味悪いように思われるが、そのことを尋ねたとしてもーいや、それは死体ではない。命を悲劇的に断ち切られたような痕跡はなく、彼の周りには冷たさも腐敗もない。それはまるで彼の肖像を通りすぎたかのようだ。レーニンの頭は赤いダマスクス織の枕の上に寝かされており、その織物の折れ目が彼の頭で深くくぼんでおり、まるでこの墓のなかで生きているように思われる。

レーニンが眠っている部屋は大きくなく、壁は斑岩と黒い大理石でつくられており、私が思いだせる唯一の装飾品は石でつくられたパリコミューンの旗だけだ。

霊廟の入り口まで、また棺の傍にも警備員が立っている。彼らは直立して身動きしない。しかし、その目は決して休むことなく、訪問者の尻のあたりや手を凝視している。彼らが探しているのは爆弾や拳銃だ。お望みなら銃やその他の破壊兵器を鞄にしのばせてみてはどうだろう。

墓へと下る階段の茶色の大理石には温度計と湿度計がついており、おそらくはレーニンの遺体を保存するために適切な気温や湿度がきわめて正確に維持されているのだろう。墓は平日の午後にだけ公開されている。これは温度調節のためだといわれている。

モスクワで過ごした5日間で調査団が経験したことは何か？ もちろん地下鉄がー美しく、清潔で、そしてぞっとするような駅を備えた見事な地下鉄が走っていた。その見事さや重労働をナアアポアト駅*3にあてはめることはまったくできない。モスクワの地下鉄は人民への新しい社会の贈り物であり、かつては上流階級だけが宮殿のなかで楽しんでいた豊かさや喜びを享受するのが今では自分たち人民の番なのだということを大きく保障するものとみなさなければならない。そして、もし人民が新しい状況の豊かさを信じるならば、それは壮大に具体化されなければならない。そして、モスクワの新しい建築物の壮大さはーすでに建てられたものであれ、いま設計されているものであれー、ロンドンやパリではなく、ニューヨークを思い起こさせる。このもうひとつの新しい社会も、その豊かさを他の人々に納得させねばならないからだ。

写真：この少女はあまりロシア人には見えなかった。一方、彼女の保育士は家や街頭や遊び場や公園でよく見かける小さな子どもたちの保護者のようだった。

写真：レーニン廟への行列がこのくらいの長さであることは通常で、これより長いときもある。真正面がクレムリン宮殿の塔と見事な壁。行列の後方は赤の広場までにつながっている。

写真： モスクワの新しい庁舎のひとつ。典型的な新建築。

*3 コペンハーゲンの駅

スターリンがストックホルム・アピールを受け取った場所

クレムリン宮殿のなかに入ると、塔の上の星（直径5メートル）がルビーでつくられていることはもはや不思議ではなくなり、むしろそうでないほうが不思議な気がしてくる。クレムリン宮殿の輝きは赤の広場のワシリー聖堂の輝きに似ている。それは美の観念を超えたものだ。連れて行かれた聖堂のドームでは、格調高い部屋の雰囲気によって高みに連れていかれ、クレムリンの高い聖堂では、上祭服の背後の－あるいは聖書に隠した－拳のように珍しい宝石によって、ダイヤモンドをちりばめた子どもを抱く黄金の聖母によって、銀の聖者によって、世俗に結びつけられる。ビロードで覆われたふたつの台座のひとつにはかつて、フレデンスボルグから来て、全ロシア人の皇后陛下となった少女*4が座っていたのだ！

現在はソビエト最高幹部が住んでいるかつてのツァーリの宮殿のなかで、私たちは白と金色のホール、聖ゲオルギー勲章の間に向かった。壁には受勲した人々の名前が刻まれており、ツァーリはここで貴族や大使を謁見したのだった。スターリンが1950年の夏にストックホルム・アピールを受け取ったのもこの場所であった。

赤い罌粟（けし）

トレチャコフ美術館への訪問を除いて、私たちのソ連邦での唯一の芸術体験は、夜にボリショイ劇場でバレエを観賞したことだった。私たちは「赤い罌粟」という題名のバレエを見に行った。どのような話なのかと私は通訳に尋ねた。「自由のための中国人民の闘い、人民英雄になった踊り子の話です」。

この記事の筆者は、普段は立ってバレエを見ることは、大いに努力してもなんとか1時間半、それ以上は無理だ。－この「赤い罌粟」は4時間だったが、それでも長すぎるとは思わなかった。

このバレエは主演クリルコ、振付けロブホフ、音楽R・M・グリエール、美術エプシュタインで1927年に初演された。「赤い罌粟」がプロパガンダの一環であったことは無視できないが、その才能、美しさ、想像力、壮大さのそろい踏みに心奪われずにいることもまた不可能だった。

中国における共産主義の勝利の後、新しい結末がオリジナル・バージョンに加えられることになった。そこでは、可憐なタイ・ホアが夢のなかで人民の解放のときに出会う。そこで彼女は恋人である中国の自由の戦士に揺り起こされる。そこで彼女は再び人民の敵と闘い、社会主義の勝利のために活動し続けるのだった。新しい結末は中国の状況の進展によっている。革命は勝利したが、タイ・ホアは利敵協力者に撃たれて恋人の腕のなかで死ぬ。彼女はスポットライトのなかで頭上に赤旗がはためくなかで息を引き取り、オーケストラはインターナショナルを暗示する音楽をボリショイ劇場の屋根が持ち上がらんばかりの大音響で繰り返し演奏する。

タイ・ホアは弱々しげな手にロシア人の艦長からその肩の赤い星と一緒にもらった赤い罌粟を握っている。彼女の船はすでに出航していた。彼は中国の友人たちにその空腹を満たすための米を届け、かれらの革命的精神を激励するためにやってきたのだった。しかし、留ま

---

*4 デンマークのダウマー王女（1847年11月26日－1928年10月13日）。後のロシア皇后マリア・フョードロブナ

ってほしいと請われたとき、彼は悲しげに頭を振って、駄目だと答えざるを得ない。そのメッセージとはすなわち、革命は自分たち手で成し遂げなければならないんだよ、坊やたち。われわれはこれまでにしてきたこと以上の手助けをすることはできない。さよなら、幸福のなかでまた会おう、ということだ。

劇場は満員だったが、この最後のきわめて民族的で国際主義的な、ロシア人と中国人の共産主義の宣言の場面では誰もが立ち上がった。

スポットライトのなかで赤旗が波打つなか、幕が閉じるまで踊り手たちは彫像のように立ち続けている。

Møde med en ny verden. Tanker omkring K.D.Y.s internationale kvindekongres

新しい世界との出会い
ーWIDFの世界女性大会から考えたこと

Frit Danmark, Årg.12, nr.4(1953).S.9-10, 14-15
『自由デンマーク』1953年4号　9-10頁、14-15頁

ケイト・フレロン　著
レアケ・シュタイマン／池田高巌　訳

国際民主女性連盟（WIDF）が開催した大規模な大会が「バランス」を欠いていたというのは事実だ。それは確かにそうで、このアンバランスな世界を正しく言い表している。この大会には地球上の67か国から611人の女性の代表団が参加した。

大会終了後の記者会見で、ニューヨークの全米女性通信社を代表してイドレシュセットでの諸会合に出席したあるアメリカ人ジャーナリストは次のように語っている。

> 「大会の決議は良い。しかし、東側諸国の代表団は自分たちの国の良いことしか話さず、他の国々からの代表団は自分たちの国の悪いところしか話さないことが気にかかった。このような基盤の上でどのように平和を確立しようとしているのか、私は不思議に思っている。言及されなかったが、アメリカにも良い点があることを私は知っているからだ。」

これは気の利いたコメントとはいえないが、ジャーナリズムとしては正当なもので、WIDF大会の真実の一部を明らかにしている。大会についての報道やいわゆるブルジョアおよび女性問題に関心を持つ一般の人々からの支援は限られたものであったからだ。

しかしながら、大会の指導者たちはこれについて責任をとることを拒んだ。デンマーク人の議長ルース・ヘアマンは、WIDFが招待した女性が全員参加していればバランスはより良いものになっていただろう、と語っている。「私たちは彼女たちに手紙を書いてぜひ大会に

参加して意見を述べて下さい、と呼びかけました。が、彼女たちの返事はそのような交渉には関心がないというものだったのです」。

こうしてもうひとつの真実が明らかになった。自国を支持する西側諸国の女性たちを招待するためにあらゆる手が尽くされたが、彼女たちは参加しようとしなかった、ということである。彼女たちが参加を望まなかったことは理解できるだろうか？ ーそうだ、実際そうである。それは賢明なことだったのか？ ー否。それは正しいことだったのか？ ー否。

しかし、それは理解しうることである。国際民主婦人連盟の書記長であるマリー・クロード・ヴァイヤン・クーチュリエは5月20日に『土地と人民』誌（デンマーク共産党の機関紙）の記事のなかで以下のように書いた。「女性、母親、労働者、そして市民」がそのタイトルで、それはきたる世界大会を力強く紹介するものだった。

ソ連や人民民主主義諸国で法律にもとづいて実際に施行されている男性と女性の平等に関する美しい実例を挙げ、封建支配および帝国主義列強の支配からの解放後の中国、朝鮮、ベトナムなどの諸国の急速な発展を強調した後で、クーチュリエ夫人はこう書いている。

> 「…資本主義諸国では、平等だけでなく、生きる権利のために闘わなければなりません。資本家たちは自分たちに最大の利益をもたらす戦争を準備しつつ、あらゆる手段を使って戦争による利益を確保しようとしており、このために労働者階級が社会的に勝ちとってきた成果を破壊し、植民地世界の労働者を最低水準の生存状態に留め置こうしているのです。
>
> 平和な世界で女性が実現しうることは、社会的権利の防衛・改善・拡張を目的に最近開催された会議で明らかにされました。戦争を準備している諸国では、高い生活費、低賃金、失業の増大など女性の状況はますます悪化しています。激しい闘いを通して実現されてきたものー例えば新しい法律などーは実際には実行されていません。政府に支援された経営者たちはこうした成果を攻撃し、自分たちが与えてきたものを何とかして取り戻そうとしています。しかし、平和な諸国では家族の生活水準は向上し、住宅、学校、病院の数は着実に増え、子どもたちの健康状態は改善されています…」。

これは世界大会を前にして任意の個人ではなくこの組織の書記長によって書かれた、疑いなく反資本主義的・親東側的な紹介であった。

これ以後、現在の状況では西ヨーロッパの女性平和団体が共産主義に直接に鼓舞されていると思われるこの大会に参加すると期待することはできなかっただろう。
適切なバランスの問題以外にも、会議で様々なことが起こったことは否定できない。例えば、スカンジナビアの女性と子どもたちの状況に関する欠点が、南米、アラブ諸国、アフリカ南部、東洋の人民が置かれている過酷な状況に匹敵しうるものとして提起されたー聴衆はそう理解したーが、それは私にいわせれば無意味なことだった。

デンマークその他での歯の治療の欠点が取り上げられたのだが、そんなことは学校で石をしゃぶって空腹をしのいでいる子どもたちをもつ女性たちの面前で語るのにふさわしいことだろうか。奴隷労働によって子どもたちの成長が損なわれている女性たちの前で、人身売買や強制売春を強いられている女性たちの前で…。

アメリカ人ジャーナリストが指摘したように、西側諸国からの代表たちが誰も長年にわた

る犠牲の上に勝ちとられた成果や政治的・経済的・社会的権利のための女性の解放闘争に触れず、東側諸国の代表が誰も自分たちの国のいかなる点も批判しなかったことは、悩ましいことだった。（残念なことにこれは東側諸国の代表たちの通常の、めったに破られることのない態度であり、東側諸国の代表は皆政府と一体であり、西側諸国の代表は皆自国の政府に反対しているというのが大会の状況で、それが公正でバランスのとれた大会という印象を損ねた理由である。）

女性の問題や各国の政策に関して、この大会を細かく批判することはできたかもしれない。しかし、誠実なオブザーバーたちは、その人道主義的な形式から、この大会を言葉の伝統的な意味合いにおいて女性の問題に関する大会だとみなすことをやめた。この大会の価値は別のレベルのところにあった。すなわち、それは過去に帝国主義の利害とレイシズムによって閉ざされた国境を越えた人類の結集の場となったのである。

ちょうどこの女性大会の最終日、ロンドンを訪問していたネルーは各国の記者たちにアフリカとアジアの状況について次のように語った。

> 「…世界のこれらの部分の市民は突如として政治的経済的な状況ゆえにかれらを取り巻いていた殻を破って登場した。かれらは政治的に覚醒し、より良い生活を望んでいる。かれらはダイナミックで、その心ははちきれんばかりだ。中国では偉大な革命が起こり、それがアジア、そしてー好むと好まざるとにかかわらずー世界に新たなパワーバランスをつくりだしている。」

大会はまさにこうした状況を理解する機会をー好むと好まざるとにかかわらずー提供したのだった。

共産主義者がこの大会を支配していた、と西側のオブザーバーたちはいう。ー「私たちはこの大会が共産主義者の目的に沿ったものではないかと不安でした」とハディプラボウド夫人は語っている。彼女は人民女性党からのオブザーバーとしてインドネシアからこの大会に参加しており、彼女自身もこの社会民族的政党の党員だ。「コペンハーゲンでの会合はすばらしい経験でした。私はためらいなくその女性たちを私の組織に推薦できます。私は彼女たちの活動に満足しています。私は彼女たちの活動に敬意を表します。彼女たちはインドネシアの女性として同じことを望んでいます。私たちは他の国々の人民との関係をつくりたいと願っています。私たちは彼女たちの平和への願いのなかで私たちの信念を確認したいのです。私はこの大会で生活様式および人民の可能性についての相互理解を証明することができたと思います。」

これはハディプラボウド夫人が、大会の演壇ではなく、筆者との打ち解けた会話のなかで語った言葉である。彼女は自分の国の共産党の活動について躊躇なく厳しいコメントを加えつつインドネシアの政治状況を説明した後でこのように語ったのだ。

被抑圧人民のレジスタンス運動は世界からの支援と理解を求めており、そして現在、かれらはその支援と理解を、政府の背後からその手をかれらに差し伸べている資本主義諸国の団体・個人とともに、共産主義国家と人民民主主義諸国のなかに見出している。

朝鮮の李承晩の同盟者である諸国において、人々がそれを好むと好まざるとにかかわらず、世界中の女性たちがコペンハーゲンに集まったということは歴史的な事実として確認された

のだ。

大会は東と西、北と南で女性を分断するステレオタイプとの闘いの一部であるとみなされることを望んだ。大会は、女性たちは互いを知り、互いを理解し認識することができたと述べている。大会がより広い展望を与え、代表団、オブザーバー、来賓など出席した全女性の間の諸問題をより自然に取り払ったことは疑いない。しかし、これらすべてをその心に満たすことが必要だった人々が出席しなかったことは悲しく大きな損失だった。

これに関連して、各決議の最終版にはすべての西側志向の女性たちが喜んで受け入れることができない内容は一行もないことに気づくだろう！

これは、大会の諸会合で失われたバランスーとりわけスカンジナビアとイギリスからーは決議を文章化する委員会でつくりだされたことを示しており、結局それは、この女性大会がこの闘う世界のなかに置かれていることの痕跡なのである。

写真：Fælledparkenでの女性会議

Grusomme udryddelseskrig - i Korea, Den' : Et forbillede for krigen in Vietnam

朝鮮での恐るべき絶滅戦争
ーベトナム戦争のための手本

Information, 1969-12-03
『インフォメーション』1969年12月3日

ケイト・フレロン／イーダ・バクマン　著
レアケ・シュタイマン／池田高巌　訳

1951年に朝鮮戦争を間近で経験した私たちにとっては、現在のベトナム戦争について読むと奇妙な感じがする。残酷さと虐殺は同じだが、西側の反応はまったく異なっている。人々はもはやかつて起こったようなやり方を支持していない。米国やイギリスの政府でさえ、ソンミ村虐殺に関する目撃証言に眉をひそめている。

1951年には誰も目撃者たちに気をとめなかった。彼女らは生命を脅かされ、職を取り上げると脅かされ、ある者は監獄に送られ、総じてまったく信じるに足りない人々だと宣告された。見てきたことを語った私たちは、もちろん「単なる」女性だった。女性たち、買収されない女性たちはそれだけで私たちの世界では「世間知らず」だとされた。

私たちがその明らかな痕跡を見たすべての虐殺について語るには多くのコラムが必要だ。しかし、そのごく一部を見るだけでもベトナムに関して暴露されたものに匹敵することが示されるだろう。

1951年5月23日、私たちは北朝鮮の首都平壌の南西、江西から遠くない新井面にある村を訪問した。村人に連れられて山を登ると、数多くの埋葬塚がある台地に着いた。塚は小さく、私たちの祖先の墓と同じくらいの高さだった。それらの塚は非常に新しく、まだ土もかぶせられていなかった。キム・ウンイクという30歳の女性は、私たちに自分の夫が埋められている塚を指し示した。彼女の夫は村の教員で、1950年10月にアメリカ軍がこの地域を占領するとすぐにアメリカ軍に脅されるようになった。そこで彼は山のなかに逃げ込んだ。するとアメリカ軍は彼女を人質にし、1か月間にわたって投獄した。彼女は夫が隠れている場所を話さなかったため、毎日殴られた。その後、アメリカ軍は夫を捕らえ、処刑した。アメリカ軍が退却した後、集団墓地のひとつから彼の遺体が発見され、後にこの場所に移され、朝鮮の慣習に従って丁重に埋葬された。

「なぜ彼は処刑されたのですか？」と私たちが尋ねると、「彼が民主的な学校で教えていたからです」という答えが返ってきた。

「アメリカ軍がやったというのは確かですか？」と私たちが尋ねると、彼女はそんな愚かな質問をされるとは思ってもみなかったという顔つきで私たちを見つめた。しかし、私たちは話の全体を理解するために聞かねばならなかった。彼女は短く「もちろんです。アメリカ軍です」と答えた。

「あなたを殴ったのもアメリカ軍ですか？」と私たちは尋ねた。彼女は答えた。「ええ、もちろん。アメリカ軍です」

キム・クムスンという61歳の女性は3つめの塚を指さした。「この地域で起こったことは言葉で表せません」と彼女は言った。彼女の夫、娘、義理の息子がこの塚の下で眠っている。かれらは皆、1951年10月24日に家から連れ出され、殺された。占領軍が12月にこの地を去り、遺体が大きな集団墓地のひとつから掘り出されたとき、娘は銃殺され、2人の男性は銃剣で突き殺されており、両手は切り落とされていたことが分かった。私たちがその理由を尋ねると、彼女は「私たちの長男は南朝鮮の党の幹部なのです」と答えた。いい換えれば、この3人は人質として処刑されたのだ。

「かれらを殺したのはアメリカ軍ですか、それとも李承晩軍ですか？」と私たちは尋ねた。「かれらを私たちの家から連行し、手を切り落とし、殺したのはアメリカ軍です。私たちはこの辺りで李承晩軍を見たことがありません。ここにいたのはアメリカ軍だけです」と彼女は答えた。

かれらは次々と肉体損傷や殺害について私たちに話した。しかし、私たちはただその話を聞くだけでなく、自分たちの目で墓地を見なければならなかった。この地域の多くの住人の後について、私たちは道の反対側の泰昌墓という小高い山に向かった。

木々に覆われた山の頂の近くで、私たちは幅1メートルのストライプ状に草木がなくなっていることに気づいた。私たちはそれに沿って歩いたが、その長さは50メートルから80メートルほどであった。血まみれの衣服や縄、衣服の切れ端、靴やベルト、硬い黒髪の束、アメリカ軍の薬莢、これらはこの山、この処刑で起こった集団虐殺の証拠だった。

私たちはそこで事実を知るべく、墓を掘り起こした。腐敗した遺体がいくつかの場所では2段あるいは3段に積み重ねられ、頭蓋骨と両手が打ち砕かれていたひとつの遺体を除いて、すべての遺体が手を後ろ手に縛られていた。その硬い黒髪、高いほお骨、衣服から、その遺体は朝鮮の農民たちのものであり、それ以外の何者でもないといえた。悪臭で息がつまりそうだった。ここ泰昌墓にはこのような集団墓地が8か所あった。

私たちと共に山に登ったこの地域の人民委員長リ・ヤンスクはまわりの6つの小さな山の頂を指さし、元々は木々に覆われていたこれらの山の平らなところが集団墓地だと言った。私たちはそれらも見たいかと尋ねられたが、村人の話に一致する証拠を知るにはひとつだけで十分だった。

1950年12月にアメリカ軍が南に退却しなければならなくなったとき、天候は寒かった。寒気に触れた山々からのぼる水蒸気で、この地域の住民たちはそれが集団墓地であることを知った。住民たちはそこに行き、墓を掘り返した。こうして300体の遺体の身元が確認され、私たちが先に見た塚に移され、埋葬された。しかし、殺された母親に背負われた姿で発見された20人の子どもたちー生きたままここに連れてこられたーは、この山の共同塚に埋葬せねばならず、その塚のてっぺんに墓標が立てられていた。

この地域を占領していたのはアメリカ軍第24歩兵連隊だったと私たちは聞かされた。人民委員長は10月20日から12月7日までの占領期間に殺された人々の公式の数を私たちに教えた。集団墓地から遺体が掘り返されると、個々の死因や拷問手段も明らかになった。以下が11平方キロメートルの信川面で受け取った数字である。

殺された人は1,561人。1384人は銃殺で、そのうち354人は8歳以下の子どもだった。57人は絞殺、50人は生き埋め、35人が殴り殺され、さらに35人が焼き殺された。

北部、東部、西部に向かった国際女性調査団の3つのグループは、占領軍による同じような処刑の写真や同じような虐殺の話を持ち帰ってきた。調査団はあちこちでアメリカ軍以外にも、アメリカ軍指揮下の李承晩軍がいたという話を聞かされた。あるところではイギリス軍やカナダ軍もいたという話を聞いた。

町を破壊した空爆の14日後に、かつて港町であった鎮南浦の瓦礫の山を通ることは、あまりにも大きな悲しみをともなうことだった。生き残った人々は朝鮮人の特徴である慎み深さや穏やかさをなくしていた。腕のない男性が爆撃でできた穴の淵に立ち、「アメリカ軍に復讐を！」と叫んでいた。私たちは少し歩く度に人々が殺された話を聞いた。

アメリカ軍は10月22日から12月5日まで鎮南浦を占領し、そのあいだに1,500人以上

の人々を殺した。私たちはある地下壕に案内された。占領軍は人々をそのなかに連行し、手榴弾を投げ込んで、人々を殺傷した。これは西側の新聞で報道されていただろうか？

鎮南浦は私たちが多くの人々にインタビューした場所のひとつだった。そのなかに、ホ・ヨンユクという 46 歳のプロテスタントの牧師がいた。彼はこの爆撃された町のなかで私たちのために提供された机の端に座り、私たちに占領について語った。アメリカ軍は南に撤退する直前、中国軍が鎮南浦に到着すればこの町の相当数のクリスチャンはひどい目に遭うという噂を広めた。また、アメリカ軍はいったん朝鮮から安全撤退した後、再び戻ってきて原爆を投下するという噂もあった。日本による長い朝鮮占領期、クリスチャンはその平和のメッセージのために迫害されており、そのために中国に関するアメリカの宣伝を信じがちだった、とこの牧師は言った。そのためクリスチャンたちはアメリカ軍と一緒に逃げ出そうとした。この町の最も大きな教会の牧師が逃げ出すための船を準備し、12 月 5 日に出航した。かれらがまだデッキにいるとき、アメリカ軍はかれらに対して空から銃撃を始めた。クリスチャンたちはこれは何かの間違いだと思い、祈りの言葉を捧げ、賛美歌を歌った。しかしそれは間違いではなく、発砲は続いた。275 人がその場で殺され、さらに多くの人々が負傷した。証言した牧師は朝鮮語で話し、通訳がそれを朝鮮語から英語に翻訳したのだが、この通訳はある箇所で言葉につまった。彼は言った。「牧師はその日はソドムとゴモラのようだったと言ったのですが、私はクリスチャンではないのでどういう意味かわかりません」。

私たちは港町である海州でも首都平壌でも同じような話を聞いた。1,000 人以上の人々がアメリカ軍の宣伝を信じ、平壌を流れる大同江の岸辺に向かった。かれらはそこでアメリカ軍の爆撃機によって撃ち殺された。「同じようなことがあらゆる港町でありました」と教育大臣の Che Den Zuk が私たちに言い、牧師もうなずいた。

北朝鮮におけるアメリカ軍の虐殺は他にも数多くあったが、ここではこれ以上書こうとは思わない。しかし、ナパーム弾、焼夷弾、時限爆弾などを使った大規模爆撃や、火を消すために水を汲みに行こうとした人々への銃撃など、私たちがいたるところで目撃した建物や人間に対する破壊・殺戮は、それが自分たちの手を血で汚す行為ではなかったとしても、ジェノサイドとみなされるべきであり、大虐殺と呼ぶべきだ、ということをつけ加えて置かねばならない。北朝鮮の外務相は、米国がその旗の下で戦争を遂行している国連にこれらの爆撃について報告した。国連からの返答はなかった。

また、女性調査団は全世界に向けてその報告書を発表したが、そこに述べられている事例を調査するそぶりを見せる政府はなかった。国連でさえそうだった。

何百万人もの人々ー米国の人々でさえーが、朝鮮での戦争についての私たちの情報に心を動かされた。しかし、マッカーシズムの時代には、政府やマスメディアはマッカーサー司令部と米国からのメッセージに一致した情報に従わねばならないと感じていた。それがドイツによる占領とそこへの服従からの解放からわずか6年しか経っていないデンマークでも起こったことは見るも苦々しかった。

ソンミ村の虐殺については 1 年半を待って調査が始まった。1951 年から現在で、どのような変化を導くのであろうか？ それはかつて人々を感嘆させたように米国の敗北ー最初は朝鮮で、今回はベトナムでーをもたらすことになるのか？ あるいは、それはベトナムで続く

戦争に反対する－米国および他の国々における－人民の立ち上がりか？ それとも、それは単に民主主義的思考にもとづく活動にとどまるのか？

今それを言えるだろうか、それとも否か？

『ノイエス・ドイチュラント』紙の リリー・ヴェヒター関連記事に寄せて

木戸衛一

以下にご紹介するのは、ドイツ民主共和国（DDR）の国家政党、ドイツ社会主義統一党（SED）の中央委員会機関紙『ノイエス・ドイチュラント』（新しいドイツ、の意。以下ND）1952年3月8日付に掲載された、西独の女性平和活動家、リリー・ヴェヒター（Lilly Wächter）に関する2つの記事である。言うまでもなくこの日は国際女性デーで、NDには、一面トップの論説「女性と母親の力」、SED中央委員会の国際女性デーへの祝辞を初め、ドイツ民主女性連盟（DFD）・国際民主女性連盟（IDFF）の活動や、平和を求める各国の女性運動の報告などが満載されている。

「リリー・ヴェヒターー勇敢なドイツ愛国女性」を書いたケーテ・バイアー（Käthe Beyer）は、NDにいくつか文化関連の記事を書いている。また、ヴェヒターを讃える詩を書いたヘッダ・ツィナー（Hedda Zinner）は、リヴィフ（現ウクライナ）生まれの作家・女優・ジャーナリストで、ヴァイマル共和国末期から共産党系の新聞・雑誌に詩を発表、1935年、モスクワに亡命した。戦後は東ベルリンで活動、DDR国家賞（1954年と1989年）やカール・マルクス勲章（1980年）などを受賞している。

リリー・ヴェヒター自身については、本誌第8号に掲載されたウルズラ・シュレーター「旧東独女性組織を回顧して」の第3章、および第9号に全訳されたDDRの法律家、フリードリヒ・カール・カウルの『私は真実を述べた リリー・ヴェヒターー平和のための闘いにおけるドイツ女性の模範』でその足跡を窺うことができる。そこで本稿では、ヴェヒターに関する基本的な事実を確認し、若干の背景説明をすることにしたい。

リリー・ヴェヒターは、1899年、現バーデン=ヴュルテンベルク州のカールスルーエに生まれ、結婚後の1934年、そこから南南西に30キロほど離れたラシュタットに移った。ナチスの時代、彼女は「半ユダヤ人」として迫害を受け、母をアウシュヴィッツ絶滅収容所、継父をテレージエンシュタット強制収容所、異父弟をブーヘンヴァルト強制収容所で失った。政治的には、1917年に社会民主党（SPD）に入党、戦後も党の活動に携わった。

1947年3月8日、ソ連占領地区で結成されたDFDは、1950年4月、西独でも支部設立に成功した。その活動に加わったヴェヒターは、1951年5月、IDFFによる朝鮮での民間人住民虐殺の調査に参加した。12日間に及んだこの調査には、のべ17か国、21名の女性が同行している。

ヴェヒターは、朝鮮戦争での凄まじい民間人被害に強い衝撃を受け、西独に戻ると、朝鮮で見聞したことを講演で伝えた。米軍による残虐行為の告発は、米軍事法廷から「共産主義のプロパガンダ」と見なされ、1951年10月、「サボタージュおよび占領軍への反乱」

の廉で起訴され、禁固 8 か月、罰金 1 万 5000 マルクの判決を受けた。それに先立ち、同年 6 月 30 日には、SPD から除名処分を下された。

もともと一介の主婦だった女性が、朝鮮戦争の悲劇を目の当たりにし、反戦平和を訴えて有罪判決を受けたことは、ドイツ内外で抗議を巻き起こした。1952 年 1 月、フランクフルト・アム・マインで始まった控訴審は、ナチス統治下の 1933 年国会放火事件に関するロンドン対抗法廷で裁判長を務めた英国人デニス・N・プリットと前述のフリードリヒ・カール・カウルがヴェヒターの弁護人となり、さらに国際的に注目された。結局同年 2 月 29 日の判決で、彼女は禁固 20 日、罰金 1 万マルクを課せられた。

1952 年の国際女性デー当日、ヴェヒターは、シュヴェービッシュ＝グミュント近くのゴッテスツェルにあるヴュルテンベルク女性刑務所で服役中であり、ND が彼女を大きく取り上げたのは、至極当然であった。第二次世界大戦の生々しい記憶を背景に、「戦争とファシズムを二度と許さない」という世論は、東西ドイツで幅広く存在した。1949 年 5 月に西独国家が樹立され、再軍備の議論が始まると、「僕はごめんだ」（Ohne mich）という平和運動が盛り上がっていった。1950 年 6 月 25 日、朝鮮戦争が勃発したことは、欧州における「熱戦」の恐怖に現実味を与えた。

1950 年 10 月、グスタフ・ハイネマン連邦内相（後の連邦大統領）が再軍備に反対して辞任し、ナチス独裁下告白教会を立ち上げ、ヒトラーの「個人的囚人」として、ザクセンハウゼン、ダッハウの強制収容所に繋がれていた牧師のマルティン・ニーメラーは、コンラート・アデナウアー西独首相に対し、再軍備に関する国民投票を求める公開書簡を発表した。ハイネマンはさらに、1951 年 11 月、デュッセルドルフで「欧州平和のための緊急共同体」を立ち上げ、その 1 年後にはキリスト教民主同盟（CDU）を離党し、「全ドイツ国民党」（GVP）を創設する。

西独当局は、これらの活動をモスクワや DDR への加担と見なし、再軍備反対の急先鋒だったドイツ共産党（KPD）および DDR と繋がりのある大衆団体への締め付けを強めた。1951 年 6 月 15 日、4 名の KPD 連邦議会議員は、「非議会的態度」を理由に、20 日の登院停止処分を科せられ、6 月 26 日、ドイツ自由青年団（FDJ）の活動が禁止された。さらに 11 月 23 日、連邦政府は連邦憲法裁判所に KPD の違憲認定を求めて提訴した。このように、リリー・ヴェヒターが朝鮮を訪れ、有罪の判決を下された時期は、西独が再軍備の実現に向けて血道をあげていたのである。

ヴェヒターは、刑期を終えて平和活動を再開、5 月 16～19 日に開かれた DFD 第 4 回全国大会に来賓として出席するなど、DDR で大歓迎を受けた。1953 年 7 月には、西独 DFD の第一議長に選出されたが、1956 年 8 月 17 日、KPD が禁止され、1957 年 4 月 10 日、西独 DFD が解散させられると、彼女は表舞台から退き、1989 年 12 月に亡くなった。リリー・ヴェヒターの存在は、反共主義の政治的雰囲気の中で長らく忘却の彼方に追いやられていたが、現在ではラシュタット市のホームページに、同市ゆかりのユダヤ系市民として、その名が挙げられている[1]。

[1] http://www.rastatt.de/index.php?id=397

リリー・ヴェヒター　ー勇敢なドイツ愛国女性

ケーテ・バイアー　著
木戸衛一　訳

第三次世界大戦の準備に反対する闘いは、日に日に幅広い西独住民を捉えている。新たな戦争は、これまでの二つの大戦以上に、女性と子どもに最も厳しく降りかかるであろうから、西独の女性たちは今日、死と絶滅に抗し、故郷を守る闘いの先頭に立っている。

夫や兄弟の命、子どもたちの幸福のためのこの闘いの最も輝かしい模範になったのは、リリー・ヴェヒターだ。

澄んだ、決然とした眼差し、ときおり文章、演説の特に重要な言葉を強調して両手を握る女性―。1951年6月21日、ベルリンにおける「子どもを守る共同体」全独作業会合で、朝鮮での経験を語る彼女を初めて見た時の私たちの印象は、このようなものだった。

リリー・ヴェヒターは、つい数年前まで、バーデンのラシュタットの居心地よい家の世話をし、戦争中は他の何百万の女性と同様、ファシスト支配を「何が何でも」防衛するよう強いられた夫の身を案じるだけだった一介の女性だ。彼女はファシズムが何を意味するか分かっていた。家族はほとんど皆、ヒトラー支配の数年間、強制収容所に身を置いていた。1939年には、兄弟の死を知らされた。SSの殺し屋が、狙い定めて胃を踏みつけたのだ。3日後、彼はブーヘンヴァルト強制収容所で焼かれた。リリー・ヴェヒターの父親は、テレージエンシュタットで餓死し、母親はアウシュヴィッツでガス殺された。両親は1933年以前社会民主党員で、リリー・ヴェヒターも1923年、24歳で入党した。

恐怖の数年間、重苦しい影のようにリリー・ヴェヒターの人生の上にのしかかった凄惨な体験を経て、1945年以後、褐色のペストのあらゆる残滓を克服するため全力を尽くすのは、この勇敢な女性にとって、当然すぎることだった。

リリー・ヴェヒターは、1946年、社会民主党に再入党した。反ファシズム闘争の歳月、固く結びついた縁のある党だ。だが、この数年間は彼女の感覚を鋭敏にした。リリー・ヴェヒターは批判的になり、1933年以前党内で彼女も犯した失敗を繰り返してはならないと分かっていた。

リリー・ヴェヒターは1951年5月、17か国21人の女性とともに朝鮮に赴き、真実を求めた。彼女は、ありとあらゆる惨劇、切断された子どもの死体、おぞましい集団墓地を目の当たりにした。彼女は苦しむ朝鮮女性と話をした。そこで彼女は、1分とて黙っていてはならないと悟った。言葉を使えるうちは、西独のすべての人々を同じ運命から守るために語らなければならなかったのだ。

朝鮮から戻るや否や、リリー・ヴェヒターはデュッセルドルフで、西独の新聞・ラジオの代表者の前で朝鮮について話をした。ラシュタットで、デュッセルドルフで、ジンデルフィンゲン、フリードリヒスハーフェン、ニュルンベルク、西独のあらゆる都市で、ドイツの愛国者、リリー・ヴェヒターの警告的・感動的で誓うような声が響くと、ペータース

ベルク〔ボンにある連合国高等委員会〕では直ちに、米国の戦争準備にとっての危険を嗅ぎつけた。この女性には子どもはいない。だが、彼女は、戦争挑発者が朝鮮の運命を整えようとしている全ドイツ女性の息子たちのために闘ったのだ。

どこでも人々が群れをなして、リリー・ヴェヒターが話をする会場に押し寄せると、彼女は演説を禁止された。だが、この勇敢な女性は沈黙しなかった。彼女は集会から出されて逮捕された。するともう翌日には別の場所で、警告の声を挙げるのだ。ペータースベルクの意味深長なウィンクがあれば十分で、社会民主党の右派指導者たちはリリー・ヴェヒターを党から追放した。だが彼女は、自分が一度正しいと認識した道を動ぜずに歩んだ。

それは、マックロイ〔米占領地区高等弁務官〕にとっては行き過ぎだった。1951年9月6日、「私が朝鮮で見たこと」というテーマの集会が、もう開始1時間前に溢れかえり、警察の遮断にもかかわらず、人びとが会場への道を行こうとした時、リリー・ヴェヒターは逮捕され、ドイツの警察によって米占領軍に引き渡された。「米国占領軍部隊への中傷」により、彼女は米軍事法廷に連行された。

だが、リリー・ヴェヒターは一人ではなかった。彼女の闘い、ドイツの故郷への強い愛情は、何千もの反響を呼んだのだ。逮捕2日後、リリー・ヴェヒターが連行された牢屋の前を2,000人がデモした。「高等米裁判所」とマックロイは、ドイツ各地や全世界からの激しい抗議に覆われた。ルール地帯の鉱員、ハンブルクの港湾労働者、ニュルンベルク、ボン、デュッセルドルフの女性・母親が最後の小銭を貯め、リリー・ヴェヒターのために集めた。数日後、米国は歯ぎしりしながら、彼らが払えまいと思っていた1万5,000マルクの保釈金を受け取り、リリー・ヴェヒターを裁判までに釈放した。

真実と平和を擁護したことが「罪」に問われたこの勇敢な女性に対する裁判が、陰険極まりない方法で行うしかないのは明らかであった。米国のスパイたちが、米国の検事総長、マッコーリーの有罪事実証言者として紹介された。

何人ものマリオネットにもかかわらず、マッコーリーは、リリー・ヴェヒターの罪を立証できなかった。結局彼はシニカルに、リリー・ヴェヒターが朝鮮について真実を述べたかどうは重要でないと明言した。重要なのは、彼女が在独米占領軍の声望を傷つけたかどうかだけだというのだ。ドイツにも駐留しているのと同じ米軍の兵隊が朝鮮で戦ったからというのがその理由だった。

再び世界中に憤激の嵐が巻き起こった。リリー・ヴェヒターは判決を不服として、控訴した。有名なイギリスの弁護士プリットと、ドイツの弁護士カウル博士が、彼女の弁護を引き受けた。1月10日、控訴審最初の公判日、米国の根拠のない起訴は惨めに崩れた。裁判は延期せざるを得なくなった。米国はもう、あえて公然と姿を現さず、最終判決は文書で伝えると告げた。だが、リリー・ヴェヒターに対する自由の制限は、すべて解かれた。

さっそくリリー・ヴェヒターは、ハンブルクとブレーメンで再び話をした。デュッセルドルフの集会では、すぐに再軍事化への反対を呼びかけた。もちろん彼女は、シュヴァルツヴァルトのレッフィンゲンで開かれた、再軍事化に反対する国際女性会議に同席した。

この間米国の裁判官たちは陰険に、自分たちのテロ判決を文書で確認した。それは、ドル札や株券よりも強力な女性の口を封じようとするペータースベルクのお歴々の絶望的な最後の試みだった。彼女には、最上の武器、真実があったのだ。

この恥ずべき試みは、既に失敗している。ドイツ人は、マックロイやマッコーリーとは

別意見だ。リリー・ヴェヒターは何百万人のドイツ人を揺り動かし、彼らは今や彼女の側に立って、彼女の自由のために闘い、彼女の仕事を何千倍も強め続けている。こうして、過去の傷はようやく癒え、ドイツはついに講和条約を得、第二の朝鮮にならないのだ。

リリー・ヴェヒター

ヘッダ・ツィナー

君や私のような一介の女性が

起訴された。

米国の裁判所が

自分のために開いたのだ。

殺人？ 強盗？ 放火？

当てずっぽうをしても無駄だ—

起訴状が事実として挙げているのは

「連合国兵士を疑わしくしたこと」

君や私のような一介の女性が

いったいそれをどのようにやったというのか？

この裁判になぜこれほど

人が押し寄せるのか？

なぜ米国のお歴々には

この件がそれほど厄介なのか、

なぜ、それは多くのことが起こり、

特に危険だから？

君や私のような一介の女性が

どんな罪を犯したというのか？

彼女は真実を語った。ただ、それだけだ。

彼女は警告した。

母親の苦悩、子どもたちの叫び、

恐怖と死を語った。

「ドイツが朝鮮になってはならない。

私たちに何が迫っているか認識して」と言ったのだ。

君や私のような一介の女性が

裁判にかけられている。

有罪を宣告され、幽閉された。

彼女は屈しなかった。

一介の女性、声は弱々しく

静かにはっきりと喋った—

そして何百万人の人を目覚めさせた

彼女は真実を語ったのだから。

朝鮮戦争調査直前のジレット・ジーグレル『私はP.S.F.にいた』[1]から読み解く

松田祐子

はじめに

国際民主女性連盟が派遣した朝鮮戦争調査団のフランス人団員ジレット・ジーグレル、彼女は、調査報告書『私は弾劾する』[2]の作成に携わっているが、その他にも、雑誌にルポルタージュを書き[3]、さらにその体験をもとにした小説『江西(カンセ)の殺人』[4]を著わした。ジレット・ジーグレルとはどのような人物だったのか？ また、彼女はなぜこの調査団に加わったのか？

『私はP.S.F.にいた』は、ジレット・ジーグレルが自身のレジスタンス活動の体験をもとに執筆した小説であり、1950年5月に刊行されている。すなわち国際民主女性連盟が朝鮮戦争調査のために派遣団を送るちょうど一年前のことである。したがって、この本を省察することによって、朝鮮に行くことを決める直前のジレット・ジーグレルの心境や彼女を取り巻く状況を読み取ることができるだろう。

第一章　ジレット・ジーグレルとは？

1. ジレット・ジーグレルのプロフィール

ジレット・ジーグレルは、本シリーズ第7号[5]ですでに紹介したように、国立古文書学校を卒業したアーキビストであり、中世史を専門とする歴史家である。第二次世界大戦中はレジスタンス活動に参加し、バス＝ザルプ地方で『持つ（Tenir）』という地下新聞を発行した。また新聞や雑誌にコラムを投稿するジャーナリストとしても活躍した。彼女の人物像については、『私はP.S.F.にいた』に「まえがき」を寄せているピエール・アブラアムが書いているように、失われた上流階級出身の、例えて言えばポール・ブールジェの小説にでてくるような、美しく気品ある女性であった。そしてこの女性はレジスタンス活動を経てアラゴンやエレンブルグの登場人物のような現代的な女性に変身する[6]。

---

[1] Gilette Ziegler, *J'étais au P.S.F.*, Les Éditeurs français réunis, 1950.
[2] *Nous accusons. Rapport de la Commission de la Fédération Démocratique Internationale des Femmes en Corée du 16 au 27 mai 1951.*
[3] 例えば、Gilette Ziegler, «Premier témoin français en Corée, Gilette Ziegler en a raporté ces images atroces», *Regards* nº 305, 22 juin 1951, pp.5-7.
[4] Gilette Ziegler, *Meutre à Kang-sé,* Les Éditeurs français réunis, 1953.
[5] アジア現代女性史研究会編『アジア現代女性史』第7号、2012年pp.52-69. この論考で、ジレット・ジーグレルがフランス空軍パイロットの伴侶であったと述べたが、この人物は同姓同名の別人であると判明したので、その点についてここで訂正しておきたい。
[6] Pierre Abraham, «Présentation», Gilette Ziegler, *J'étais au P.S.F.*, Les Éditeurs français

生没年は、前の論稿執筆時には不明であったが、1904年1月29日ニースに生まれ、1981年で亡くなっている。結婚前の姓名はジレット＝ファニー＝マドレーヌ・ゴーチエ（Gilette Fanny Madeleine Gauthier）であり、国立古文書学校を卒業した年は1926年である[7]。加えて、彼女は多くの推理小説を執筆しており、著者名として、本名を含めて6つのペンネームを使用している。すなわち、本名のジレット・ジーグレル（Gilette Zigler）と結婚前の姓ゴーチエのイニシャルGをミドルネームに加えたジレット・G.・ジーグレル、さらに、ジル・グレイ（Gilles Grey）、トニー・ギルデ（Tony Guildé）、エルトン・ジョン（Elton Jones）、パトリック・ルガン（Patrik Regan）という4つの男性名を用いている。彼女がこれらのペンネームをどのように使い分けていたのかは定かでないが、1941年から1960年代半ばに書かれた100冊近い推理小説のほとんどには、これらのペンネームが使われている。一方、1935年に学位論文『中世グラス市の歴史』を著わして以降、中断していた歴史研究書は、1963年から1979年にかけて共著も含めて9冊あり、これらは本名のジレット・ジーグレル著で出版されている。

このように、彼女は大衆向けの軽い読み物である推理小説を次々と発表する一方で、本論考で紹介する『私はP.S.F.にいた』や朝鮮戦争を舞台にした『江西（カンセ）の殺人』のような時代の証言といえるシリアスな作品も残している。つまり、歴史研究書からドキュメンタリー、大衆小説、推理小説と幅広いジャンルの著作があり、さらに複数の新聞・雑誌にコラムを投稿していることを考慮すると、彼女は大変精力的な人であったと推察される。一方ペンネームを6つも使っているのは、本人を特定されたくない何等かの意図があったのだろうか？ もっとも戦時中の地下新聞では、複数の偽名で署名するのは一般的であったので[8]、その習慣をそのまま継続していたとも考えられる。作品の構成と文体に関しては、『推理小説事典』に、「複雑に構成された古典的な謎の物語であり、複雑な陰謀と最終目的に至る長い説明を好む」[9]と書かれている。また別の本の紹介文には「軽快で共感を呼ぶ文章に簡潔で夢中にさせる文体」[10]となっている。このような文体上の特徴は、推理小説だけでなく彼女の著作すべてに共有されているといえるだろう。

前述したように、ジレット・ジーグレルは1941年から1960年代半ばにかけて推理小説を量産しているのだが、刊行年を詳細に見ると、1948年と1949年と1951年には一冊も出版しておらず、1950年の作品は『私はP.S.F.にいた』一冊だけである。つまり『私はP.S.F.にいた』は、彼女が推理小説の執筆を排して取り組んだ、渾身の一冊だったのではないだろうか。ジレット・ジーグレルにとって推理小説は、気晴らしやなぐさめであった。というのは、『私はP.S.F.にいた』のなかで、ジレット・ジーグレルは「彼女（エレーヌ・ヴェテルレ）はこの小さな仕事（推理小説）のなかに力強い慰めを見出した」あるいは「エレーヌは自分が信用されていないことに抗議して、推理小説に没頭することにした。彼女は2週間ごとに、

---

réunis, 1950, pp.3-6.

7 http://litteraturepopulaire.winnerbb.net/t1854-gilette-g-ziegler

8 例えば、ジレット・ジーグレルと同じように作家で、アーキビスト、歴史家、ジャーナリストのエディ・トマ（Édith Tomas）1909年1月23日生まれ、1970年12月7日没は、戦時中の地下新聞においてはジャン・ル・ギャン(Jean Le Guern)あるいはオークソワ(Auxois)というペンネームを使っている。

9 Claude Mesplède(dir.), *Dictionnaire des littératures policières.* vol.2, p.1066

10 http://litteraturepopulaire.winnerbb.net/t1854-gilette-g-ziegler

希望、恨み、脅しをごちゃまぜにした推理小説を論壇に発表した」と語っているからである[11]。

晩年のジレット・ジーグレルの著作は、フェミニストの著作といえるものである。歴史的事実をもとに、女性たちに正当な評価が与えられるべきであることを論理的に訴えている。1975年に共著で著した『女性と仕事—中世から現代』[12]は、中世における多くの働く女性をとりあげている。また1979年の『すばらしき女性たち』[13]は、中世から現代までの6人の女性—クリスティーヌ・ド・ピザン、エリザ・ルモニエ、ジョルジュ・サンド、マリー・キュリー、クララ・ツェトキン、ベティ・アルブレヒト—をとりあげているが、いずれも「『第二の性』を二次的な場に位置づけている偏見と闘った』女性である[14]。見開きページには「国際女性デー1979年3月8日」と題してリオン銀行パリ地区支店の社会活動委員会による「社会生活における男女の真の平等の獲得を希求する」というアピール文が掲載されている[15]。この本でジレット・ジーグレルが紹介しているのは、中世末期の作家クリスティーヌ・ド・ピザンである。クリスティーヌ・ド・ピザンは、執筆によって生計を立てた世界で初めての女性といわれており、女性蔑視が強かった中世末期にあって、世の中の偏見に対して論理的に反論し、男性の権威者たちに一矢報い、女性の地位向上のために貢献した人物である。

2. ジレット・ジーグレルと小説の主人公エレーヌ・ヴェテルレ

『私はP.S.F.にいた』の主人公エレーヌ・ヴェテルレは、『江西(カンセ)の殺人』においては、朝鮮戦争調査団の一員として朝鮮にわたったフランス人団員のひとりとして登場している。彼女は帰国した後、女性組織の集会で朝鮮におけるアメリカ人の残虐行為について熱狂的に演説をおこない、聴衆を引き込む闘争的活動家アジテーターとして描かれている[16]。『私はP.S.F.にいた』のエレーヌ・ヴェテルレは、『江西(カンセ)の殺人』のエレーヌ・ヴェテルレとはキャラクターが少し違っていて、もっと複雑で内省的、どちらかといえば、『江西(カンセ)の殺人』の主人公ロランスに似通っている。もちろん、一人の人間が同時にいくつもの面を持っているからかもしれないが、朝鮮戦争調査団に参加して朝鮮の悲惨な状況をみた後の登場人物が、激しい闘争家に変貌するのはありえることである。おそらく朝鮮戦争調査団に加わったジレット・ジーグレル自身の変化をそのまま再現しているのだろう。

国際民主女性連盟による朝鮮戦争調査団の派遣とその報告書が世界中にばらまかれたという事件は、国際世論、とりわけ西側世界のこの団体に対するまなざしを大きく変えた。アメリカと国連軍の残虐性を暴くという目的の報告書に激怒したアメリカは、国際民主女性連盟をソ連の影響下にある団体として徹底的に排除しようとしたのである。冷戦構造において西側の世界に属するフランス政府が、当時パリにあった国際民主女性連盟の本部をベルリンに追い出すのは、1951年1月のことである。1945年に国際民主女性連盟がパリで創設された時、この団体はコミュニズムとは関係なく、世界中の反ファシストを連合させ、平和を希求

---

[11] Gilette Ziegler, *J'étais au P.S.F.*,pp.109, 133.
[12] E. Charles-Roux/ G.Ziegler/ M. Cerati/ J.Bruhat/ M.Guilbert/ C.Gilles, *Les Femmes et le travail du moyen-age à nos jours*, Editions de la Courtille, 1975.
[13] Gilette Ziegler/ Marie Cérati/ André Rossel/ Gilbert Badia/ Annie Fourcaut, *Femmes extraordinaires,* Editions de la Courtille, 1979, pp.7-33.
[14] *Ibid.*, p.5.
[15] *Ibid.*, p.1.
[16] Gilette Ziegler, *Meurtre à Kang-sé,* pp.125-130.

し、女性と子供の権利を守るというものであったが、その後は社会主義ブロックのコントロール下に入っていく[17]。このように見ていくと、ジレット・ジーグレルの変化は、彼女自身の内面というよりも、彼女をみるまわりのまなざしの変化によるものが大きかったといえるだろう。

いずれにせよ、この2つの小説の中のエレーヌ・ヴェテルレはかなりの部分において彼女自身を投影しているのは間違いないだろう。例えば『私は P.S.F.にいた』はニースとバス=ザルプ地方を舞台にしたレジスタンスの活動を描いているが、それらは作者自身の軌跡と類似しており、彼女が P.S.F.に所属していたことや彼女が『プチ・ジュルナル』紙に寄稿していたこと[18]も小説に書かれていることと一致する。さらに主人公のエレーヌ・ヴァテルレが推理小説を書いていることも作者のジレット・ジーグレルと同じである。

第二章　『私はP.S.F.にいた』の時代

1. P.S.F.とは何か。

小説の内容を紹介する前に、小説のタイトルになっている P.S.F.とは何かについて説明する必要があるだろう。P.S.F.とは1936年から1940年まで存在した保守右翼の政党、フランス社会党（Parti social français）の略称である。1936年7月に退役軍人団体の「火の十字団」が、人民戦線政府によって極右とみなされて解散させられた後、名前を変えて合法政党としてと創設されたのが P.S.F.である。総裁はフランソワ・ド・ラロック、フランス最初の右翼の大衆政党として1934年から1940年にかけて大きく発展し、最盛期には党員数が300万人とも言われた。また1937年には大衆紙『ル・プチ・ジュルナル』が P.S.F.の機関紙となる。1940年ヴィシー政府のフランス国は、「自由、平等、友愛」という共和国の標語に代えて「労働、家族、祖国」を掲げるが、そのスローガンは P.S.F.の使っていたものをそのまま借用している。

この党勢拡大の要因の一つに女性の役割の重視があった。「火の十字団」は当初から女性参政権付与を唱えていて、軍功勲章受章者の女性だけでなく団員の妻たちにも集会への参加を奨励した。1934年2月に婦人部が創設され、1年後にその数は525に達している。女性たちは組織の中心的な活動、すなわち社会事業、慈善バザー、ヴァカンスコロニー、食糧配給事業において、また宣伝活動において大きな役割を果たした。

長い間、「火の十字団」や P.S.F.は極右勢力であり、その指導者ラロックはヒトラーやムッソリーニに匹敵するフランスファシズムのシンボルである、という集合的記憶が定着していた。「火の十字団」という名称や、髑髏マーク、軍隊式行動様式がこのイメージの一因であるが、何といっても1932年以降の「火の十字団」の勢力拡大に対して共産党がつくりだした「ラロック＝ファシズム」というイメージが大きい。例えば、フランス共産党が1936年の

---

[17] Celia Donert (Traduit de l'anglais par Michel Christian, «Femmes, communisme et internationalisme-La Fédération démocratique internationale des femmes en Europe centrale(1945-1979)», *Vingtième Siècle, Revue d'histoire,* 2015/2 nº 126, p.121.

[18] Gilette Ziegler, 'Ecole et la Patrie'*Petit journal*,14 Feb.1939.(Samuel Kaiman, *The Extreme Right in Interwar France : The Faixceau and the Croix de Feu*, Ashgote Publishing,2008 に上記のジーグレルの書いた『プチ・ジュルナル』の記事の引用がある。)

選挙キャンペーンのために注文して制作したジャン・ルノワール監督の映画『人生はわれらのもの』のなかには、ヒトラーとムッソリーニにならんでラロック中佐と「火の十字団」の行進シーンが描かれ、ナチスとファシスト党と「火の十字団」のシンボルを並べた映像が使われた。しかしながら現在では、「火の十字団」はナショナリストで反議会主義的、そしてポピュリストではあったが、ファシストではなく、右派の大衆政党であり、極右政党ではないというのが公の見解である。ラロックは、ヴィシー政府に親和的ではあったが、ペタンによるフランスの休戦受諾に際しては、ドゴールに先駆けて抵抗をよびかけており、一貫して対独抵抗姿勢を取り続けている。ラロックは1943年ゲシュタポにより逮捕された。1944年5月に解放されたが、フランス国内では「危険人物」の容疑がかけられ、ひどく衰弱していたのにもかかわらず2年もの間収監されたあげく、1946年4月に亡くなっている。

では、ジレット・ジーグレルが『私はP.S.F.にいた』を執筆した1950年代のフランス人は、この団体をどのように認識していたのだろうか？ 解放直後のフランスはレジスタンス活動家が権力の座にあり、ドゴール派とともに最大の犠牲を払ったことを正統性の根拠とするフランス共産党の勢力も強かった。そのため政体そのものがラロックに敵対的であり、一般的には対独協力者で悪者のイメージが浸透していた。しかしその一方で、学界レベルでは、「火の十字団」は退役軍人のボーイスカウトのような組織であり、思想は穏健で、アクション・フランセーズのような過激性はなく、1936年以降はむしろ中道志向をつよめて幅広い反人民戦線派の支持者を集めた、という見解が定着していた[19]。

2. フランス共産党について

共産党のほうは、1939年8月23日の独ソ不可侵条約を支持したために威信をなくし、1939年9月26日に解散に追い込まれた。1940年5月には、モスクワに滞在していたフランス共産党書記長モーリス・トレーズはドイツと戦わないように呼びかけている。また40年夏ごろでもまだ、共産党はコミンテルン（第三インターナショナル）の指令に従って、反ナチよりも、平和の要求やドゴール派への非難、フランス国内ファシズムとフランス国内の戦争挑発者の攻撃に重点を置いていた。このように閉塞状態にあったフランス共産党は、1941年6月の独ソ戦開始によって再び活動を開始する。ドイツとソ連の「同盟関係」が崩壊したので、フランス共産党も30年代の反ファシズム路線をふたたび取るようになったのである[20]。

共産党の地下組織の特徴は、摘発や逃亡の被害を最小限に抑えるための細胞組織である。下部には「三人組」と呼ばれる3名からなるグループがあり、このグループの責任者のみが他の2人の同志を知っている。またこの責任者のみが上級の機関と連絡を保つ。ついで3グループからなる細胞が作られ、1ないし数地区、または1経営にいくつかの細胞を指導する支部が置かれる。その上に、1ないし数県の支部を統括する地方支部が置かれた。細胞と支部と地方支部はそれぞれ指導3人組（政治担当、組織と情宣担当、大衆活動担当）によって指導された。どんな場合にも政治担当者だけがそれぞれの上級機関と連絡をとり、それぞれの下級機関との接触は、組織担当者によって保たれた。このようなネットワークの構築に重

---

19 P.S.F.については、https://fr.wikipedia.org/wiki/Parti_social_fran%C3%A7ais と、剣持久木『記憶の中のファシズム―「火の十字団」とフランス現代史』講談社、2008年を参照した。

20 渡辺和行『ナチ占領下のフランス―沈黙・抵抗・協力』講談社メチエ、1994年、pp.183-191.

要な役割を果たしたのは、鉄道員や女性の連絡員である[21]。こうした非合法活動に適した組織によって、フランス共産党は勢力を拡大したのである。

フランス国内でのレジスタンスは、ロンドンのフランス委員会とは別個に生まれ、共産党がその基本的な母体となった。共産党は、国民的抑圧に抵抗し、国内全土にわたって行動した[22]。戦後、共産党はレジスタンスで最も多くの犠牲者をだした抵抗する党、「銃殺された7万人の党」として復活する。1970年代まで続く栄光の「レジスタンス神話」のはじまりである。

3. ジレット・ジーグレルの立場

P.S.F.と共産党のこのような状況下、ジレット・ジーグレルが微妙な立ち位置にいたことは理解できる。彼女はP.S.F.の事務局にいたのだから、またアカデミックな世界に属する人でもあるから、この党の本当の姿をよく知っていただろう。しかしその一方で、国際民主女性連盟の朝鮮戦争調査団に加わったという事実は、たとえ彼女が共産党員でなかったとしても、共産党の影響の強い組織に属しており、そのシンパであったことは間違いないだろう[23]。戦後、彼女の記事を掲載している雑誌『ヨーロッパ』[24]は、共産党の路線にしたがって反ファシスト闘争を行っていた。また『私はP.S.F.にいた』にまえがきを書いているピエール・アブラアムは1974年までこの雑誌の主筆であった。『私はP.S.F.にいた』と『江西(カンセ)の殺人』は「レ・エディトゥール・フランセ・レウニ」から出版されているが、この出版社は、フランス解放後の1949年に共産党の影響下にあるレジスタンスの中で生まれた3つの出版社が合併してできたものであり、その創設者で代表者はルイ・アラゴンであった。したがってジレット・ジーグレルはP.S.F.に対立するフランス共産党の意向に反対することはできなかっただろう。

この小説の内容は、レジスタンスの出来事であるのにかかわらず、P.S.F.についての本のようなタイトルがついている。主人公エレーヌ・ヴェテルレはP.S.F.から離れたとはいえ、P.S.F.をそれほど否定しているわけではない。また、エレーヌの兄夫婦はP.S.F.に所属したままレジスタンス活動をしている。つまりこの小説はジレット・ジーグレルの複雑な立場を反映しているといえるだろう。

4. 女性たちのレジスタンス活動

戦後、レジスタンス活動家たちはもてはやされ、栄誉を得た。しかしながら、女性のレジスタンス活動家は、少数の有名な人—ダニエル・カサノヴア(Danielle Casanova)、ベルティ・アルブレヒト(Berty Albreht)、ルシー・オーブラック(Lucie Aubrac)など—を除いて、表舞台に出ることはほとんどない。占領への抵抗は日常的な小さな事柄から始まる。たとえばロ

---

21 ヴィクトル・ジョアネス「対独協力とレジスタンスの起源」、J.エレンスタイン他（杉江栄一／安藤隆之訳）『フランス現代史』上、青木書店、1974年、p.168. ／渡辺和行、前掲書、p.188.

22 ヴィクトル・ジョアネス、前掲論文、p.168.

23 『江西の殺人』のなかで、エレーヌ・ヴェテルレが「私は共産党に登録していません。しかし、それを知り、高く評価するようになってから12年になります」という文がある。(Gilette Ziegler, *Meurtre à Kang-sé*, Les Editeurs Français Réunis, 1953, p.134.)

24 *Europe*は1923年にロマン・ロランの後援により創刊されたフランス文学雑誌である。
httP.S.F.r.wikipedia.org/wiki/Europe_(revue)

ンドンのラジオを聞く、ユダヤ人団体への支持を個人的に表明する、ユダヤ人の子供を匿う、ゲシュタポの圧力に対して聞こえないふりをするなどである。占領下の状況に従うことを拒否することから、近隣の相互扶助のネットワークが作り上げられていき「連帯レジスタンス」が生まれた。主婦たちは物資の欠乏を訴え、行列やデモで占領への反対を表明した。地下新聞が、これらのネットワークを通して民衆の女性たちに配布された。この「連帯レジスタンス」はコミュニストの女性たちの指導によって民衆委員会をつくり、「対独強制労働」に反対し、捕虜の帰還を要求した。1944 年 11 月に創設される 「フランス女性同盟」(UFF)はこれらのグループが集まってできたものである。

女性のレジスタンスでの役割は、主として連絡要員、タイピスト、看護師であったが、彼女たちはまた、脱走者、怪我人、対独協力拒否者、逃亡者、パラシュート降下のイギリス人を匿い、食べ物を与え、宿を提供し、苦痛を和らげるなどの活動を行った。これらはレジスタンスの主要部分である下部構造を形成しており、リスクも伴っていた。しかし記録に残されることはなかった[25]。

「フランス女性同盟」はレジスタンスの女性組織のうち、戦後も活動を継続する唯一の団体である。「フランス女性同盟」の代表は科学者のユジェニー・コトンであった。しかし名誉職的なものであり、実質的な意思決定をしていたのは共産党書記長モーリス・トレーズの伴侶であるジャネット・ヴェルメールシ、コミュニストのローラン・カサノヴァの妻であるクロディーヌ・ショマであり、彼女たちが事務局を動かしていた。「フランス女性同盟」が多様な女性たちの活動を奨励することを目指しながら、その活動の幅がせばめられているのはこの共産党とのつながりの強さからきている。

「フランス女性同盟」の第一回会議が 1945 年 6 月に開催された 5 か月後の 11 月に、ジレット・ジーグレルたちを朝鮮に派遣する国際女性組織「国際民主女性連盟」がパリで創設された。「国際民主女性連盟」は、代表が「フランス女性同盟」と同じユジェニー・コトンであるだけでなく、「フランス女性同盟」のメンバーは「国際民主女性連盟」においても重要な役割を果たすことになる。

第三章 『私は P.S.F.にいた』

あらすじ

この小説は 1939 年 9 月の開戦から 1944 年 8 月のパリ解放までの 5 年間のパリ、ニース、そしてバス＝ザルプ地方が舞台になっている。主人公エレーヌ・ヴェテルレをとりまく人々は様々な階層に属しており、出身地域、考えやイデオロギー、年齢なども多様である。すなわち、大ブルジョワやプチブルジョワもいれば、知識人、農民、労働者もいる。ヴェテルレ家の人たちはニースの出身だが、エレーヌの夫のジルはアルザス出身者である。またナチに反対してドイツからのがれてきたドイツ人、迫害から逃げてきたユダヤ人も登場する。極右の人物も共和主義者も対独協力者もいればコミュニストもいる。

さらにいえば、彼ら一人一人を何らかの決まったカテゴリーに分類することもまた困難で

[25] Yannik RIPA, *Les femmes, actrices de l'Histoire France, 1798-1945*, Sedes, 1999, pp.129-130

ある。というのは、戦時中の5年間という社会全体が大きく変化する時代を描いているので、登場人物を取り巻く環境が大きく変化し、それに伴って人々の内面も変化しているからである。そもそも、この作品のテーマは主人公エレーヌ・ヴェテルレの変化である。

第一部

1939年12月28日のP.S.F.の集会。エレーヌ・ヴェテルレと友人のジャン・リテールはこの党に違和感を抱き始めていた。リテールは1914年の戦争で重傷を負ったアルザス人で、7年前から彼にとってP.S.F.が家族、仕事、自分の全てになっていた。エレーヌ・ヴェテルレがP.S.F.に入党したのは、1934年2月6日のパリのデモの時に、「火の十字団」に続いて歩き、「祖国のために闘う」という衝動につき動かされたためである。共産党と火の十字団、エレーヌはどちらに入るか躊躇したが、「火の十字団はパトリオットだった」ので、そちらに登録した。彼女はラロックの誠実で善良そうな様子に感動して、夢中になった。だんだんと活動にのめり込んでいき、週に2、3回はP.S.F.の事務所で夕食をとり、朝の4時に起きて新聞を売り、貧しい仲間のための古着や毛布、お金、食糧など、すべてを提供した。単なる党員から、地区代表、支部代表、県代表になり1937年には事務局に入り、大衆スポークスマンに任命された。エレーヌの夫でアルザス出身のジルもラロックにひかれた。火の十字団の団員の3分の1がアルザス出身者だった。彼らは50年間祖国を奪われていたので[26]、共和主義の理想、秩序だった理想が気に入ったからである。1939年末、P.S.F.の党員は200万人を超えていた。

9月に開戦が告げられたが、奇妙な戦争と呼ばれる戦闘のない状態が続いていた。夫のジルは3か月以上動員を待った末に、前線に出発した。

エレーヌは19歳でパリに来てジルと結婚、ジルベールが生まれた。貧しいが幸福な生活を送っていた。戦争開始によって愛する人との生活が破壊され、ドイツに対する動物的な憎しみに襲われた。しかし、このときはまだ「暗黙の休戦」が続くことを望んでいた。エレーヌが週3回過ごしていたフェミニストの新聞社がパリから移動したが、彼女は通信添削の仕事をしながらパリに残った。

医者でコミュニストのダニエル・イルシュとの出会いがあり、エレーヌは祖国の意味を考えさせられる。昔、文献学研究所でジルと知り合いだったドイツ人エルンスト・ヴァハテルと6年ぶりに出会う。彼はナチの運動に参加していたが、恩師のユダヤ人を匿ったために5か月間強制収容所に入れられた後、脱走してフランスの収容所から外人部隊に志願していた。

エレーヌは母親のジュヴェ夫人がいるニースに出発した。ニースの家では、ジュヴェ夫人が昔からの縁で社交界のブルジョワたちを不承不承迎えていた。社交界の雑談、兵士の家庭のための編み物、映画や劇、新聞を読み、話題はコーヒーが不足するかどうかだった。この人たちは単純な愛国主義で日刊紙の言葉を信じ、「赤軍」の敗北とヒトラーの発作を面白がり、イタリアはもうすぐフランス側について戦うと確信していた。

エレーヌはニースのP.S.F.を訪れた。女性たちは小包を作ることと慈善バザーに忙しかった。ラロックの話を聞きに行くがもう魅力を感じなかった。彼女は無力感にとらわれた。

---

[26] アルザスは、1870年の普仏戦争によりドイツに占領され、1919年、第一次世界大戦後の講和によりフランスが取り返した。第二次世界大戦では、1940年のフランス降伏に伴い再びドイツに占領されたが、戦後再びフランスに戻った。

大ブルジョワのアルナル家とは子供のころからの付き合いをやめることはできなかったが、政治の話は避けていた。エヴリーヌ・アルナルはエレーヌの結婚相手であるアルザス人を同国人と理解していなかった。

ジルは4月の終わりに休暇でニースにやって来たが、ドイツの攻撃があった10日後に再び出発した。ベルギーへのドイツの襲撃、イタリアとの戦争の噂が伝わってきた。人々は車に荷物を積み込んでヴァル、ブルターニュ、中央山地、ピレネーに出発した。

第二部

エレーヌ、ジュヴェ夫人、息子のジルベールは、ニースを離れてバス＝ザルプの家に避難する。同じように荷物を積んだ車がつづき、駅には大勢の避難民が列車を待っていた。その後はフランス全土でこの大行列がつづいた。

レ・リーヴには、農地と長方形の大きな建物、現在はジュヴェ夫人のものになっている祖父の家、エレーヌのためにつくられた小さな山小屋があった。農婦と5人の子どもたちが彼女たちを迎えた。

ラジオが「パリが明け渡された」と告げていた。新聞には「兵士同士で、名誉の中で」フランスは敗北を認めたと書かれていた。ラジオがロンドンからの放送を捉えた。「イギリスは戦い続ける。そしてフランスも。私はこの忌まわしい行為を受け入れない・・・ペタン元帥は卑劣漢だ」とエレーヌの兄ラウルの妻サビーヌが声を荒らげることなく言った。

開戦までドイツに対する憎しみを独占していた「国家主義者」たちは、ドイツによる占領の2か月で対独協力に転換した。卑屈なニュース、愛国者の逮捕、ユダヤ人への迫害、労働者階級への命令、そのたびに彼女がそれまで情熱をもって宣伝していた言葉が浮かんだ。「国民革命」、エレーヌはそれが何か知りたかった。

1940年10月の半ばごろ、エレーヌはニースに行く用事があり、列車のなかでヴァハテルに出会った。アルジェリア、モロッコに従軍し、休戦のあと除隊して木こりをしていた。10月の終わり、エレーヌはP.S.F.に辞表を送った。

11月17日にジルが戻ってきた。戦闘で砲弾をうけ怪我をしていた。バイエルンの留置場にいれられたが、脱走してスイス国境で捕まり、10日前にもう一度脱走、8日間で国境に着いたのだった。留置場での虐待のせいでほとんど認識できないほど変わってしまっていた。顔はこわばり、額はでこぼこ、灰色の顔色、髪は黒く灰色がまじっていた。左腕はからだのほうに折れ曲がり指は青白かった。留置場ではドイツ人が何かというと殴り、反抗した人は銃殺された。しかしひどい扱いをしていたドイツ軍の准尉は本当はいい男だった。「なぜ、この人たちを歩かせなくてはならないのか？ 殺したいのならすぐに殺した方がましだ。・・・この人の腕はまともな人のところに連れて行っていたならすぐに治っていただろうに」とジルを見て話していた。フランスにたどり着き、歓喜しているジルに役人は言った。「何故脱走した？ お前たちはあちらよりこちらのほうが良いと思ったのか？」

エレーヌはパリに戻りたかったが、ジルは脱走者なので、自由地区[27]にいなければならな

[27] 休戦協定によって、フランスは独伊の占領地区、ドイツの併合地区、ヴィシーを首都とする自由地区に三分割された。北フランスは、イギリス侵攻作戦との関連で立ち入り禁止区域となり、ベルギーのドイツ軍政司令部の管轄下に置かれた。南北の自由な往来は禁止された。アルザス地方は、ドイツに併合された。

かった。12月は推理小説を執筆し、家事とジルベールの勉強を見て、朝晩にニュースを聞いた。イギリス人たちがアフリカで優勢になり、ヴィシーのラジオ・フランセーズでは敗北という言葉がライト・モチーフになった。

憲兵からジルあてに通告があった。アルザスはもうフランスではないので、ジルはフランス人ではなくなった。憲兵の持つ書類を見ると「1937年1月9日、フランスに帰化が認められる。1940年11月10日、無効」とあり、「政治思想」という言葉に二重線が引かれていた。文書には闘斧（ヴィシーの印）の印紙が貼られていた。

リテールはマルセイユでレジスタンスのグループをつくった。一つ一つの通りが5-6人からなる支部を持ち、マルセイユの文書館員であるラウルは、自分の支部で公務員たちにビラを配った、ラウルの妻のサビーヌが印刷機でビラを刷り、箱に入れに行った。

ラウルはエレーヌがレジスタンスのグループに何か渡すときには仲介すると申し出た。グループのなかでは、一人一人はそのリーダーと直接の部下しか知らないという決まりだった。エレーヌは信頼されていないと感じていらだつが、ラウルは「信頼の問題ではなく、組織と規律の問題です。私はあなたに私のリーダーからの手紙を持ってきた。それだけです。あなたはおそらく支部を作ります。自分のリーダーにメンバーの名前を口頭で伝える。私はその人たちを知る必要はない」と言った。

エレーヌはビラをつくり、自分が地下組織に所属することを知ってから、絶望感を脱した。ジルは怪我のせいで戦うことができなかったが、この組織の歯車であると感じた。

サビーヌはマルセイユでP.S.F.の昔のメンバーたちにプロパガンダを語った。彼女は昔の社会活動の闘志たちすべてを、行列の中、出入り商人の家、映画館を訪問した。サボタージュをはじめている役員がいた。女性たちはコミュニストだった。

エレーヌは自分を証明する地下新聞をにぎりしめて、リテールの仲間の一人、国家のために情熱的に献身する男に会いに行った。イルシュだった。

第三部

11月はじめ、連合軍がアルジェリアに上陸した。サビーヌは罠にかかったユダヤ人のために偽造身分証明書をつくった。完成するまでの間、そのユダヤ人たちをエレーヌのところに送ってきていた。その頃は、フランクフルトのドイツ系ユダヤ人の夫とカトリック教徒でアルザス人の妻がいた。彼らの息子の1人は戦場で死亡、もう1人はゲシュタポに処刑されていた。偽パスポートができても、彼らが脱出に成功する保証はなかった。

ヴェテルレ家の人たちは、定期的にビラを配布、証明書を偽造、迫害から逃れてきたユダヤ人や外国人、9月の虐殺と強制移送の後残された子供たちの世話をした。エレーヌは「立ち上がれ(Debout)」という地下新聞を編集し、ジュヴェ夫人がニースでそれを配っていた。しかし、エレーヌは自分たちのプロパガンダが役に立っていないと感じていた。彼女たちは、イルシュが指令を伝える上部組織について何も知らなかった。エレーヌはほぼ毎月ニースに行くたびにイルシュに会った。彼は偽の身分証明書を持っていて完全にその人物になりきっていた。

1942年11月11日、ドイツ軍が自由ゾーンに侵入した。マセナ広場でデモがあり、エレーヌは歓喜で高ぶり、力いっぱい歌いながら歩いた。イルシュが後ろにいるのがわかった。もみあいが起こり、若者を助けようとした老官吏ドブレイさんが警官に殴られ頭蓋骨を骨折

して亡くなった。国からの年金を拒否していたドブレイさんの家には何も残っていなかった。

エレーヌは命令によってアントルカステルのレジスタンスについて報告をしなければならなかった。レ・リーヴの人たちは皆イギリスのラジオを聞き、連合国のアフリカ上陸のニュースに希望を抱いていた。しかし、自分を犠牲にして黙っていることのできる人を見分けるのは難しかった。エレーヌが一体感を感じたのは、農民と職人、「左翼の人たち」だった。しかし誰からも地下活動を推測することはできなかった。

ニースに行く列車の中で、ブルジョワ女性の話を嫌悪するそぶりをみせた農民に声をかけた。ルイ・マルタンは農業企業の運転手だった。暴動のあと収監され、3か月前に逃亡した。生まれながらのコミュニストだった。

エレーヌは、タイプライターを受け取り、新聞を増刷し、ビラを編集して配った。ジルは闘争的でない「ゴーリスト」としてとおっていた。マルタンは毎月 15 日の夜にウバックの丘の上の廃屋に新聞とビラをおいた。ジルは2か月ごとにニースに来て、野菜や牛乳の木箱の間にそれをいれて運んだ。何回か指令をもちかえり、エレーヌが月末にリーダーに会った。リーダーはイルシュから理容師に代わった。ニースではレジスタンス組織が強化された。突然占領がはじまった。「勝利者たち」の礼儀正しい態度は豹変し、乱入、財産の収用、人質、公共の建物の占有を主張した。

ジルは命令を受けて、はじめて非合法活動の任務を遂行する。ドイツ軍将校に変装して、イタリア軍の収容所に収監されている2人のフランス人捕虜の救出に成功した。ジルはドイツ軍の軍服を着ると、奇妙な感覚を覚えた。フランス当局にとって彼はドイツ人なのだから、自分の国の制服を着ている。そしてドイツ人をだますために、自分の言語、自分の人種を用いる。いや、もっと複雑な感覚だった。ドイツとイタリアの警察は、この脱走の容疑者の家を捜索したが、何もみつからず、ほとんど騒ぎにならなかった。

1943年3月27日、アントルカステルの市役所は、対独協力強制労働の人員を新たに募集するために、この地域の全ての外国人に出頭を促した。ジルはこの招集に従ったが戻された。アーネスト・ヴァハテルが突然訪ねてきて、自分が追われていることを告げた。エレーヌは罠かもしれないと感じたが、不安でやつれ、悲しそうな彼の様子を見て部屋に招き入れた。ヴァハテルも選別委員会に出頭して帰されていた。彼はスパイとみられていた。

エレーヌはニースからパリに行く列車の途中でリテールから物を受け取る命令をうけた。駅で書類を自分のカバンに入れ替え、プラットフォームにおりた。銃弾の音がして男が倒れた。対独義勇軍兵士のスパイの男が消された。パリの家は3年前のままだった。イルシュがカバンをとりにやってきた。エレーヌは彼が来ることを知らされていなかったと非難するが、彼自身それを知らされていなかった。

エレーヌがパリから戻ると、アントルカステルの村は対独協力拒否者と戦うためにやってきたイタリア人に占領されていた。彼らはオートバイで走り回り、女を囲み、農民を監獄にひっぱり、食糧や宝石を盗んだ。占領軍の司令官ロヴェト隊長が暗殺された。ところが誰もそれを気にかけなかった。1週間後イタリア人たちはアントルカステルを去った。一方、ヴァハテルはイルシュとリテールのグループで重要な任務に加わっていた。

1943年7月11日、連合軍がシチリアに上陸した。25日ムッソリーニが失脚、ファシズムが崩壊した。8月5日には赤軍によるオリョールの回復があった。

8月18日、見知らぬ人からサビーヌの手紙を渡された。符号で書かれていた「7月19日、

ナンバー2, 3, 7（イルシュ、リテール、ヴァハテル）が印刷屋でゲシュタポにより逮捕された。裏切ったのは昔の仲間のラファイユだ」。新聞に「フランス国籍保持者、ジャン・リテールとフランソワ・ジルバルは 7 月 29 日、ドイツ軍人裁判所によって死刑判決を下された。・・・刑は、8 月 16 日銃殺によって執行された」と書いてあるのが目に入った。

イルシュのグループが捕まった一斉検挙以降、エレーヌとジルはマルセイユとニースのレジスタンスとのあらゆる接触を失った。アントルカステルにはいくつかのグループが組織されていたが、ジルは「外国人」という特質によって不信を持たれていた。ジルはマルタンにだけ意中をうちあけることができた。

1943 年末から 1944 年はじめ、ドイツの崩壊が感じられた。ドイツの憲兵隊が訪問して来た。エレーヌは、ジルが彼らに出会わないように手配し、ジルはニースに旅行中で留守だが帰ってきたら挨拶に行くと約束して、その場をやり過ごした。あなた方はヴァハテルの知り合いか、と彼らは尋ねた。彼はドイツ国家に反対して働く危険なテロリストになっていた。

ルイ・マルタンがジルに提案した「もし本当にマキに入りたいなら、連れて行くことができる。しかし彼らは村のレジスタンスグループからよく思われていない。・・・あなたにショックを与えるかもしれない。彼らはコミュニストだ」。マルタンはキャプテンのアルノーをジルに紹介した。ジルは地下活動家になった。

エレーヌは、ドイツの憲兵隊にジルが出頭しない言い訳の手紙を書き、ジルは仲間のこと、命のこと、もっと早く戦わなかったことへの後悔を書いてきた。エレーヌはコミュニズムという言葉にもうたじろがなかった。「今、ジルはコミュニストです」と彼女は誇りと驚きを持って言う。

アルノーがジルの信任を示す紙片を持ってエレーヌのところにやってきた。エレーヌはあらゆる手段でエヴリーヌの兄で対独協力者のアンドレ・サッシを車に乗せるという命令を受けた。親独義勇軍の制服を身に着けたアンドレは、汽車でニースに行く予定だった。エレーヌは自分と一緒に車で行くようにさそった。途中にアルノーとその仲間がいて、機関銃で脅してアンドレを降ろした。彼は電柱におしつけられ、仲間の復讐の的として処刑された。1944 年 3 月、バス＝ザルプのマキの活動家たちは敵を攻撃し、体系的に破壊し、裏切り者の処刑を続けた。

5 月 22 日、ジルに再び招集が届いた。26 日に出頭せよということだった。エレーヌは、ジルが動けないという医者の証明を持っていけば、出頭しない理由の説明になると考えた。医者に行く途中でアメリカ軍の爆撃に遭遇した。翌日のニュースでは死者は 400 人を超えていた。エレーヌは、はじめて戦場の物理的な怖さに直面した。けが人や死体を集めるのを手伝っているうちに、突然、ある考えが浮かんだ。ジルはこの爆撃にあって死んだと主張すればいい。絶望から一つの希望が起こった。彼女はこのエゴイズムが恥ずかしかったが、頭の中では書く手紙の内容を反芻していた。

2 日後、エレーヌはレ・リーヴに戻った。アルノーのチームがドイツのトラックを襲撃する手はずを調えていた。ジルもそれに加わり、エヴァルド・クラフトがトラックの前をオートバイで走りハンカチで合図するのを待っていた。クラフトはナチに反対したため収監されコミュニストになったドイツ人である。ところが合図を待たずに機関銃の連射がはじまった。アルノーのチームとは別の義勇隊が襲撃したのだった。先頭を走っていたクラフトたちが倒れ、ドイツのトラックはトンネルの中に戻ってしまった。夜「エヴァルド・クラフトは、世

界の自由のために死んだ」とアノルーは追悼した。

最初のバイクが白いハンカチを振っていたことが怪しまれ、ドイツ当局は出会った人すべてに尋問した。ルイ・マルタンがクラフトから情報を得ていたことがばれた。

ドイツの兵隊たちがやってきて、マルタンはなぐり殺された。「私は死ぬ。ほかの若者たちが同じ人生を過ごすのを避けるために・・・突然誇りが彼に湧き上がった。・・・すべてのコミュニストは立派に死んでいった」。

同じころ、汽車が駅に入って来た。ラウルがエレーヌに頼まれた大量の薬を持って降り立った。疑わしいものは持っていなかったが異様な分量の薬があやしまれ、尋問のためにホテル・ルーヴォワに連れて行かれた。次の日、嫌疑が晴れた。エレーヌのところで申し立てと突き合わせて、問題がなければ解放されることになった。エレーヌは取り乱した様子で、「ジルが！・・・ジルが！」と泣き叫びながら彼に近づいた。ラウルはぎょっとして彼らは何も知らないと囁いた。エレーヌは、「自分の夫のジルはニースの爆撃で死んだ」と作り上げてきた嘘を言った。ボッシュ[28]たちは帰った。

6月6日、連合軍がノルマンディーに上陸した。ミリス（親独義勇軍）の隊長はいなくなった。副隊長は FTP（義勇遊撃隊）から死刑の判決を受けたが、「償いのために」マキに入らせてくれるように懇願した。数か月前までドイツが勝利すると確信していたブルジョワたち、金持ちたち、軍の兵士たちは突然解放の支持者になった。転向者たちは連合軍の勝利に拍手喝采した。

エヴリーヌ・アルナルとその夫に出会うと、2人はジルがマキにいることを素晴らしいと言った。彼らの娘たちはゴーリストのビラを配っていた。

7月に、アントルカステルでは、ドイツ人たちとパルチザンとの戦闘が数日間続いた。マキの活動家たちは散り散りになった。7月末までジルは森の中で生活し、8月10日に武器のパラシュート投下をうけとり、再編成した。地中海からの上陸作戦のニュースが流れ、総動員令が布告された。ジルは再び志願兵に加わって出発した。

8月23日にパリ解放が告げられた。最初の感動の後、エレーヌは奇妙なけだるさにとらわれた。古い枠組みがひっくりかえされることなく、元どおりになるのを村の人たちは望んでいた。この戦争は他の戦争と同様に、戦闘員たちが戻り、不当な利得者が勝利し、後方の兵が栄誉をうけ「偉大」とよばれた戦争のように終わるのか？・・・いや、とエレーヌは考えた。何もかも同じではありえない。他の戦争では反抗者も地下潜行者もいなかった。彼らは敵と自らの政府を同じ憎しみで憎み、国境を越えて、おなじ闘争を推し進めるあらゆる人々を慈しむこと、ソビエト連邦を介してコミュニズムを理解するようにはならなかった。「アクション・フランセーズと P.S.F.の友人たちの、新聞の大言壮語、4年前に私の人生の枠組みを形成していたすべてのものは今では恥ずべきことであるだけでなく、古臭くほとんど不可解に思える。・・・それでも私はこれらの人々を信じていた。・・・『プチ・ジュルナル』の目でコミュニストを見、『グランゴワール[29]』の目でソビエト連邦を見ていた。・・・ずっと昔から戦っていた人たちに加わるためには、いかなる道をたどるのか？・・・彼らは私をこころから信じることになるだろうか？」

---

[28] Boche: ドイツ人への蔑称。

[29] Gringoire：両大戦関係におけるフランス右翼の政治・文学雑誌。週刊。1924年創刊。1944年廃刊。

アメリカの軍服を着たエレンスト・ヴァハテルが現れた。これからアルノーのグループに加わると言う。彼はエレーヌに宛てたイルシュからの手紙を持っていた。

1943年8月13日の日付だった。イルシュは、エレーヌを愛していたと告白していた。彼は、自分がコミュニストになったのは、少年時代が貧しく不幸だったからではなく、幸福だったとしても、かわいがられていたとしても、自由を好み、不正を理解しただろうと言う。そして不正義な制度に対して、弱者の搾取に対して、金持ちに対して、「支配者」に対して立ち上がっているエレーヌはもうすでにコミュニストであり、彼女が始めたばかりの闘争を続け、自分を失わないために、いつもレジスタンスと呼ばれているもののことを思い出してほしいと訴えていた。

エレーヌはイルシュが死んだこと、そして彼を愛していたことを理解した。

おわり

第四章　考察、祖国の意味

以上のあらすじを見てわかるように、『私はP.S.F.にいた』には、第二次世界大戦の5年間という短い期間に、フランスの人々が体験したさまざまな出来事が描かれている。P.S.F.や共産党はどのような活動をしていたのか、どのような考えを持っていたのか、ブルジョワジーたちはどう過ごしたのか、社会の急激な変化に対応できたのかできなかったのか、レジスタンスの活動はどのように繰り広げられたのか、彼らはなぜどのようにしてレジスタンス活動に入り込んでいったのか、等々である。そしてその出来事のひとつひとつが複雑でシリアスで重いテーマを問いかけている。例えば、平凡でまじめな文書館員であり、政治を嫌っていたエレーヌの兄ラウルが、偶然駅に降り立ち、エレーヌのために持ってきたトランクいっぱいの薬のせいで、レジスタンスのマキによるトラック襲撃との関係を疑われ、一晩中考えをめぐらす場面がある。「この時代はコミュニズムに対する戦いだった。ボッシュたちは忘れられていた。ルイ・マルタンは確かにコミュニストだが、自分はレジスタンス活動家ではあるがコミュニストではない。それでもドイツ人たちは自分たち全員コミュニストと呼ぶ。生涯マルキストと戦っていた自分がコミュニストというレッテルで死ぬのは滑稽だ。でももし明日銃殺されるなら、彼らを困らせるために『スターリン万歳！』と叫ぼう」などと考えている。つまりこの短い場面に彼自身のアイデンティティーと、彼に貼られるレッテルと、彼自身が演技しようとしている姿が絡み合ってラウルという人物像を複雑にしているのである。

このようにこの小説のなかの一つ一つの事件、一人一人の登場人物の生き様をテーマとして考察するのはとても興味深い仕事である。しかし時間と紙幅の制約があるので、ここではエレーヌが何度も自問し、悩みつづける「祖国とは何か」いうテーマに絞って考えてみたい。

30歳までのエレーヌにとって、祖国は無条件に素晴らしいものであった。あらゆる勇気、あらゆる美徳の化身であり、強者に対する弱者、圧政にたいする自由の保護者、改革、大義、自由をヨーロッパに知らしめ、決して絶望に身をゆだねたり、敗北に忍従することはない、これが祖国の姿であった[30]。エレーヌは多かれ少なかれ、あらゆることをフランスに関連付

[30] Gilette Ziegler, *J'étais au P.S.F.*, Les Éditeurs français réunis, 1950, p.79.

けて決定していた。彼女が P.S.F.を選んだのは、それがフランスをもっとも高く位置づけていたからであった[31]。それゆえ、フランスが負けたと聞いたとき、エレーヌは全てが終わったように感じ、絶望した。「もうどうなってもおなじことだ。もう幸福も休息もない。くたばったほうがましだ。終わりだ、終わり、もう死ぬ以外ない」[32]。エレーヌはこの時から祖国について考え始めるのである。

ところが、休戦後のフランスはエレーヌの描いていたものとは違っていた。ペタンのフランスが作り上げた祖国は、奇妙なものだった。ペタンの演説では「敗北」という言葉が何度もくりかえされた。敗北を楽しむ狂信的な愛国者の奇妙な愛国的誇りであった[33]。

エレーヌは祖国や愛国という言葉がいままで考えてきたものとは違ってしまうことがあるのに気付き始める。「『愛国的』であるのがヒトラーの足元に転げまわることならば、私はもうそうではない。ラロックの言う名誉が敵の前で服従することならば、私はもうそれを望まない。モラースの愛国主義がドイツに隷属するフランスを認めることならば、私は愛国主義をやめる」[34]、このようにエレーヌは敗北したフランスを否定する。

では、大ブルジョワのアルナル家の人たちにとっての祖国という言葉はどう理解されるだろうか？ 彼らにとって祖国とは彼らの財産、彼らの活動、彼らの所有物、そして彼らの愛すべき小さな習慣だった[35]。つまり「ヤギがつながれた場所」、祖国とはそれでしかなかった[36]。しかしながら、大ブルジョワのサークルの仲間であっても、極右でアクション・フランセーズのメンバーである老官吏ドブレイ大佐は、敗北のフランスを拒否している。彼はヴィシーの「フランス国」からの年金を受け取らない。彼はもうそれを祖国とは認めていない。一方、医者でコミュニストのダニエル・イルシュは、エレーヌの考えている祖国の要素、すなわち「私の生まれた土地、私の子供時代、私の息子・・・守らねばならないもの」に、大ブルジョワたちはこっそり「私たちの活動、私の銀行、私の石油」を付け加えているのだから、それは「私の祖国ではないしあなたの祖国でもない」、と指摘する[37]。イルシュは、祖国は選べないし、運命のきまぐれによって、殺人者、あるいは愚か者の国になってしまうかもしれない。だから祖国より先に正義とヒューマニティがあると言う。

アルザス人のジルにとっては、祖国は自分の意志とは関係なく知らない間に移動する。ジルはアルザスがドイツに占領されフランスでなくなってしまったために、外国人になっていることを知って大きなショックを受けるのだった[38]。一方、ドイツ人でありながら、ユダヤ人の老教授を匿ったため収監され逃げ出して、反ナチの容疑で追われているエルンスト・ヴァハテルも、祖国を思う気持ちと祖国から拒否されることに苦しんでいる。「私は愛国者だ。・・・私がヒトラーに奉仕するのを拒否したから祖国を裏切ったとみなしますか？」とエレーヌに尋ねる。エレーヌは、そのとき「私ももう祖国が何かわからない」と答えるのだっ

---

31 *Ibid.*, p.89.
32 *Ibid.*, p.76.
33 *Ibid.*, p.110.
34 *Ibid.*, p.83.
35 *Ibid.*, p.116.
36 *Ibid.*, p.56.
37 *Ibid.*, pp.28,31
38 *Ibid.*, p.113.

た[39]。

ドイツが足を踏み入れた時、人々はみな自由という言葉と祖国という言葉の意味を再発見したのだった[40]。

おわりに

もしエレーヌ・ヴェテルレの心境がジレット・ジーグレルのそれと重なると仮定するならば、「フランスがすべて」、今はやりの言葉でいえば、「フランス・ファースト」だった彼女が、国際民主女性連盟という国際組織に関心を持ち、朝鮮戦争調査団のような活動に積極的に加わるようになったのは、レジスタンスの経験のなかで、ジルの立場のような人、エルンスト・ヴァハデルやエヴァルド・クラフトのようにヒトラーに反対するドイツ人の立場の人、キャプテン・アルノーのようなマキに参加する対独強制労働拒否者の人、等々の様々な人との交流を経て、祖国や愛国者の意味を深く考えるようになり、それが無条件に受け入れることのできるものではなく、またいつの間にか自分の認識していた「祖国」ではなくなってしまうこともあり得る、とわかったからではないだろうか。

そして最後に出てくるイルシュの手紙が、この小説の結論と見るならば、不正義に対して、弱者への搾取に対して、支配者に対して立ち上がること、つまりレジスタンスこそが、祖国に代わる大切なものであり、最も価値のあるものなのである。ジレット・ジーグレルにとって朝鮮戦争調査に加わることはレジスタンスの延長線上にあるもの、あるいはむしろレジスタンスそのものであった。

---

39 *Ibid.*, p.165.
40 *Ibid.*, p.203.

エッセイ・研究ノート・資料 紹介

北京レイプ事件

杜春媚[1]

沈崇事件

伝えられるところでは、第二次世界大戦の終結から 1 年を少し過ぎた 1946 年のクリスマス・イブの夜、19 歳の北京大学生であった沈崇が、兵卒のウォーレン・プリチャードの手助けを受けた酒に酔ったウィリアム・ピアソン伍長に 3 時間にわたって酷寒の露地でレイプされた。ニュースはすぐさま中国全土に広がり、事件はグローバルメディアのセンセーションを呼んだ。中国の主要都市で大規模な抗議行動が即座に起こり、約 1 年にわたって続いた。学生と左翼知識人はレイプ犯の処罰と米軍の中国からの完全撤退を要求した。米国務省、米軍、そして中国国民政府（国民党）の高官は皆、この予期せぬ外交的危機に関する大規模な論争に巻き込まれた。中国共産党の地下学生党員はデモンストレーションを組織し、その主要なメッセージを反アメリカ帝国主義に置いた。1947 年 1 月、2 人の被告は最初の審理の後、北京での米軍法会議で有罪判決を受けた。にもかかわらず、その評決は 6 月にワシントンの海軍司法官によって証拠不十分として覆され、ピアソンは釈放された。

この北京レイプ事件は中国の歴史の中での重要な事件である。それはトルーマン大統領の中国での私的代表であるジョージ・マーシャル将軍によって計画された中国共産党と国民党の和平交渉の最終段階で発生し、1947 年 8 月に撤退するというアメリカの決定を加速させ、内戦における国民党の最終的敗北に寄与した。それは中国人のアメリカ認識の分水嶺となった。「フライング・タイガー」というニックネームで呼ばれた最初のアメリカ人ボランティア・グループが利他的なアメリカ人の良い例だったとすれば、酔っ払った海軍軍人のレイプ犯は、今ではその「走狗」としての国民党政府と共にアメリカ新植民地主義の象徴となった。中国の知識人は 1 世紀以上にわたって民主主義、自由、反帝国主義、自決というアメリカの理念に惹かれてきたが、今となっては、中立という主張にもかかわらず腐敗した政府を支援していることや内戦と中国人の苦難を長引かせていることなど、その多くが中国の問題への帝国主義的介入だとみなしているアメリカの現実政治に裏切られたと感じていた。毛沢東は北京レイプ事件に言及しつつ、1949 年の論文のなかで、「治外法権は撤廃されたが、レイプ犯はアメリカに戻り、釈放されたが、これも『友情のあらわれ』の一つなのである」[2] と皮肉っぽく書いている。

---

[1] 筆者は現在、米国のウェスタン・ケンタッキー大学歴史学科の助教授。2009 年にプリンストン大学で博士号を授与。E メールは chunmei.du@wku.edu.

[2] 原文は、治外法权是“废除”了，强奸沈崇案的犯人回到美国，却被美国海军部宣布无罪释放，也算一项“友谊”的表示。《毛泽东选集》，“‘友谊’，还是侵略？”一九四九年八月三十日。 ＜治外法権は「撤廃」されたが、沈崇強姦事件の犯人がアメリカに帰り、アメリカ海軍省から無罪釈放をいい渡されたのも、これまた「友情」のあらわれの一つなのである。＞ 『「友情」か侵略か』（1949

戦場の状態

北京レイプ事件の背後にある政治的・外交的ストーリーは、学問的注目の中心となっている。中国の研究者たちは内戦の政治的文脈の中でこの事件の重要性を強調してきた。「学生運動と蒋介石反動政権との闘争」は、軍による「第一の戦場」に加えて、「第二の戦場」を形成したという 1947 年の毛沢東の発言を受けて[3]、それらの研究者たちはこの運動が内戦における国民党政府の最終打倒にいかに貢献したかを示そうとした。[4] 研究者のなかには、とりわけ国民党と共産党の間の政治的競合に焦点をあてる者もいる。左双文は、中国第二歴史档案館および台北の国史館に所蔵されている国民党政府の資料を利用しつつ、沈崇事件は政府に対する学生の抗議であるように見えるが、それは実際には大衆の支持、すなわちいわゆる「第二の戦場」をめぐる共産党と国民党の間の政治的競争であったと主張している。偶発的だと思われる事件が国民党政府にとって大きな政治的災難へと発展したのは、共産党の動員と支持のためである、と彼は述べている。[5]

中国の研究者、そしてある程度までは大衆も、この事件が共産党によって操作された、あるいは、つくられたものであるかどうかについて長く論争してきた。沈は共産党のスパイで、その主張は捏造されたものだと推測する者さえいた。他の者は学生の抗議を純粋に愛国的なものだとして防衛し、大衆的デモンストレーションおよびそれに付随した政府の威信の低下を蒋介石国民党政府の無能さによるものとした。近年の論争は、2 つの陣営の間のそのような鋭い分裂を強調し、研究者から同時代のジャーナリストや記者たちに至る広範囲の関係者を惹きつけている。謝泳は 2010 年の論争的な論文のなかで、沈崇事件は中国共産党によって計画されたものであり、沈は実際にはレイプされていなかったと推測しているいくつかの情報源を提示している。[6] 彼はまた、中国でのアメリカ人による残虐行為の先例に比して学生たちの怒りを刺激した多くの文化的要因、とりわけ性、レイプ、異人種間のレイプに関する中国人の保守的な考え方についても言及している。彼は、辱められたと感じたという「感情的」要因を、この運動の背景にある最も強力な要因とみなしている。謝の主張は強力で広範囲に及ぶ反応を引き起こした。彼の主張に反対する者は、沈崇が本当にレイプされたのかどうか、彼女が当時共産党の地下党員であったのかどうか、事件はすべて共産党によってつくられたのかどうか、事件の本質は個人的で法律的なものなのか、それとも民族的で政治的なものなのかなど多様な問題に関して、彼の見解に異議を唱えた。こうした発言をした人々は、

年 8 月 30 日） 毛沢東選集第四巻、外文出版社

[3] 原文は、“中国境内已有了两条战线。蒋介石进犯军和人民解放军的战争，这是第一条战线。现在又出现了第二条战线，这就是伟大的正义的学生运动和蒋介石反动政府之间的尖锐斗争。”《毛泽东选集》，一九四七年五月三十日。 ＜中国の国内にはすでに二つの戦線ができている。蒋介石侵入軍と人民解放軍との戦争、これが第一の戦線である。いままた、第二の戦線ができた。偉大な正義の学生運動と蒋介石反動政府とのあいだの先鋭な闘争がそれである。＞ 『蒋介石政府はいまや全人民の包囲のなかにある』（1947 年 5 月 30 日） 毛沢東選集第四巻、外文出版社

[4] 例えば、金冲及:《转折年代:中国的 1947 年》，生活·读书·新知三联书店 2002 年版; 汪朝光:《中华民国史》第 3 编第 5 卷《反战运动与反美运动》，中华书局 2000 年版; 胥佩兰:《沈崇事件和全国抗暴运动》，上海人民出版社 1997 年版; 廖风德:《学潮与战后中国政治》，台北，东大图书公司 1994 年版; 沙健孙:《论抗暴运动》，《近代史研究》1984 年第 4 期、を参照のこと。

[5] 左双文: 《1946 年沈崇事件: 南京政府的对策》， 《近代史研究》， 2005 年第 1 期

[6] 谢泳：《个人遭遇如何成为公共事件——以一九四六年发生的沈崇事件为例》， 《读书文摘》 2010 年第 2 期。この論文は 2004 年の彼のスピーチにもとづいている。

謝を「軽率」であり、「事実に反した発言」を行い、「歴史と被害者の双方に対して失礼だ」と非難した。[7] 興味深いことに、そのような論争は国民党と共産党が積極的に世論に影響を与えようとした事件当時の論争を反復するものである。

英語圏の研究者の多くはまた、現代における中国学生運動の伝統の中でこの事件を考察している。例えば、ジェフリー・ワッセルストームは、『20 世紀中国における学生の抗議』というタイトルの包括的な書物のなかで、このレイプ事件によって引き起された「反米抗暴」運動を含む 1940 年代中期の学生の闘争について論じている。著者は、ストライキ支持派の学生と反対派の学生の間の闘争に焦点をあて、共に学生コミュニティーを代弁していたと主張している。彼はまた、過去のデモンストレーションとは異なって、地方当局がこのレイプに対する学生の怒りが本物であることを認識し、学生に対して積極的に警察の保護を提供したことを指摘している。[8]

在米の中国人歴史家であるチャン・ホンは、彼女の本の「沈崇事件と抗暴運動 1946-1947」というタイトルの章の中でこの事件を詳細に論じている。彼女はこの事件を第二次世界大戦後の時期の変化しつつあった中国知識人の米国認識という文脈で考察し、このレイプ事件は巨大な象徴的意味合いを帯び、「国恥」のレベルにまで高められた、と主張する。彼女はまた、アメリカ帝国主義のイメージを全国的に広めた急進派の学生と共産党が政治的に勝利し、国民党と米国政府は敗者となった、と指摘している。[9]

最近の英語圏の研究者の中には、この事件の文化史、とりわけジェンダーが果たした役割により注目を払う者もいる。ジェームス・クックは「浸透と新植民地主義：沈崇レイプ事件と反米学生運動 1946-1947」というタイトルの論文において、この事件のなかでレイプと主権がいかにして象徴的に結びつけられたかを示している。彼は、学生指導者たちは典型的な「閨秀」、すなわち純潔で貞節な処女という被害者のイメージを組み立て、被害者と中国人女性にきわめて伝統的な役を割り当てた。クックはさらに、このイメージは中国における家父長による女性の純潔の保護という伝統的な物語を喚起し、学生のナショナリズムの保守的側面を示した、と示唆している。[10] ロバート・シェファーは 2000 年の論文の中で、性暴力がいかにして米国の外交関係にダメージを与えたかについてのみならず、この事件にみられるように、米国の国務省と軍部の間でその中国政策に相違があったことを示している。シェファーはまた、米国国立公文書館の資料や当時の新聞記事を用いて、アメリカの左翼と右翼の双方とも、中国人の憤りについての理解が欠如していたことを示唆している。[11]

---

[7] 马句、宋伯:
《沈崇事件与抗议美军暴行再回顾》，《百年潮》，2010 年第 4 期。哈米:《沈崇案:
质疑的质疑》，《博览群书》，2010 年第 12 期。石天河:
《关于"沈崇案"及其他》，《书屋》，2010 年第 10 期。丁磐石:
《也谈谈我对"沈崇事件"的见闻》，《书屋》，2011 年第 4 期.

[8] Jeffrey N. Wasserstrom, Student Protests in Twentieth Century China (Stanford University Press, 1991), 240-276.

[9] Zhang Hong, America Perceived: The Making of Chinese Images of the United States, 1945–1953 (Westport, Connecticut: Greenwood Press, 2002), 77-118.

[10] James Cook, "Penetration and Neocolonialism: The Shen Chong Rape Case and the Anti-American Student Movement of 1946-47," Republican China 22 (1996): 65-97.

[11] Robert Shaffer, "A Rape in Beijing, December 1946: GIs, Nationalist Protests, and U.S. Foreign Policy," Pacific Historical Review 69, no. 1 (2000): 31-64.

これらの研究は、北京レイプ事件の単なる政治的側面を越えて、様々な社会文化的な要因によるその感情的なアピールについて説明しようとしている。にもかかわらず、それらは性差、階級的バイアス、人種差別が絡み合った要因が、この事件に直接に関わった、あるいは、事件を間近で見てきた中国人とアメリカ人エリートの間でいかに作用したのかについて十分に論じていない。加えて、それらの研究はこの事件を真にグローバルで包括的な文脈の中に位置づけていない。

第二次世界大戦後におけるアメリカ人兵士による性暴力は、比較的新しく刺激的な研究分野である。フランス人の歴史家メアリー・ロバーツは『兵士たちがしたこと』の中で、第二次世界大戦においてアメリカがヨーロッパを解放したという「良い戦争」の神話をあばき、米軍がフランス人女性は非常に好色で、たやすく兵士たちを刺激することができるという神話をいかに広め、利用してきたかを明らかにしている。彼女はまた、無規制の売春、レイプ、性病など結果として生じたカオスを検討することで、支配と主権をめぐるアメリカとフランスの間の政治的緊張について論じている。[12] ロバーツは、フランスでのアメリカ人兵士の刑事訴追において、人種がいかなる役割を果たしたかを示しているが、より論争的な『第二次世界大戦期のヨーロッパにおけるレイプとアメリカ人兵士たち』では、ヨーロッパでアメリカ人兵士が犯したレイプを詳細に調査し、起訴された黒人兵士の数が不釣り合いに多いこと、および、白人兵士と比べると彼らに対する処遇が厳しいことを示している。[13] 日本と韓国における米軍兵士の性的不品行と暴力についても研究がなされている。[14] 例えば、『同盟の中の性：米韓関係における軍事売春』という本は、戦後の韓国での米軍基地周辺での売春を考察し、100 万人を超える「慰安婦」の生が、米国と韓国の軍事政策において—その最高レベルにおいてさえ—果たした役割を示している。[15] サラ・コヴナーは『占領権力』の中で、占領期の日本の性産業について研究し、それが国際的な歴史と日本自身の売春に対する態度にいかに影響しているかを示している。[16]

北京レイプ事件は戦後のアメリカ人による性暴力に関するグローバルな文脈の中で研究されるべきである。一方では、アメリカ人の GI の振る舞いと中国人の反応は、世界の他の場所で起こっていることを反復している。他方では、米軍のプレゼンスに対する広範な反感の存在にもかかわらず、私たちが最も深刻な危機を見出すのは、おそらく中国においてである。すなわち、北京レイプ事件は、冷戦の時代の世界における反米主義を告げたのである。それゆえ、北京レイプ事件の包括的研究は、第二次世界大戦直後の時期のグローバルな文脈における類似性と差異の双方に焦点をあてねばならない。

政治の分野では、私は北京レイプ事件を、中国史のなかでの孤立した出来事ではなく、より広く、アメリカが「自由世界のリーダー」としての自らの役割を力強く主張し、各国およ

---

12 Mary Louise Roberts, What Soldiers Do: Sex and the American GI in World War II France (The University of Chicago Press, 2013).

13 J. Robert Lilly. Taken by Force: Rape and American GIs in Europe during World War II (Palgrave Macmillan, 2007).

14 例えば、Saundra Pollock Sturdevant and Brenda Stoltzfus eds., Let the Good Times Roll: Prostitution and the U.S. Military in Asia (New Press, 1993) を参照のこと。

15 Katherine H.S. Moon, Sex among Allies: Military Prostitution in U.S.-Korea Relations (Columbia University Press, 1997).

16 Sarah Kovner, Occupying Power: Sex Workers and Servicemen in Postwar Japan (Stanford University Press, 2012).

び地域的な問題に大規模に介入するなかで、中国が冷戦時代において出現しつつあった反アメリカ帝国主義のグローバルな言説の一部となったグローバルな契機とみなす。この事件は、この時代の他のアジアの反米事例と数年後の朝鮮戦争における中国の急進的な反米主義との比較研究を可能にしている。外交的交流、軍の報告、新聞報道、個人の日記や回想録など豊富な記録が、いかに複雑で微妙な社会文化的要因が、アメリカの政治的・軍事的介入をめぐって過去数十年に蓄積された緊張と結びついて、この中国そして第二次世界大戦後の世界で最初の反米危機へと発展したのかを説明することを可能にしてくれている。さらに、宣教師の期待、軍事援助、新植民地主義的野望、外交的挫折、そして共産主義への恐れがないまぜとなった20世紀における米中の相互関係の複雑な歴史に関する洞察が得られるのである。

グローバルな出来事：人種、階級、ジェンダー、反米ナショナリズム

冷戦と中国の歴史に関する多くの古典的または最近の研究のおかげで、私たちは今では米国の中国政策の失敗、フランス、韓国、日本、フィリピンなど他国での米軍による性的侵害と虐待、現代における中国の台頭するナショナリズムについて多くのことを知っている。にもかかわらず、既存の研究はいくつかの重要な問題について完全には答えていない。例えば、中国その他でのアメリカ軍の虐待の膨大な例にもかかわらず、この事件はなぜ中国のエリートの間でそのような急進的で広範囲の反応を引き起こしたのか？ また、従来ナショナリズムが広く反清、反帝国主義、反日本感情を通して形成されてきたなかで、この新しい反米主義と1945年から1948年の間の中国のナショナル・アイデンティティーとの間にはとのような関係があるのか？ この2つの問いかけは、米中の相互関係の困惑させる側面についての私たちの理解、そしてより広く冷戦の歴史、ジェンダー史、世界における反米主義についての私たちの理解にとって中心的なものである。人種、階級、ジェンダーという絡み合った要因が関係する北京レイプ事件は、私たちがこうした問いにより良く取り組むことを可能にしている。

人種差別は双方の側の注目を刺激した。一般的な文化的な傲慢さと鈍感さに加えて、レイプ犯であるアメリカ人兵士の発言と振る舞いは、現地の人々との間の軋轢において重要な役割を果たした。アメリカで教育を受けた北京の官吏である沈の叔父は、被害者が滞在していた彼の家で、尊大な態度の米軍の調査官に、アメリカで黒人が白人女性をレイプしたら死刑になるのに、中国人をレイプした白人はなぜ無罪となるのか、と尋ねている。[17] 彼はアメリカの多くのエリートたちと同様に、過去5年間にわたって強烈なメディアの注目をひいてきたスコッツボロ事件を見守ってきただろう。北京レイプ事件は、9人の10代の黒人少年が2人の南部の白人女性をレイプしたという虚偽の容疑で有罪判決を受けたスコッツボロ事件の裁判の最終段階の時期と一致していた。

階級的地位もまた、この事件をめぐる議論の核心であった。ピアソン被告は、被害者が彼を誘い、金のためにセックスを申し出たと主張し、また、あるアメリカ領事の報告は、「良い家系」の女性にとって、「夜遅くに1人で映画を見に行く」ということは普通のことではない、と述べている。[18] 現場に駆けつけた中国人警察官は、被害者が自分は大学生だと言い、学生

---

[17] 记者, "被侮辱与损害的：沈崇会见记, " in《书报精华副刊》, 1947年第4期, 第18-20页

[18] 劉小清, "＜燕京新聞＞追蹤報導'沈崇事件'", in 民國春秋 2006年第6期, 第18-19 页.

であることを証明するために「私はあなたの友達です」(I am your friend) というこの米軍兵士の言葉を正確に訳すと、まず被害者の顔を平手打ちしたのであった。[19] 彼女の道徳的品位についての疑いがおさまったのは、彼女が十分な資産を持つある有名な一族の出身だという証拠が表面化した後のことであった。

当時の人々でさえ、上海での人力車引きの殺害、武漢での既婚の中産階級の女性に対する集団レイプ、無謀なアメリカ人ドライバーによる何百件もの交通死傷事故など、最近のアメリカ人の暴虐行為のどれも、北京レイプ事件に対してと同じレベルの反応を引き起こしていないということに気づいていた。中国人兵士もレイプを行っているというアメリカ人の挑発に対して、中国の学生たちは「中国人兵士は農民に手を出すだけで、知識人を襲ったりしない」と単刀直入に述べている。[20] 全体としては、すべての中国人が対等で、すべての女性に保護すべき価値があるわけではなかった、ということである。沈崇が「良い家系」であることは、中国人に対しては、彼女には性的経験がなく、卑しく酔っ払った「セックス・ウルフ」と自発的に性交する意思など持たない良い娘だということを証明し、彼女の潔白を認めるものとなった。

男性が支配的な学生コミュニティーにとって、エリートの若い女性に対するレイプは、中国の主権に対するレイプおよびアメリカによる中国への政治的・経済的浸透を象徴するものであった。彼らの傷つけられた男らしさと反米愛国主義の間には、明白なつながりがあった。1928年には、南京にあるアメリカのキリスト教系大学の男子学生たちが近くの女性伝道施設の女子学生たちに、イギリス人兵士と帝国主義の小型砲艦でダンスをしたと抗議したことがあったが、女子学生たちは男子学生を、古臭く、私たちが外国の男性を惹きつける魅力があることにおびえていると言って異議を唱えた。[21]

中国人は 19 世紀にヨーロッパの植民地主義者が最初にもたらしたこうしたきわめて人種差別的なヒエラルキーを受け入れ、そしてある程度まで擁護していた。彼らはまた、日本人が描き出した実利主義的で快楽主義的なアメリカ人像に影響を受けていたのかもしれない。太平洋戦争期の日本は、アジア人および自国民に対する反米宣伝に長く関わり、アメリカ人を「自分たちを傷つける巨大な性器をもった悪鬼のような人物」と描き、人種差別的・性的な恐怖を呼び起こしてきた。[22] 米国による占領に備えて、日本は大規模なレイプへの恐れから、やってくるアメリカ兵の慰安のために職業的売春婦と一般女性を雇った。

しかし、この物語の性とジェンダーの側面は、先行するいくつかの研究が指摘しているように、貞淑な中国人女性が放蕩な西洋の男に穢され、それゆえ必死になって男性の庇護を求めるといった物語よりも複雑である。米兵の中国人女性との関わりというより広い社会的文脈により緊密な注目が払われるべきだ。西洋人の心の中での上海は、19 世紀以来、長く性的

---

19 记者, "被侮辱与损害的：沈崇会见记, " in《书报精华副刊》, 1947 年第 4 期, 第 18-20 页

20 Robert Shaffer, "A Rape in Beijing, December 1946: GIs, Nationalist Protests, and U.S. Foreign Policy," Pacific Historical Review 69, no. 1 (2000): 40 を参照のこと。

21 Gael Graham, "The Cumberland Incident of 1928: Gender, Nationalism, and Social Change in American Mission Schools in China," Journal of Women's History 6, no. 3 (Fall 1994): 35-61.

22 John W. Dower, Embracing Defeat: Japan in the Wake of World War II (New York: W. W. Norton & Company, 1999): 27-47.

放縦、売春、西洋の男にとっての中国人女性の利用価値、と結びつけられてきた。[23] 大衆雑誌の漫画には「ミス・オーヒュー」というステレオタイプな名前の若い中国人の妖婦がしばしば登場する。実際、レイプの現場は米海軍地区の近くで、多くの中国人売春婦がよくたむろしていた。他方、都市部の中国人女性の間には、エキゾチックな性的幻想も存在していた。いわゆる「ジープ・ガール」はアメリカ人GIと一緒に主要都市の街路にあるダンスホール、レストラン、ホテルに出かけたが、彼女たちは占領期の日本でパンパンと呼ばれた売春婦とは違って、そのほとんどがアメリカ人とデートをする上流階級の中国人少女であった。[24] 女性美の新しい基準が形成されていくなかで、男らしいアメリカ兵士は、英語やダンス、スケートを学び、ハリウッド映画、ジャズ、ナイロン・ストッキング、煙草、酒を消費する現代中国の少女たちに、新しいタイプの性的スクリプトを提供した。誇り高い「ジープ・ガールズ」のなかには、「フォーリング・ガールズ」の他に、中国人大学生たちもいた。

半年間の裁判の間、レイプは現代中国で初めて公的な話題となった。新聞はレイプの定義を探求する一連の記事を載せた。汚された衣服やひっかかれた両脚から、陰毛の状態、膣の裂傷、なくなった精液まで、詳細な身体検査の記録が公表された。法廷の論戦では、性交に関する分かりにくい専門用語が細かく論じられた。中国の歴史で初めて、穢された女性の身体が公にさらされ、公の舞台で著しく「科学的」な言葉で全国的に論じられた。メディアのセンセーションは、中国における女性の「美徳」を左右する文化的概念を明らかにし、変化させつつ、個人的な問題に関して前例のない新しい言説を創りだした。

人の契機

戦時の悲劇の只中で、冷戦のイデオロギー的対決と紋切り型の外交史の大きな物語の食い違いの背後に、より微妙なものを明らかにする無数の隠れた契機があった。中国人学生たちはプラカードやポスターに、日本人やロシア人を描写するのに用いたのと同じ言葉を用いて、「アメリカ人の悪魔、けだもの、酔いどれ兵士」と書き、また、「君は孤独で、ホームシックにかかっている－家に戻りなさい」といったメッセージを書いた。[25] 太平洋戦争はすでに終わっており、天津のホームシックにかかった海兵たちは実際、おそらく彼らの中国からの脱出を加速させることを期待して、学生のデモンストレーションを応援した。彼らの多くは日本軍との長く消耗する戦いの後も中国に駐留していた。おそらくそれは彼らすべてにとって悲嘆にくれた時期であっただろう。

知られていないことが多くある。2人の主要な登場人物であるレイプ容疑者ウィリアム・ピアソンと被害者沈崇は共に物語から消え失せている。私たちは、当時23歳であった伍長が2001年に亡くなり、南カリフォルニアのテンプル・シナイ共同墓地に埋葬されたことを知っている。彼は1941年に軍隊に志願し、無慈悲なガダルカナル作戦を生き残った後、1945年にもう2年の期間で再入隊した。私たちはまた、沈崇が名前と大学を変え、専攻も英語からロシア語に変えて、1949年以後に彼女の家族が台湾に移住した後も共産主義中国にとどまっ

[23] Gail Hershatter, Dangerous Pleasures: Prostitution and Modernity in Twentieth-Century Shanghai (University of California Press, 1999) を参照のこと。
[24] Adam Cathcart, "Atrocities, Insults, and 'Jeep Girls'": Depictions of the U.S. Military in China, 1945-1949," International Journal of Comic Art10, no. 1 (2008): 140-54.
[25] Robert Shaffer, "A Rape in Beijing, December 1946: GIs, Nationalist Protests, and U.S. Foreign Policy," Pacific Historical Review 69, no. 1 (2000): 37 から引用。

たことを知っている。彼女の父親は、アメリカ領事への私信の中で、中国におけるレイプされた女性への社会文化的タブーを理由にして、娘がアメリカに行くための通行許可証を発行してくれるよう懇願している。北京レイプ事件の被害者としての沈崇のアイデンティティーは、彼女が亡くなる2014年の数年前になってようやく確認された。

まだ他にもある。沈崇の身体検査官であった日本で教育を受けた医師は、彼がレイプの証拠は確認されなかったと証言してからは、裏切り者と呼ばれた。当時の北京大学学長で長くアメリカ自由主義の支持者であった胡適は、アメリカの司法制度に深い失望を感じた。ジョージ・マーシャル将軍は、米兵の虐待に抗議する学生のデモ参加者に話すにあたって人目を惹く制服の海兵をあてがわれると怒り出した。また、ジョン・レイトン・スチュアート大使は、ワシントンに対して最初の評決を覆すことに反対する強い調子の手紙を書いたが、徒労に終わった。11歳まで中国で育てられた宣教師の息子であるスチュアートは、二世代にわたる彼の家族と共に、その人生の大半を彼の最後の願いとして遺骨が埋葬された中国に捧げた。しかし彼は、毛の有名な1949年の『さらば、スチュアート』によってのみ中国ではよく知られた人物となっており、そこでは彼は「アメリカの侵略政策が徹底的に失敗したことの象徴」と呼ばれている。[26]

これらの物語は、傷つけられたものが受けるに足る正義や隠された真実のためにということのみならず、それらが冷戦の初期の偶発的な契機における、かつての盟友だが現在は互いに信頼を失っている中国と米国との相互作用の複雑さを明らかにしているがゆえに、語られ続けている。10年余りのうちに、共産主義者が統治する中国は朝鮮でのアメリカとの戦争に突入していく。

そのころにはもう微妙さはなくなっているだろう。アメリカは大規模な宣伝と動員を通して、明らかに帝国主義的侵略者となり、中国は完全にその唯一のモデルであり、支援者としてのソビエト連邦の側に完全に傾いた。イデオロギー的相違は人種、階級、ジェンダー、善意、博愛の伝統、この時代の決定的な言説としてのその他の要因に打ち勝った。おそらく、1945年から1948年の反米主義との不気味な類似点を思い起させるのは、幻想と侵略の恐怖がないまぜとなり、アメリカ認識がもう一度矛盾をはらむようになった、1990年代以来のより最近の反米主義である。

---

[26] “他是美国侵略政策彻底失败的象征。原文は、毛泽东,《别了司徒雷登》, 一九四九年八月十八日にある。 ＜毛沢東『さらば、スチュアート』(1949年8月18日) 毛沢東選集第四巻、外閲出版社＞

モンゴルの地下資源開発の現場
ーモグラのように生きる「ニンジャ」の女性たちー

今岡良子

モンゴル国営放送が 2010 年に制作したドキュメンタリー作品を紹介します。ボールヒンツァガーンという若い女性が、モグラのように地下を掘り、土砂を袋に詰めて運び出し、妹がその土砂を水で洗い、金をさらい出す。彼女らの母は、ボールヒンツァガーンの 2 人の子どもの面倒をみている。これは、抜け出せない地下労働者の暮らしを描いた作品です。この仕事をしている人をモンゴルでは「ニンジャ」[1]と言います。鉱山会社の正規労働者ではありません。鉱山会社が「合法的」に採掘権を得た金鉱山の周辺で、採掘許可を取らずに、砂金を集め、ブローカーに売り、生計を立てている人々です。「合法的」と書いたのは、人間が民主的に制定した法律に従って行われる採掘も、不法に行われる採掘も、自然から見ると、破壊であり、収奪であるという点では同じだからです。

なぜ、彼らを「ニンジャ」と呼ぶかというと、アメリカのテレビ番組に Teenage Mutant Ninja Turtles というアニメがあり、亀の甲羅を背負うアニメの主人公が、不法採掘者のニンジャが大きな緑色のたらいを背負って歩く姿に似ているということからです。

この作品の背景を説明に入る前に、これを見た時に思い出した国営放送の番組についてまず書いておきたいと思います。その番組の名前は忘れましたが、ゴビ地域に住む「нөхөргүй（ヌフルグイ）」、夫のいない女性戸主の遊牧民家庭についてのドキュメンタリー番組で、1990 年の民主化後に放送されたものです。モンゴルの自然条件は降水量の多い北から南へ、森林地帯、森林草原地帯、草原地帯、ゴビ草原地帯、砂漠地帯と変化します。モンゴル人は、「ゴビで人間として暮らすより、ハンガイで牛として生きた方がいい」と言います。ハンガイとは、北部の森林や森林草原地帯を含む地域で、湖があり、河川が流れ、草の豊かな植生を指します。ゴビ草原や砂漠地帯では、井戸などの生活インフラの整備が遅れ、しかも大型家畜のラクダを主に飼うため、北部と比べると、その労働は非常に過酷なものでした。一度に 100 リットルもの水を飲むラクダのために、手で水をくみ上げる労働のきつさを想像できるでしょうか。遊牧民の男性でも、若いうちから関節炎を抱え、兵役や進学の機会を使って首都ウランバートルに移住する傾向がありました。こうして、ゴビ草原や砂漠地方の男性人

---

[1] ニンジャとは、Монгол "НИНЖА" нар （モンゴル『ニンジャ』たち）
<http://www.ikon.mn/p/6ly> この web ニュースに写真があります。日本語で読めるものとしては、佐々木健悦『現代モンゴル読本』（社会評論社、2015 年）、鈴木由紀夫「ニンジャ」『現代モンゴルを知るための 50 章』収録（エリア・スタディーズ、明石書店、2014 年）

口が減り、女性を戸主とする遊牧民の家族が生まれていきます。一方、冬の保存食となる乳製品を作る女性は、子どもを労働力に、生き続けることができます。四季の営地を移動する時、力仕事は、その時だけ兄弟や親戚から借りればいい。私が初めてゴビ遊牧社会を訪れた1989年、それはモンゴルの社会主義の最後の年でしたが、女性戸主の家は、社会の中で差別されることもなく、家畜を飼い、国家調達の義務を果たし、社会を支えているという意識を持ち、堂々と暮らしていました。しかし、家族全員が働く遊牧民の家では、1日中放牧に出る役割の人が、近隣の遊牧民の家を訪ね、情報を収集して帰ってきます。女性戸主の家では、家から遠く離れる外周りの仕事に時間を割けなくなり、社会の変化に関する情報に接する機会が少なくなります。1990年以降の民主化、1991年の市場経済への移行、ネグデル（農牧業協同組合）の解体、家畜の私有化など、次々と新しい法律が制定され、政策が展開される中、女性戸主の家では理解ができていない人が多くいたことを私は強く印象に持っています。その国営放送の番組は、社会主義の時代、国家調達を供出するためにネグデルの家畜を飼い、社会を支えてきた女性たちの問題を解決することもなく、民主化により華々しい時代に向かっていく政府や都市の人々に対して、警鐘を鳴らしたかったのだろうと思います。ゴビに置いてきぼりにされる人々に光を当て、民主化はこの女性たちを救うのか、と問いただしたのでした。[2]

2 ゴビ砂漠に生きる遊牧民女性に関する詳細は、今岡良子「ゴビ砂漠を生きる女性たちと」、『地球のおんなたちー女から女へ、女を語る』（大阪外国語大学女性研究者ネットワーク編、嵯峨野書院、1996年）

国営企業の民営化は、そのほとんどが失敗し、労働者は職を失い、住んでいた企業の寮も失います。日本でもNHKがストリートチルドレンの問題を3本も作品にするほど、市場経済移行後のモンゴルの貧困問題や家族の崩壊が深刻な問題になっていました。

一方、地方は、1991年に農牧業協同組合が民営化され、遊牧民は家畜を自分のものにすることができ、家畜を増やして豊かになっていきます。地方の県や郡の中心地に住む人々も家畜を飼う遊牧民になる人が出てきます。

しかし、1999年の冬から、北極から爆弾低気圧がモンゴル高原に居座り、ゾドが起こりました。ゾドとは、寒波や大雪、また、干ばつによって家畜が大量死することを言います。1999年から3年続けて、およそ1000万頭近い家畜が死にました。社会主義の時代は、大雪に覆われた地域には上空から軍のヘリコプターが乾草や食料を落として救援するなど、社会的に解決していましたが、個人の財産になった家畜に対して、政府は社会主義の時のようには動きませんでした。

筆者の定点調査地域バヤンホンゴル県ボグド郡では、1991年以降、人一倍に働いて、家畜を増やした遊牧民ほど、損害が大きく、遊牧民をやめようと考える人が出てきました。地方の県や郡中心地に住む人には公務員の他、畜産物の流通・販売の業種が多く、1999年のゾドではまず、畜産物商人が地方で暮らしていけなくなり、首都に流出していきました。その次に、教員や病院関係者が、首都移住を始めました。

ゾドの後、筆者の調査地では[3]、家畜を失った遊牧民は、他人から家畜を借りて、増やすことを考える人、ジャガイモを植えて、販売したお金で、母家畜を買ってきて、繁殖することを考える人、近くの金鉱山へ行き、砂金を採るニンジャになって日銭を稼ぐ人が現れました。ニンジャという出稼ぎをしても、ある程度のお金を貯めると、もともと遊牧民だった人は、遊牧民に戻ることの方が多く、市場経済移行後に遊牧民になった人は、採掘に必要な機械や道具を買い揃え、専門の採掘業者になって仕事を続ける人も一部にはいましたが、相変わらず、手にした金をその日の食い扶持に費やすしかない人は多くいました。金の採掘地はもともと何もない草原ですが、ブローカーの店ができ、食堂やバー、カラオケの店も並びます。家畜を飼って暮らす場合は、食料はもちろん自給できますし、燃料も家畜の糞を乾かして自給します。しかし、家畜を持たない人が採掘地で暮らすには、水、食料、燃料をすべてお金で買うことになります。

このドキュメンタリー作品に登場するお母さんは、家畜を飼って暮らしていたようです。

---

[3] 大雪や酷寒、干ばつなどによって家畜が大量死することを、モンゴル語で「ゾド」という。1999年以降のゾドについては、塩見英恵「2000年春のゾド報道から見えるもの」「モンゴル研究」19号、ゾド後の遊牧民の暮らしの変容については、2001年、今岡良子「2002年夏のツェルゲル　―ゾドの後はゴールド・ラッシュ、首都ラッシュ」「モンゴル研究」20号、2002年。「2003年夏のツェルゲル　雨の年、ホルショーの再生か？」「モンゴル研究」21号、2003年を参照してください。

理由はわかりませんが、家畜を失い、娘2人と一緒に、金の採掘場に流れ着いて、働くようになります。その娘2人は、この採掘場で大人になり、モグラのような暮らしからなんとか這い上がろうとします。長女は、結婚をきっかけに脱出をはかりますが、自分と子ども2人を残して去っていった男を待ち続け、次に優しくしてくれた男にも期待し、また捨てられます。女姉妹が毎日掘り出す土砂の量は少なく、採れる金の量も多くありません。ブローカーの経営する店で、日々の食料と薪を買い、借金を返しながらの労働が続き、地中の仕事から脱出することができないでいます。

社会主義の時代、鉱山労働者は、専門学校や大学で鉱山に関する知識と経験を身につけた専門家で、過酷な労働故に、一般労働者よりも5年以上早く年金がもらえるなど、労働者として尊敬された職種でもありました。資本主義社会に移行してすぐ、1994年に鉱物資源法が制定され、国内資本家により鉱山開発が始まります。先に述べた1999年のゾドをきっかけに、企業が採掘する金鉱山の周辺で、そのおこぼれを手ですくうようにニンジャたちが砂金を集めるようになりました。2006年、鉱物資源法は、戦略的に重要な鉱山を定めた上で、外国資本が投資を容易にする一方、国内への再分配を優位に展開しようという意図を込めて改定されました。その時、「モンゴル人は黄金のベッドの上で眠っている」(地下資源を持ちながら、利用しないまま生きてきた)、「モンゴルの国民は、アラビア人のように石油で豊かに暮らせるようになる」という夢が語られました。外国の投資による鉱山開発が、モンゴルの経済発展の基軸であるという認識が、国民的に共有されていきます。一方、外国からモンゴルに入ってくるのは、資本だけでなく、中国や北朝鮮からも労働者が来て、「合法的に」鉱業を行う鉱山で働くようになりました。

2010年に放送されたこの作品は、モグラのように地中を掘り、砂金を採る女性に光を当て、モンゴル経済を支える鉱山の片隅の実態から、これが「豊かに暮らせる」ということなのか、と厳しく批判しています。それは、社会主義時代に経済の基盤となって働いたゴビの遊牧民女性の問題を突きつけて、彼女らを置いてきぼりにする民主化とは何かと批判した視点を共有していると思います。次に作品の書き起こしをまとめました。ぜひ、ご一読ください。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ドキュメンタリー映画 Care women ／モンゴル／ 文字起こし

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ウブルハンガイ県、オヤンガ郡、ウルテーン フンディー

ボールンヒーツァガーン： 穴の下から土砂を運びあげ、水で洗って、金を取り出して、売って、暮らしています。しかし、穴の下、20 メートルの穴に降りていくのは辛いことです。こうして綱をつかんで、降りる時、足が痛くて辛いです。つかむ時、手が痛くて辛いです。上にいる人は、落とさないように体重をかけてひっぱりながら降ろします。そうして地中、何メートルも深いところから 1 人が引っぱりあげ、1 人が土砂を運んで来ます。

こんな恐ろしく深い、何メートルもの穴に入っていくのは、怖くて、怖くて仕方ないです。崩れる恐れがあるので、そうなる前にとにかく急いで土砂を掘りだします。もう崩れるなあ、崩れたらどうしようと心配しながら土砂を袋に入れて上にあげます。でも、金が出てくる袋も、出てこない袋もあります。上にひきあげた袋から金が出ないと、また別の穴から入ったらどう、と言われます。たった 1 つの袋から金が出てこないのは当前でしょう。2、3 袋分、掘り出して、上にあげるのだけど、生身の人間だから辛いです。壁が崩れることが怖いです。手が痛いです。横穴を這って掘っていくのは、首が辛いし、手足が冷えます。腹這いになる体勢は辛いです。

私は、17 才でニンジャ（許可なく砂金を採る人）になりました。小学校 3 年生で学校をやめました。お母さんは私に「家畜の仕事をしなさい。家畜の番をする人がいないのよ」と言うので家畜の世話をしていました。しかし、その家畜がいなくなったので、砂金取り場に来ました。でも、今、砂金取り場に来て、いいことなんかなかったと思います。母さんと、妹と、土砂を掘って、食べものを買うお金を作って、なんとかこうやって生きているだけです。

掘った土砂は地上まで運びあげ、水で洗います。水がなかったら、水を運んで来ます。ドラム缶の下で火をおこし、水を沸かし、凍っている土砂を溶かしながら金をさらい出します。こんな寒い日は本当に辛いです。私たち娘は母について来て、こんな危険なことをして暮らさないといけなくなりました。

土砂は、水を運んできて、洗わないといけません。水なしで砂金をとりだすことはできません。たらい 1 つ分の土砂を水で溶かしたり、汚い水を捨てたり、すすいだりします。すすぐ水は何度も使いまわしします。ドラム缶にくんだ水を入れておき、たらいにとって使います。黄色いタンク 2 つ分の水（40 リットル）で 4、5 袋の土砂を洗っています。1 台のバイクで 4 つの黄色いタンク（80 リットル）の水を運びます。そうして一日中、水くみの仕事をしています。砂金を洗うのに 1 トンの水が必要です。こうして、50、60 袋分の土砂を洗って、ようやく金が採れます。

お母さん： 行ってください

隣人： お母さんが「お茶を飲んで」って呼んでいるよ。

ボールンヒーツァガーン： はい、ちょっと待って、行くから

私の二人の子ども。これは長女。妊娠したって言ったら、彼は「ちょっと家に帰って来る」って言って、戻って来ませんでした。待って、待って、ずっと待っていたけど、帰って来ないので、母さんが長女の面倒をみてくれました。

次の彼はバヤホンゴル県出身で、ちゃんと夫婦として暮らそうと思っていたのに、ある日、兄さんが来て、「弟が大変だ」と言って連れて行きました。兄さんは「またここに帰らせるよ」と言ったけれど、本人は戻って来ませんでした。音沙汰がなくなりました。ずっと、待っていたけど、ここには帰って来ませんでした。

長女は4歳で次女は2歳。2人とも入院するほどの病気をしたことがあって、母はこの子たちのことも心配してくれています。

ボールンヒーツァガーン： ミルクを飲ませに来たの。

彼には「薬代だけでも持って来てくれるだろう」とか、「たった1人の娘に薬を買ってあげなさい」、「靴を買ってあげなさい」、「ズボンを買ってあげなさい」と言って近くまで帰って来てくれないかと思うことはあります。

私自身は、もう帰って来ない人をどこから帰ってくるとか、どこに行ったかとか、思ってもしかたないと思っています。

お母さん： 寒いかい？

ボールンヒーツァガーン： 寒い。凍えそう。特に足が寒いわ。

お母さん： もっと土砂を運んで来たら、出る金の量も増えるし、自分たちにとっていいのでは。

ボールンヒーツァガーン： これは普通の仕事じゃない。凍った地面を掘るのは無理、外でも中でも、火をおこさないといけません。普通の土地に小さな穴を掘るのとはわけがちがう。火をおこすために、まず、薪を買わないといけないのです。

お母さん： ちょうど良い時にもっと頑張って、借金を払い、米や粉などの食料代を用意したらいいのだけど。これからもっと寒くなったら地面が凍ります。凍りつく前に少しでも

お金を蓄えて、自分の分も半分あげて、一緒に小麦粉や米を買って、冬を越すための肉を買って、食べられるだけでいいのです。

お母さん： はい

ボールンヒーツァガーン： わあ、寝ているよ。キス。

お母さん： コップを持って、2つでいい。二重にして持ちなさい。私が立ちましょう。わあ、この子は寝ているわ。はい、連れて行って。向こうへ。

長女が15、16歳で、次女は7、8歳でしたねえ。家畜がいなくなり、砂金取り場に来て、砂金取り場で食べ物を買うお金をこしらえるようになりました。私がなんとかここに来た時、この娘たちはまだ幼い子どもだった。私は9メートルの穴と15メートルの深い穴に入ったことがあります。そのうち、大きな穴に入ると心臓がドキドキするようになってきました。

ここへ来て、こんな暮らしを続けるより死んだ方が楽だと思ったことは何度もありました。「死ぬまで我が子を手離さなさい」と言いますが、この小さな娘たちを見ながら可哀想で泣いたことは本当です。1人は学校を出たが、1人は学校を辞めさせました。長女には学校を卒業させてあげられませんでした。家畜がいた時に、学校に入れておけばよかったと思います。小学校3年生じゃなく8年生を卒業させておいたらよかったのにと思います。義務教育の8年制の卒業証明書があれば、役場の清掃の仕事でもやれるでしょう。そんなことを思って、何度も後悔しました。

今は、後悔しています。子どもの教育のために、私は何ということをしてしまったのかと思います。この2人の孫は、学校で勉強させたいと思います。学校を出たら、お母さんを助けるために何とかするでしょう。お父さんに捨てられたので母親しかおらず、辛いでしょうよ。2人の子どもをお父さんは2人とも捨てていってしまった。女の人が1人で2人の子どもを育てるのは大変なことです。だけど、できる限りのことをしてあげようと思います。

少し前は、2、3袋の土砂があれば、なんとか食べ物を買うお金にはなると思って頑張りました。今は、牽引車にいっぱい土砂を運んで、砂金を集めても、食べ物を買えるだけのお金になりません。いつの間にか、牽引車で土砂を運んで砂金をとるようになりました。

緑色のデールの男性（ニンジャ）： この娘と（ボールンヒーツァガーンのこと）何年も前から近所で、このバローン・ズーン谷ではお隣同士でした。土砂運びの仕事は、女子どもにはきつい。とてもきついよ。女の人が1袋の土砂を運ぶといっても、少なくても、約25、30キロの袋を持ちあげることになる。穴の深いところから運びあげるのは難しいよ。

ここで、働いている女性はボールンヒーツァガーンだけじゃなく、いっぱいいる。ニンジャとして働いているうちに、妊娠した女が土砂を運んでいるのも見ました。目をそむけたく

なることもたくさんある。寒い冬、雪嵐の季節になっても、食べ物を買うお金をつくるために、凍えきった地中で土砂を掘り、凍えきった体には、薪に火をつけても温まらない。それは土砂を溶かす水を温めても、ニンジャの体まで温めないんだ。

ここには、家畜を失った遊牧民や、家畜はあっても貧しい遊牧民、また、定住地からもたくさん来ています。夏は急に増える。一気に増えます。

大学生たちは夏休みに、次の学期の学費をつくるために来て、また帰っていく。私たちのように貧しいものは、ここで残り、冬を越すことになります。

私は 50 代になった。私のようなものも、ここで人生が終わるだろうと思うが、ここの若者にとっては本当に暗い未来に向かうしかないと思います。この砂金取り場で、若者が暮らし、家をもち、家族をもち、一定の賃金がもらえるちゃんとした仕事につくことはできません。そうでしょう。ああ、この人は 8 年もニンジャをしたので、年金を何パーセントか増やしてあげようとか、数パーセント上乗せしてあげようとか、そういうことはありえないでしょう。だから、若者たちの将来はとても暗い。ここで出会って結婚し、子どもが生まれている。モンゴルの人口はこうして増えているんです。

ボールンヒーツァガーン： 土砂を洗い、金をさらって、それを店へ持って行きます。数グラム、零点いくら、0.2 という小数点以下の単位。夏は、これぐらい働くと、0.3 グラムぐらいある。冬は、寒い中頑張っても、01。店に借金があると、それを返済して終わるし、借金がないと収入になります。それで、薪を買う、食料を買う、燃料を買うと全部なくなります。店では使う分だけ買います。1 日の仕事分にあわせて買い物をするようにしている。

店員： 0.3 g で 12,100 トグゥルグになる。その内から 1,650 トゥグルクを引く。

ボールンヒーツァガーン： ガソリンの 600。

店員： ガソリン 600 トグゥルグ、玉子 1,200 トグゥルグ、石炭 6,000 トグゥルグ、粉 500 トグゥルグ、ケーキの残り 250 トグゥルグ、残高は 1,800 トグゥルグ。

店員： 大変ですよ。貧しくなって、学校も卒業してないのだから。この 2 人の娘は、文字が読めません。1 人は、なんとかサインだけでも書ける。もう 1 人は、サインも書けません。そんな子どもたち。しかし毎日、土砂を運んで、生活している。金があれば、持って来る。金がとれなかったら、うちから借金して何とか過ごしている人たちだよ。

ボールンヒーツァガーン： 昨日の薪は 3,500 トグゥルグ、ニンジャといっても人の子なので、シャンプーを 2 つ買って頭を洗いました。玉子やインスタントラーメンは 6,000 トグゥルグになります。0.2g は 8,000 トグゥルグなので、何も残りません。昨日の夜に薪を買ったが、今日も買う。金の採れ具合にあわせています。

お母さん： 寒いかい？

娘たち： 寒い。ノミオ、薪をとってちょうだい。

ボールンヒーツァガーン： こんなニンジャの暮らしをずっと続けたくないです。どうしたら逃れられるのか、どうしたら2人の子どもを学校に行かせることができるのか、と考えています。学校を卒業して、自分の力で、明るい将来に向かっていけたら一番良いと思う。しかし、入る学校はどこにあるのか。どうやって、養っていくのか。お母さんは年を取っているし、いつかどこかで転げ落ちて死んだら、私たちの4人が親なしで生きないといけなくなります。

妹： お姉さんは穴へ降りた。

お母さん： そう、崩れなかった？

ボールンヒーツァガーン： 大丈夫だった。でも降りる時に手と足が痛くて大変だった。

妹： 今日は金が少ない。買い物しないで借金を返した。

ボールンヒーツァガーン： 薪の借金を払った。

妹： お母さん、明日の朝、早く起こしてね。お願いね。

ボールンヒーツァガーン： ん？ どうしたの？ 顔を洗ってあげないと汚れているわ。

2人の子どもに冬の寒さを感じさせたくないし、飢えの苦しみをさせたくない。辛くてもニンジャの仕事をやり続けて、食べさせ、暖かい服や靴などを買ってあげようと思います。

借金できたかなー、食べ物なくて大丈夫かなー、っていつも心配します。

子どもの頃からニンジャだけど、子どもの頃は、そんな心配することなかった。

彼氏ができて結婚するという希望があったけど、実家に帰って来るって行って戻らなかった。もし、学校を卒業できたなら、ニンジャじゃなく清掃の仕事でもやる可能性があったと思います。首都ウランバートルへは行ったことがなく、県中心なら行ったことあります。今までの一番良い思い出というと、ナーダムの祭を見たこと。

＊＊

今日、モンゴル国では10万以上の人が手で金を掘り、ニンジャとして暮らしている。
そのうち60%の人がボールンヒーツァガーン/Booronhii tsagaan/のように、
子どものために、土にまみれて働いている女性です。

＊＊

編　　集　D.オユンチメグ
監　　督　L.アリオンジャルガル
撮　　影　J.ニャムスフ
撮影助手　U.ソミヤ
協　　力　ウブルハンガイ県オヤンガ郡
　　科学アカデミー持続可能な小規模鉱山プロジェクト

2010年　MNB モンゴル国営放送 制作
ABU TV DOCUMENTARY CO PRODUCTION CARE (Change Asia Rescue the Earth)

資料紹介

第二回原水爆禁止世界大会に出席したソビエト代表A・ソフローノフの旅行記

抄訳・解説　エネビシ・藤目ゆき

アナトリー・ウラジーロヴィッチ・ソフローノフ(Анато́лий Влади́мирович Софро́нов, 1911-1990) はロシア人の作家、翻訳家、ジャーナリスト、詩人、戯曲家、編集者であり、1948年と1949年の二度、スターリン賞を授与されている。1948年から1953年にかけてソビエト作家同盟の書記をつとめた。『アガニョーク(Ogonyok)』は19世紀末から今日まで刊行されている、ロシアで最も長い歴史を持つ雑誌の一つであり、ソフローノフは1953年から1986年の長年にわたり、この雑誌の編集長であった。ここに紹介する文章は、ソフローノフが『アガニョーク』（10月21日号／11月12日号）に連載した、1956年8月の第2回原水爆禁止世界大会のために来日した際の旅行記の抄訳である。

1954年に米国がビキニ環礁で行った水爆実験は広範囲に死の灰を撒き散らせ、被曝した漁民の1人である久保山愛吉氏は放射線障害のために帰らぬ人となった。米ソ冷戦下の核軍拡競争が続く中、原爆被爆国でありビキニ実験による被曝をも体験した日本において原水爆禁止運動が高揚し、1955年に広島で最初の原水爆禁止世界大会が開催される。世界の人々が日本の被爆体験と原水爆禁止運動に注目し、国境を超えて共感と支持が広がり、1956年に開かれた第2回原水爆禁止世界大会には世界中から37人の海外代表が参加した。大会の2日目には日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）が結成されている。

海外代表は中華人民共和国、朝鮮民主主義人民共和国、ソ連、チェコスロバキア、フランス、ポーランド、ルーマニア、米国、フランス、英国、ベルギー、スウェーデン、スイス、イタリアなどから参加した。ソ連からは、中国・朝鮮と並ぶ人数の代表団を編成して来日した。ソフローノフは、そのソ連代表団の団長を務めていた。他のソ連の代表にはフラードル・イワノヴィッチ・コジエヴニコフ（医学博士・モスクワ国立大学教授）、ウラジミール・ワシリエヴィッチ・エルマコフ（医学研究所教授、医師）、オリザ・コンスタンチーノヴァコローボヴァ（レニングラード高校教職員組合委員長）、セルゲイ・パトローヴィッチ・ハーリン（通訳）らがいた。

原水爆禁止運動に関する記録を残し研究することは国際的に重要な現代史の課題であり、第一に注目されるべき宣言文や議事録などの公的記録はかなりの程度まで資料として集成され、公刊されてきた。が、それに比して、運動の参加者それぞれの観察や感想、参加者同士の関係などの個人的な記録はあまり公にされていない。特に外国代表については来日中の新聞や団体の機関誌などにいくらか紹介される程度であり、紹介されても氏名や団体名の記載に留まることも多い。その意味でソフローノフの旅行記は、各地の取り組みや出会った人々との思い出も書かれ、当時のロシア人の目から見た日本の社会や運動の様子が生き生きと描かれ、日ソ共同宣言（1956年10月）直前の日ソ交流を記録するものになっており、初期原水爆禁止運動の資料として興味深い。

米軍基地を通って長崎に到着

昨夜、海外代表のほとんど全員が汽車で長崎へ向かったが、私たちは福岡まで飛行機で飛び、そこで長崎行きの汽車に乗ることになった。暑い中、同行者で作家の和田が時計を見て列車の心配をしている。飛行機は福岡まで 3 時間。飛行機の翼の下に現れてきた巨大な飛行場には、米軍の戦闘機があちらこちらに見える。飛行機のそばにいるバスに乗るために、有刺鉄線柵のゲートへ向かった。飛行場では建物の建設中だった。工事車両や忙しく働く麦わら帽子の日本人作業員たちが見える。ゲートの前には守衛が立ち、有刺鉄線に「撮影禁止」の貼り紙がある。日本人の乗客は、米軍の戦闘機が支配的に翼を広げる飛行場の敷地から無遠慮に追い出されて気分が悪そうだった。

歓迎の言葉をロシア語で書いた看板と花を手に持った何人の若者が私たちを有刺鉄線柵の隣で迎え、花を渡してくれた。乗用車で福岡市の駅へ向かう。駅で大勢の人が歓迎し、挨拶の後、誰かが手を振ったら青年男女が手をつなぎ、揺れながら覚えやすい素敵な歌を歌った。私たちの正面では熱心な表情でアコーディオンを弾く奏者がいて、その指は真珠色の鍵盤上を走った。「原子爆弾を禁止しろ！という曲です」と、若者の一人がロシア語の発音に苦労しながら教えてくれた。「ロシア語が話せるのですか」と嬉しくなって聞くと、若者は「少しだけ。私一人じゃなくて、ここにロシア語を勉強している学生は何人もいますよ」と言う。「ソ連で映画化された『オセロ』はまもなく日本で上映されますか？」「セルゲーイ・フョードロヴィチ・ボンダルチュークの制作している映画ですか？」などと話が盛り上がり、ロシアの劇場や文学、医療分野での出来事を彼らが詳しく知っているので驚いた。和田が焦って「ここから長崎までどれぐらいの距離でしょうか」と迎えに来た人に聞くと、300 キロだという。結局、汽車で早岐駅に行き、そこで乗り換えて、残りの 30 キロをタクシーで行くルートが一番早く、長崎に深夜 12 時に着くとわかった。列車の中で、長崎へ行く大阪からの代表たちと会った。「大阪から 100 人ぐらい参加する予定です」とのことだった。

長崎の街には破壊の跡がまだ残り、仮設住宅が建っているが、商店街は雑多で賑やかだった。蓄音機の音が聞こえ、アメリカ映画の騒々しい広告が流れ、歩道に面して食器店や靴屋の広い屋外販売台が並ぶ。長崎の原水爆禁止第二回世界大会には約 3000 人が参加し、満員で会場に入れない人もいた。広島、長崎、東京、大阪、沖縄、北海道、四国の代表たちが参加した。イザベル・ブルーム、マリー=クロード・ヴァイヨン・クーチュリエ、モニカ・フェルトン、中国の大作家魯迅の妻を団長とする中国代表団、チェコスロバキア、ルーマニア、ポーランド、スイスの代表団も来た。子供たちから代表たちに花束を手渡した。正午に長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念像の建つ丘で平和祈念式典が開催された。青空が広がり蒸し暑い中、式典の参加者に日陰を作るために大きなテントが立っている。遺族が捧げた無数の花束が平和祈念像の足元に置かれており、たくさんの子どもたちがいる。鳩を空へ飛ばして式典が始まり、市長は大きな字でスピーチの内容を書いた黄色の巻紙を開いてスピーチを始め、「原水爆禁止のために全力を尽くしましょう」と呼びかけた。続いて少女が立ち、平和祈念像を見ながら語り始めた。「母と弟は原子爆弾によって殺されました」。ラジオの拡声器は少女の悲しい言葉を遠くまで響かせた。遠くに、鬱蒼とした森で覆われた山々が暗く見える。空には軽飛行機が旋回し、鳩が舞う。式典の参加者たちは泣いていた。

平和祈念像は「人々よ、警戒を怠らないように！」と言っているような姿勢で手を上げている。伸ばした一方の手は、発言者の言葉と合わさって「恐ろしい悲劇の繰り返しを許しま

せん！ 被爆諸霊の冥福を祈ります。あなた方の子孫はあなた方を忘れません」と伝えようとしているように見える。

太陽は明るく輝き、式場を飾る銀色のリボンや平和祈念像前のテントの布から光を反射させる。女子生徒の合唱団が歌う悲しい歌は強く響く。11 年前にアメリカが原爆を投下した。人類の希望は打ち砕かれ、幸せは奪い取られた。長崎や広島で体験した恐ろしい経験は人々の肉体だけではなく心を深く傷つけた。海外からの参加者の一人が「原子爆弾とは何かを理解するためにここへ来るべきです」と言った。

原爆犠牲者は次々と演壇に上がった。中には自分で上がれる人もいれば、人に助けてもらいながら上る人もいる。その場面を見るのは苦しかった。広島から来た少女はこう発言した。「アメリカが原爆を落とした時、私は小学校 1 年生でした。何も悪いことはしていません。どうしてその私の上に原爆が落とされたのですか？ 私は今では健康が回復していますが、日本人や世界中の人々に私の経験を知ってほしいと思いました。昨日、広島で一人の女性が自殺しました。両親が被爆者との結婚を許さなかったからです。全世界の人々に助けを求めたいです。私たちを助けてください！」

どこへ行っても苦しい経験を思い出させるこの街で開かれた原水爆禁止大会の最中、最も多く使われていた言葉の一つは「生きる」という言葉だった。人間は生き残ることを望んでいる。夕方、長崎の街が多彩な提灯を手に持った生徒たちで満ちあふれた時も、悲しい日に生きることの素晴らしさを歌と踊りで伝えようと何十万人の市民が浦上公園に集まった時も、私たちは人間の強い力を感じた。広場で 10 人の若者が長い棒で龍の長い胴体を揚げて出てきた。龍は口を大きく開けて太陽を表した金の玉を飲み込もうとする。これは「龍と太陽」という踊りだ。力強く踊る彼らの一人一人が龍の魚鱗の胴体を上手に動かす。龍の頭を棒で揚げた若者は一番腕がよかった。彼は他の踊手の邪魔をしないように龍の頭を上手に回し、時には玉を噛もうとしているように踊る。が、金の玉は常に龍から逃げる。この龍の踊りは古代中国の舞踊に由来するという。ホテルに戻る途中で案内人の女性が手にマイクを持って長崎の歌を歌ってくれた。その歌詞は、長崎の町が美しく、綺麗な花がたくさん育ち、人々が楽しい生活を送っているという良い歌だった。彼女は揺れるバスの中で、音楽なしに「蝶々夫人」のオペラを歌ってくれた。

日本のうたごえ

会議 2 日目に和田が「今晩、1 時間ほど皆様を日本のうたごえ運動に参加してもらいたいです」と言った。日本のうたごえ運動の創始者である関鑑子について聞いたことがあったが、この運動が日本でどれほど広がっているのか想像がつかなかった。車は丘の上へ上がり、狭い道を急に曲がって 2 階建ての建物の前で止まった。中に人がいる様子もない。が、急に人の声が聞こえ、玄関に男女が出てきた。私たちを待ってくれていたのだ。薄暗い明りの廊下で 100 足の靴が並んでいた。藁で作られた柔らかい敷物の上を歩いて小さい部屋に入ると、そこに目が輝く 100 人近くの若者が壁に沿って立っていて、親切に迎えてくれた。「長崎では原水爆禁止国際会議と同時に日本のうたごえ合唱団のセミナーが行われています」とセミナー企画者が言う。私たちは東洋の習慣に従って胡座をかいて床に座った。私たちに 1 時間しかないため企画者は急ぎ、若者たちが一人ずつ自分の代表する街の名前と合唱団のことを紹介してくれた。「北海道から来ました」と背の低い少年が言う。北海道には 6 つの

合唱団がある。「本州から来ました」と他の若者は言う。「東京から来ました」と 3 番目の若者が言う。東京には 3 つの合唱団があり、その他に劇団や芸術楽団もある。「四国の高知から来ました」と濃青色の服を着た男子が言う。胸がどきどきした。世の中に良い人がたくさんいるのを確認できた感動。生き方を模索する素晴らしい若者たち。アメリカ人が日本で普及宣伝している、倫理を低め人間の崇高な使命に不信を示すような物事に対して彼らは抵抗している。この小さい部屋に、自分の目で死を見たが故に生きる熱望を持ち、そのために全力を尽くすことができる新しい日本人が立っている。

「私は沖縄からきました」と一人の若者が言った。この言葉だけで十分だった。沖縄はアメリカの占領に対する日本人の闘いの象徴だ。「私たちは宮崎からきました」と青いワンピースを着た女性は隣の同じ服装の仲間を指しながら、「私たちは着物工場で働いています」と続けた。「今から、歌を歌いましょう」と班長が言い、突然部屋に懐かしい歌曲が流れた。夢を見ているような気がした。日本の若者たちは歌っている。外国語で歌っているのに、ロシア語のように聞こえてくる。20 年前に、ミハイル・イサコフスキーが作詞し、マトヴェイ・ブランテルが作曲した「カチューシャ」はここまでやって来たのか？ 帆なしに海と山を渡って、大勢の人々に好かれて、違う言語で話す人々を一つにするこの歌曲の運命は羨ましい。少し寂しいけどおなじみの最も古い歌がもう一つ響いた。「山から金を掘るバイカル地方の未開な草原で」と伴唱したくなる。その次に、映画「クバンコサック」の歌が演奏された。映画そのものより歌が単独で日本まで伝わっているのだ。

後年、日本を訪問した時にも「日本のうたごえ」合唱団と何度も会うことができた。が、この運動の優秀な代表たちとの最初の出会いは心に深く残った。今、私たちの前で黒い目をした若い男女は手をつないで左右に揺れながら、日本人にとって「全世界民主青年歌」となった「原爆許すまじ」という歌を歌っている。日本を旅する際に私たちはいつも中国、フランス、スイス、ルーマニア、チェコ、日本の若者と肩を組み何度もこの歌を歌っていた。民衆の働きかけで米国と英国の政府は原水爆製造と原水爆の爆発実験を禁止するソ連の提案を支持し、母親たちは子どもの命のために恐れを知らずに闘う時代が来ることを私たちは確信する。歌の曲があまりにも美しかったので、歌詞をロシア語に訳してみた。この歌は木下航二が作曲し、歌詞を浅田石二が作詩した。

若者たちと会って興奮した私たちはホテルに戻るため車に乗ると、運転手にゆっくり走るように頼んだ。アジアのどこでもあるように日本でも商店街は夜遅くまで賑やかだ。夜になると小さな店の周辺は最も賑わう。客が多いからではなく、むしろ少ないから蓄音機の音が聞こえ、売り手は客を誘い、ネオンランプは店のそばに吊した多彩な飾りを照らしながら点滅する。交差点でチェックの薄いシャツを着た背が高い何人かの若者が立っている。彼らの前で小さい日本人がお辞儀をしている。アメリカ人を店に誘っているようだ。蓄音機からジャズ音楽がうるさく流れるが、その音は日本の本当の主人である日本人の優しい声を忘れさせることはできない。

被爆者の証言

原水爆禁止世界大会で原水爆禁止する決定を全員が合意した。会議の参加者全員がもう一度起立して「原爆許すまじ」を歌い、会場の拍手は長く続いた。

「平和万歳！」

「全世界の人々の友好関係万歳！」

海外代表たちはこの日、原爆被爆者たちと会った。学校の小部屋の広いテーブルの傍に広島と長崎の被爆者たちが立っていた。会議の会場では彼らを他の参加者たちから見分けるのは難しかったが、ここの部屋に被爆者全員が集まっていた。彼らに何か共通性があるように思われるのは、ほとんどの人の顔に残る傷跡のためではなく、胸を重くする何かが彼らの目に宿っていたからだ。

広島から来た若い女性が最初に話した。「息が苦しいです。働くこともできません。今も病院に入院している人々がいます。私たち被爆者は健常に見えますが、実は治らない病気にかかっています」。もう一人の少女が口を動かしたが、何も聞こえなかった。かわりに隣に立つ白髪の人が話した。「すみません、私の娘には話すことができないのです。原爆が投下された時に娘は家にいました。その時、11歳でした。今は22歳です。原爆投下後10日すぎた頃に娘の歯茎が痛みだし、その後しばらくして声が出なくなりました。手術を受けましたが変わらなかったのです」。彼女の父親は沈黙していた。娘は泣きながら父親の胸に身を寄せた。

会場の静かに凍りついた雰囲気を破ったのは、顔と首に深い傷跡がある背の低い人だった。彼はシャツを脱ぐと体の右側に縦横に傷跡が刻まれた体が見えた。長崎の山口という人だった。「私は火傷し、死ぬ寸前になり、常に高熱が出ていました。自殺したいと思った時もあります。生きる希望がなかったのです」。彼は息が苦しくなり、話し続けるのが大変だった。マリー=クロード・ヴァイヨン・クーチュリエは涙を流していた。彼女がハンカチで目を拭くと、彼女の手に刻まれたナチス強制収容所の青い囚人番号が目立つ。山口は話を続けた。「死のうと決めたとき、こう思いました。私は証明するものは何か？ 誰に証明するのか？と。いや、私は生き残らなければいけない。他の人々の役に立つために生き残るべきだ、と考えたのです。人々に原爆禁止の闘いに呼びかけていくために生き残るべきだ、と。私は白血病です。ずっと寝ていないといけません。しかし、すべての力を尽くしてこの会議に参加したいと思ってベッドから立ち上がってここに来ました。皆さんは帰国してから我々の事実を伝えてください。世界に平和を築くために行動してください」。山口は座り、両手で頭を押さえ、テーブルに伏せた。会場は再び静寂に包まれた。

「私は広島の原爆一号と言われています」と左手で扇子を握った人が言った。「吉川といいます。広島出身です。6年間入院し、植皮手術を16回ほどしました。1951年4月2日に退院して、広島で被爆者支援グループを立ち上げました。が、私たちを被害者にしたアメリカ人は助けてくれません」。隣に立っていた人が小声で彼に何かを言うと、彼は一瞬話を止めて自制しようと微笑んだが、頑固に言い続けた。「アメリカ人は悪いのです。日本政府も私たちの状況を分かっているのにたいした援助をしません。政府は戦争に備えて予算を組んでいます。アメリカの強い圧力の下でそうしているのです。しかしそれを私たち国民はよく知っている。今こそ被害について声を上げる時期です」。吉川は一瞬話を止めて、海外代表たちに向けて言い続けた。「原爆病は不治の病ではない。原爆を製造できたならば原爆による病気を治す方法も見つかるでしょう。病気を治す薬を作って私たちに送ってくれるようお願いしたい」。そう言いながら彼は怒ったような顔つきになった。「25人が植皮手術をしてもらうために渡米したのを知っていますか？ アメリカ人は何千人の被害者の中から25人しか選べなかった。アメリカ人は植皮手術を広く宣伝しているが、手術がうまくいっ

ている場合は少ないことが明らかになった。日本で手術をするより悪い。なぜ、わずか25人だったのですか？！ 彼らは恥知らずにも世界中に宣伝している。自分の手で被害者にした大勢の中からわずかな人数だけを宣伝のために選んだと私たちは知っているのに。これは非人間的です」。吉川はしばらく沈黙した。静寂の中で彼の扇子の音だけが聞こえる。

会議主催者の配慮によって海外代表たちは長崎の寺院や観光スポットの蝶々さんの建物を見学し、雲仙という高い山の休養地にも一泊観光に出かけた。バスの窓から農村が見えた。海岸沿いに並ぶ作業員の集落の隣を通った。両側に高い木々、その下に食用キノコ栽培農場が見える。4時間ほど山道を走ると静かなホテルに着いた。一晩中、窓の外に雨音がした。朝に日が昇ると、山に囲まれた高い大空が広がっている。雲が足下に見える山の中、国立自然保護区域で観光をした。山麓にゴルフ場があり、山中に乗馬用の小道がある。山の空き地では馬の傍で日本人が手綱を握って立ち、乗馬を勧める。彼らが馬の世話をする場面は感動的だった。近くにいた一人の日本人は、馬の足が虻に咬まれ出血しているのに気づくと、あっという間に傷にくちびるを押しつけて血を吸い取ったのだ。

昼に雲仙市からバスで鉄道の駅へ向かい、列車で広島へ行き、その日は宮島の日本旅館に宿泊した。部屋にはベッドがなく、柔らかい床の上に軽い敷物と小さくて硬い枕がおいてあった。一人一人に着物が用意されていた。中国、チェコ、イタリア、ポーランド、ルーマニア、そしてロシア代表たちも全員着物を着て、舟の光が点滅し、星が映る夜の闇の川のほとりに夜遅くまで座っていた。翌朝は日本三景の一つとして有名な名所を見学した。神社の高い天井の下で昔の戦争物語を描いた絵がある。この神社で着物姿の少女たちが蓄音機から流れる音楽に合わせて踊っている。その歌詞は「宮島は素敵な場所です。ここへ遊びにきてください！」だという。恐ろしい仮面を被った背の高い人が蘭陵武王・高長恭の舞楽をしている。

その後、広島湾にそって街に向かった。海岸で所々刺網が海中に浮かぶ。竿と竿の間にテントをかぶせた小舟がすべる。住民は引き潮によって竿にたまった海藻を集めている。これら海藻はその後食用になる。アルコールの香ばしい匂いがする。「酒工場」だと案内人が言った。燃えるように暑い。バスの中で案内人がずっと何かを話し続けていたが誰も聞いていない。皆、夢中で窓の外を見ていたのだ。あの恐ろしい日に、泳いでいた何万人の子どもが死んだという広島の川が目の前に現れた。「平和大通り」と案内人は知らせた。爆心地の近くに来ると、正面に破壊された図書館の建物が見えた。建物に並んで高く生えた草、有刺鉄線、その上に色あせた木製の掲示板がある。私たちは死の実験を行ったこの場を沈黙して見つめて立っていた。川の向こうに新しい公園があった。そこに植えた棗椰子の木はあまり伸びていない、と聞いた。その後、広島原爆死没者慰霊碑へ行った。慰霊碑は特徴的だった。弓形をした粗石で全体をかぶせた墓石。私たちは日差しで熱くなった石の上に生花を置き、頭を下げた。そこから資料館へ静かに向かった。過去のすべてが大きな写真に描写されている。煙、火、火傷を負って生きている人も死んだ人も破片や灰の中にいる。ガラスの中に家財道具、子どもの靴、食器、時計などの展示物が並んでいる。

展示物で一番印象に残ったのは、8時15分で止まっている四角の時計だった。後日東京で「広島の子供たち」という、小学生の時に原爆のために家族を失い故郷を離れて教師になった女性の人生を描いた映画を見たのだが、その映画に1945年8月6日の朝の広島の様子がよく描かれている。時計が1分ずつ進む。男たちは工場へ仕事に行き、子どもたちは学

校で朝の体操をしている。店員はお店を開けている。人々は街を楽しげに自転車で走っている。しかし広島の上空を米国の爆撃機が飛び回っている。時計は8時15分になり、世界は恐ろしい霧に包まれる。

私たちは広島でわずかな時間を過ごし、市長の家で昼食を食べた後に中央通りを通って駅へ向かった。「アメリカ文化センターの建物です」と案内人の女性が左側の灰色の建物を指して言った。河川や運河に何百人の子どもが泳いでいる。広島は再び多くの子どもたちに恵まれている。子供たちは川岸から飛び降りて川に潜ると水が飛び、太陽の光で虹が見える。子どもたちをオンブするお母さんたちがいる。平和記念公園へ子供たちは走る。人生は続いている。

大阪の花

私たちは昼間に疲れ切って、夜にやっとベッドにたどり着くと倒れこんですぐ眠り込むようになった。高温多湿の気候にも不思議に慣れてきた。もう、箸を使ってご飯を食べることもできる。海外代表はどこへ行っても花で歓迎され、バラ色やブルー、鮮紅色、燃えるようなオレンジ色と、色とりどりの花を贈られた。東京や長崎、広島でもそうだし、大阪でもそうだった。長崎から海外代表が大阪に到着したのは蒸し暑い夜で、エアコンで涼しいホテルに宿泊させてもらえるのが嬉しかった。人口 400 万人の商工業都市は夜中まで賑わっている。

大阪の社会団体を代表する人たちが駅で私たちを迎えてくれた。朝、ホテルのロビーにある自動回転ドアの近くで見た場面は面白かった。長身で細身のアメリカ人と小柄で太った日本人が、頭を下げる競争でもするように、互いにお辞儀していた。アメリカ人が日本人にそんなに頭を下げるのは、まだ交渉がまとまっていないのだろう。「アメリカのビジネスマンは交渉がまとまった後は頭を下げないから、日本人は彼の耳に声が届くように椅子の上に立つことになるんですよ」と、友人の記者が吹聴していた。

会議以外の時間は自由だったので市内観光に出かけた。とても暑い日で、荷物が山積みの小型三輪や、荷物を高く積み上げた三輪の自転車が街を走り、いたる所にカラフルなポスターが貼ってあり、交差点では車のクラクションの轟音、排気管の音、ドライバーの叫び声に取り巻かれる。通りを掃除する小柄で皺深い婦人たちがびくびくしながら歩道に寄っている。屋根つきのショッピング・アーケードに行くと、卸売をしていた。「男性用靴下なら男性用靴下だけ、女性用下着なら女性用下着だけを卸しています」と和田が言った。店には商品が山のように積重なっている。他の多くの日本の都市と同様、大阪の街は戦時中にアメリカの焼夷弾でひどく焼かれた。が、破壊や火災の痕跡はもう目立たない。戦争中に破壊された主要なショッピング街には銀行や商社の建物が立ち並ぶ。

招かれた夕食の席で会った一人の弁護士に「お忙しいですか？」と聞くと、「忙しすぎです」との返事。顧客は大勢いるが、労働組合の弁護士なので収入は多くない。労働者を騙して搾取する工場所有者の例は数限りなくあり、彼はそんな労働訴訟に取り組んでいる。その日の夕方、海外代表たちは大阪の労働者集会に参加した。会場は大きなプールで、私たちを乗せたバスが到着した頃には日が暮れて、あたりは暗くなってきていた。私たちは玄関の所で大勢の人に迎えられ、会場では何千人もの人が席から立ち上がって歓迎してくれた。白い鳩を描いた多様な色の旗が見える。そして、ここでもたくさんの花。海外代表が着席した長

い机は花で満ちあふれていた。私たちのすぐ前にプールの上を横切って木材の舞台が作られていた。

その舞台で広島の悲劇に捧げる沖縄女性の舞踊やチャイコフスキーのバレエ組曲「くるみ割り人形」が披露された。そんな最中にスタジアム全体で笑い声があがった。驚いて「どうしましたか？」と聞くと、「5歳の女の子が迷子だという知らせです。親御さんにプール事務室に来るように知らせているのです」と通訳が言うのでほっとした。会議主催者の一人である安井教授に「何千人が会議に参加しましたか？」と尋ねると、約2万5千人位とのこと。会議が終わると何千人もの人々に取り巻かれて、私たちはまた花を贈られた。数十人、数百人の人が握手をしようと手を伸ばしてくれた。私たちがバスに乗りこんでからもバスの窓へ手を伸ばす人々がいて、バスが出るので「バスにはねられますよ、気をつけてください！」と叫んだが、言葉は通じない。日本人たちはロシア語で何度も「同志！」と呼びかけてくれた。興奮する雰囲気の中でホテルに戻り、「日本人はロシア人が嫌いだとよく言われるけれど、それは違うのですね」と誰かが考え込んだ様子で言った。

翌日、右翼の新聞はこの集会が失敗して会場に4000人しか来なかったと報道していた。私たちの親友で同行者の和田が新聞を見せて、毎度のように嘘の記事を出している、と言う。

古都訪問

会議主催者たちは海外代表たちを思いやり、古都を観光させようと決めた。猛暑だったが、もう慣れてきていた。通過した大阪の中心部はよく整備されており、小さな家や食料品店や織物商が並ぶ道筋も見た。小高い丘にはたいてい仏寺がある。家の前で多彩なリボンや紙の花がやさしい風にはためいている。清潔な服装の人たちが寺院へ向かって歩いている。彼らの表情は厳粛だった。今週は仏教行事の一つとして死者の魂が生きている人に会いに来るのを祝うお祭り（お盆）が行われているのだとわかった。生きている人々の所に1週間過ごし、その後に魂をあの世に送る、という。

古都奈良まではわずか50キロ。バスは埃の多い道路を疾走し、両側に隙間なく並ぶ家が見えた。やがて町を離れ、村落が現れたが畑は見当たらなかった。奈良の近くに一か所だけブドウ畑の緑豊な斜面が見えた。和田が「今ここにブドウが見えるが戦争時にブドウの木を掘り出してその代わりにここで小麦の種を蒔いていたんですよ。我々にはパンが不足していたから」と話してくれた。

奈良は餌付けされている鹿が遊ぶ公園で有名だ。大きくて太い木々の下でラッパの音が響く。突然あちこちから鹿が柵をさっと飛び越えてくる。鹿は私たちへ勇ましく近づいてきて絹のような柔らかい顔を手に突っ込む。どうしたらいいのかわからないでいたら仲間が助けに来てくれた。近くの森林の縁では、ほっそりした日本人女性が立ってワッフルに似た焼き菓子を売っていた。鹿は雌より雄のほうが積極的に突いてくる。最初私たちは不安で雄鹿の角を見張っていたが、すぐに餌のやり方を覚えた。その後、奈良が日本の都だった時代に建設された東大寺へ行った。本堂（金堂）に巨大な大仏が鎮座している。約1200年前に聖武天皇が仏教の楽園を地上で建設すべく建立したものだ。壮大な建造物は二度の火災で焼損したが、世界最大の青銅製仏像の一つである大仏は修理されたという。私たちは細くて神秘的な目を持つ巨大な仏像彫刻の傍に立って見上げた。大仏の足元に同じく青銅で作られた蓮の花がある。東洋では蓮が平和の象徴と考えられている。昔も今も、仏陀は平和の創始者でそ

れを見守っていると語られている。お寺の屋根の下では鳩がクークー鳴き、出口の傍では職人たちが働き、仏像の土産物を 1000 円で買うよう勧めている。私たちは顔を見合わせた。誰も人生の最後まで仏教徒になりそうでないが、この土産物の仏像を日本の古都を訪れた思い出として持ち帰るのは嬉しいことだった。

お寺の近くに大きな池があり、その傍にイザベル・ブルームとモニカ・フェルトンが立っていた。二人は女性の店員から買った細長い白い棒パンの一片を池へ物思わしげに投げながら透明な水の中を見ていた。水中では大きな金魚と亀が互いに争い、てんやわんやの騒ぎが演じられていた。

古都の全部が昔風というわけではなかった。名所見学の後、奈良ホテルで昼食を食べようと静かな街路を通った途中、バスの窓の正面に 2 階建て木造住宅が見え、その向こうに針金を巻きつけた柵が続いているのが見えた。「何ですか？」と聞くと、通訳者が「ここにアメリカ人が住んでいます。米軍基地の一つが奈良にあるのです。米軍は奈良を兵士と将校の休憩所にする予定です」と答えた。「日本の古都を？」「ここは静かで気候も他より良い土地です。彼らにはそれしか興味がない。どうして彼らが日本の聖地を傷つけないといけないのでしょう？ でも奈良の住民はこの暴力に抵抗して闘っています」。

バスで午後 4 時に京都のホテルに着くと、花を持った日本の生徒たちが海外代表を迎えてくれた。和田が近づいてきて、「このバスで大阪に戻るようお勧めします。電車だと夜遅くなります。明日は高知に朝早く出発しますから」と言った。私たちは日本の夜の生活をもう一度見たいとバスで帰ることに決めた。まるで、走りながら本を読んでいるような感じだった。農民は菜園でキャベツを数え、川沿いで子供たちが魚釣りをしている。夕焼けのバラ色の反射が水面に光る。建物の隣にある歩道で少女たちがボール遊びをしている。自宅の外の低い腰掛に座って新聞を読む男の人がいる。労働を終えたこの人は疲れていても世間の出来事が知りたいので 50 円を払って新聞を買い、全世界を手にとる。今日最後の荷物を運ぼうと自転車のペダルを一生懸命に踏んでいる人がいる。左手でハンドルを持ち、右手でポケットから硬貨を出して指で数え、隣を車が走り信号が点滅しているのに気にせずに、硬貨を数えながら走っている。今日の収入はどれくらいかな、と。

地平線上の台風

蒸し暑い中を一日中旅した後入浴し、汗と埃にまみれた頭に石鹸をつけて汚れと疲れを洗い流すのは、やはり最高の快楽だ。その時、ドアをノックする小さい音がした。「どうぞお入り下さい」。和田がソ連代表団の秘書セルゲイ・ハーリンと一緒に入ってきた。「お休みになるところですね」「はい」。2 人は顔を見合わせた。ハーリンが新聞を見せて、「ここに書いてあるのですが、明日飛行予定の四国方面に大きな台風が来るそうです」。「飛行機に乗るのは 1 時間だけでしょう？」「全便欠航です。9 時半の電車に乗らないと間に合いません」。それで急遽出発することになった。

スーツケースは大阪に預けていくことにした。東京に戻る途中にまた大阪に寄ることになっていたからだ。イザベル・ブルームは荷物をまとめるのに時間がかかってなかなか部屋から出てこない。海外代表の護衛としていつも同行してくれている親切な山本も姿が見えない。彼は出発が早くなったのを知らないで、夜の自由時間に散髪に出かけていた。もう午後 9 時 15 分だ。「駅まで 5 分で着きますよ」と和田は言った。そこへ散髪でさっぱりし香水の

匂いがする山本が戻ってきて、スーツケースを取りに疾風のようにホテルの部屋へ駆け上がった。9時20分頃にイザベル・ブルームは通訳者と一緒に降りてきた。玄関にいたタクシーは一台だけなので海外代表7人がその小さい車に乗り込み、9時25分に駅に着いて、車から飛び降りた。「スーツケースはどこですか？」。イザベル・ブルームの声だった。通訳者が彼女のスーツケースをホテルに忘れたのだ。とにかく先に高知に行くことにして私たちはプラットフォームへ急いだが、和田がどのホームかを忘れていたので人に聞きながら走り続け、汽笛の音と同時に列車に飛び乗った。後ろで空気圧作動式のドアが閉まったのでびくっとする。列車はほぼ満員だが、離れた席が幾つか空いていた。二等車は座席が硬くて座り心地が悪く、ほの暗い。なるべく快適に過ごそうと、隣の窓側席の人は空気枕を取り出して壁に当てて目を閉じた。列車はしばしば停まり、中はますます人が増え、後から乗った客は座席の間の通路に座ってポケットから出した本を読んでいた。和田が列車を降り、小さい瓶に入れた暖かいコーヒーを持ってきてくれた。居眠りしても頭をもたれるところがない。窓の向こうは真っ暗になり、夜霧の中に黄色の丸い明かりが見える。列車が揺れると眠っている乗客も揺れる。そんな5時間が過ぎて、深夜3時に瀬戸内海沿岸の宇野駅に着いた。ここで船に乗り換える。乗客者はトンネルへ急いだ。鞄や籠や包みなどを持った人の群ばかりが見える。小さい子を連れた女性が多い。その一人は片手に幾つも鞄を持ち、片手で眠たがる子を抱き、歩ける子も連れていた。他の人に追い越されたり押しのけられたりして、女性は緊張した表情で振り返って子どもに何か言っている。ハーリンがその子を抱えてあげると女性はほっとした様子だった。

汽船の中も狭い。左舷の近くに風下側の場所をとる。船の外板に波が打ち寄せて、風がうなり、蒸し暑さが少し和らぎ、涼しくなった。出航すると乗客たちは居眠りを始めた。反対側に座っていた白髪まじりの男性が、「ロシア人ですか？」と話しかけてきた。「その通りです。貴方はどなたですか？」と聞くと、笑みを浮かべて「木材業者です。商売人ですよ」。「商売相手は？」「南米です。ニューヨークにも木材を売っているんです」「日本の木材を売るのですか？」「いいえ、木材はフィリピンのマニラで買います」。彼は大阪の住所を書いた名刺をくれて、「そこに私の工場があって木材の再加工をしているのです」。「ロシアとの取り引きは？」「是非したいです。今まで外国と貿易関係がなかったのが悩みですね。近所の国同士なのに」。「まもなく関係が良くなると思いますよ」。「早くそうなってほしいですね。どこに提案を出したらいいか教えてください」。

その次に乗った列車は閉まらない窓もあり、列車内に隙間風が吹いた。列車が発車すると、私たちは隣の人を見る余裕もなく眠った。

ドクター坂本からの桃

うたた寝状態で何時間か過ぎ、小さい駅に着いた時、誰かが私たちのことを訪ねてきたので目が覚めた。「皆さんは最前列の座席にいらっしゃいます」と答える車掌のしわがれ声が聞こえた。黒いスーツにネクタイ姿の人が列車に入ってきた。「坂本先生！」と和田が声をあげ、私たちに「国会議員のドクター坂本です」と紹介した。目覚めたばかりの赤い目をした私たちは、私たちに会うためにこの駅まで来てくれた坂本と握手を交わした。「台風が来て残念でした」と彼は笑顔で言った。

列車が発車すると、雨や風の幕を通り抜けて灰色の薄明かりが窓にさし込んできた。車窓

から、風で木が折れて枝が撒き散らされている様子や黒い山々が聳えている景色が見えた。ある駅で列車が長く停車した間、それまでソ連代表団の医師ウラジミール・エマルコフと結核治療方法を話し合っていた坂本が、列車を降り、桃が沢山入った小箱を持って戻ってきた。「やむをえません、皆さんをがっかりさせてしまうことになりました。列車が峡谷の出口で停まりました。ここは阿波川口駅です。看板がそこに見えます。台風で川の上を渡る橋から列車が吹き飛ばされかねないので注意が必要です。ということで、しばらくここでこの桃を食べて待ちましょう。・・・どんな時も桃は美味しいです。皆さんは眠いですか？ 桃を食べたら目が覚めますよ。どうぞ食べてください」。

桃は本当に美味しかった。日本はサクランボが有名だと思っていたが、今は日本で最も美味しい果物は桃だと言っておきたい。私たちの誰かが隣の人に「日本の桃は本当に素晴らしい」と言うと、その人は「その通りです。私たち日本人は桃のピンク色の優しい花が大好きなのですよ。」私たちは桃を 1 個、もう 1 個、と食べたが、列車はまだ動かない。坂本は車内の乗客全員に桃をご馳走し、「お世話になりました」と一人一人に挨拶をした。坂本は私がいつも手を耳に当てている（隙間風のせいで耳が痛かったので）のに気づいて、「もう 1 個食べて下さい。それでも痛かったら高知に着いたら私が薬を届けましょう。2 錠も飲めばすぐ治りますよ」と言ってくれた。

列車に座り続けて疲れたので木造駅舎の庇下のホームに出てみると、下の方で、谷間を蛇行して流れる川が激しくうなっている。垂れ込めた雨雲が岩壁と一体になって見える。列車へ戻ったが、坂本は落ち着かず、またどこかへ行き、やがて明るい表情で戻ってきて、「3 時間ほど到着が遅れていますが、開始を待ってもらえます。長崎大会報告集会は 12 時開始予定ですが、その時間を変更してもらえたから大丈夫です」と言った。列車が俄に動きだし、駅を一つ二つと通り過ぎ、橋を渡った。トンネルが現れては消えていく。桃を全部食べ終わり、ドクター坂本も私たちも居眠りをした。

車内に太陽の暖かい光が射し込んできて目を覚ますと、もう 12 時だった。窓から、折れた板や丸太の断片が川の渦に巻き込まれながら石に当たって跳ね上がる様子が見える。農民たちがレインコートを着て大きい帽子をかぶり、網のついた長い棒を持って川岸に立ち、急流の中から魚をとっていた。田んぼは浸水し、稲がなぎ倒されていた。その中で腰をかがめて手を水の中につけて探る農民の姿が見えた。時々立ち上がっては雨や風で倒された稲を出してきて見つめていた。小さい駅の一つで看板を手に持った人々が私たちを迎えた。「私たちを歓迎しています。外に出ましょう」と坂本が言った。私たちがホームに出ると、尾羽が何メートルもありそうなほど長いオス鶏を手にしたお年寄りが、「こんにちは、ソ連の皆様！」と、心のこもった挨拶をしてくれた。「なぜ、この鶏を持ってこられたのですか」と聞くと、坂本はこの質問を待っていたように、「皆さんが面白がると思ったからです」と言った。列車の車輪がゆっくりとカタカタなっていた。

高知に到着！　温かい歓迎と花束

高知のホームには駅長以外に誰もいなかった。「ひとつお願いがあります。私たちは顔を洗って 1 時間ほど寝たいです」と言うと、「はい、はい」と言いながら坂本は謎めいた微笑を浮かべた。駅の小さな待合室を通りぬけて反対側の外へ出た私たちは驚いて立ちすくんだ。正面にプラカードを持った数百人が立っていた。突然、よく知っているメロディが聞こ

えてきた。言葉は分からないが、これはソ連の国歌だ！それは日本語で歌われていた。

太陽が積雲の間に出たり隠れたりし、陽光が建物を照らしている。市街を車で走る途中、200メートル先に走る先導車がマイクで市民に対してソ連代表者たちがやってきたこと、夕方プール施設で集会があることを宣伝していた。

20分後に劇場の建物に到着すると、そこに1500人ぐらいの人々が集まっていた。原水爆禁止団体の議長で76歳になる大石が演壇に上がると、集会参加者たちが鳩を飛ばした。全員起立して広島長崎原爆犠牲者を追悼するための黙祷が行われた。静寂の中、聞こえるのは劇場の屋根の下で鳩の声だけだ。集会は熱く盛り上がり、観客席から議長に次々と質問が出た。長崎会議の決定は全会一致で可決した。会議の後に市長がやってきて、「ソ連代表団歓迎会への出席をお願いしたいです。近くの学校施設内で行われます」と言う。私たちがその学校へ行くと、市長が、ソ連で捕虜とされていた元日本兵たちが来ていてソ連代表団と会いたがっているという。「おお、私たちもお会いするのは嬉しいです」と言って待っていると、力の強そうな、肩幅が広く日焼けした何人かの男性が部屋に入ってきて、「こんにちは！」とほぼ一斉に完璧なロシア語で挨拶し、手を差し出した。「来日して頂いて良かったです。皆さんと握手して、戦時にロシア人が日本人捕虜に親切してくれたことにお礼を伝えたいと思いました」と笑顔を絶やさない一人の人が言い、「私はタシケントの近くにいました」と続けた。「私はチタの近くにいました」ともうひとりの人は言い、「私の場合はハバロフスクの近くでした」と三番目の人は言った。「親切してくれて感謝しています。食料不足の中でも私たち捕虜に食事を与え、治療もしてくれました。この心ばかりのお土産を受け取ってください。自分たちで作ったものです」と1番目の人が段ボールを渡してくれた。その中には、マトリョーシカ人形と似た明るい色の人形が入っていた。「また、ロシアへ行きたいです」と背の高い人が言った。「ぜひ来て下さい。その時は（捕虜ではなく）お客さんとして来て下さいね」と私たちは言った。「それは嬉しいことです。私たちは習ったロシア語を忘れかけています」。「今度は囚人でなく、もっと快適な環境でロシア語学習したいです」と言い、彼らは笑った。「もちろん、そのために私たちも協力しますとも」と私たちは答えた。彼らは帰りかけたが、一人が戻って来て「皆さん、このお土産を少佐ペトロフに渡して頂けないでしょうか？」と、彼の所在を尋ねた。

歓迎会では全員長いテーブルに着席した後、学校の広いホールに音楽が響いた。「カチューシャ」だ。日本滞在中に何度もこの曲を聴いていたので、もう驚かなかった。市長が「平和のため、ソ連と日本国民の友好関係のため！」と乾杯の音頭をとり、小さいグラスで梅の味がする濃赤色の日本ワインを飲んだ。白髪の女性が立ち上がり、「今日は非常に嬉しいです。70歳で初めてソ連の方々とお会いしています。残念ながらいつも見かけるのはアメリカ人で、ソ連の人に会うのは初めてです」と言った。「私たちは異なる生活様式や体制の中で生きていますが、頻繁に交流すると良いと思います。私は農民なのでソ連の農民はどのように生業を行っているのかを知りたいです」と小柄で細身の人が言った。元捕虜の人たちが再び私たちを取り巻いて、その一人が「私はソ連にいる時、ミチューリン農法を学びましたよ。1957年の夏にモスクワで開催される世界青年学生祭典の参加代表団にミチューリン派の人を入れるかを教えてくれませんか？」と尋ねにきた。

夕方には高知市民5000人の集会があり、大阪同様、プールを横切って木造の演壇を作っていた。演壇の上に日本、ソ連、ベルギーの国旗がはためき、オーケストラがソ連とベルギ

一の国歌を演奏した。その後、夕方に高知入りしたイザベル・ブルームたちの演説が行われた。日本の鳴子踊りを私たちは楽しく満喫した。青い服を着た 200 人の子どもや何人かの大人がこの踊りに参加した。全員手に赤と青の鳴子を持ち、踊りの内容はシンプルだ。子どもが稲収穫の時に鳴子を使って雀を脅し追う。3 人ずつ並んだ子どもがプールを一周しながら同じ動きをして、リズムに合わせて鳴子を鳴らす。この踊りは感動的だった。一番小さい子たちもリズムに合わせてちゃんと動きをそろえていた。踊りは 30 分以内で早く終わったのが悔しく感じるほどだった。

四国での一日が終わると、坂本が家庭的な小さいホテルに車で送ってくれた。「お昼に休憩させなかったと怒っていませんよね」と彼が聞くので、わけが分からず驚いたが、後から「そうだ、列車を降りて 1 時間休みたいと思っていたのだった」と思い出した。

台風は通り過ぎた

朝早く眩しい陽光が窓から差し込み、目が覚めた。高知にいる。思い出深い昨日のことをすぐにふりかえった。日本に仲間がこんなにたくさんいたのだなあ。長い間両国は疎遠になり、日本の保守系新聞はソ連について根も葉もないことも言いふらしてきた。でも日本には、ロシアに憧憬を抱く人々もいる。元捕虜たちも。正直に言うと、私たちは日本で期待できるのは丁寧な挨拶程度なのではないか、と思っていた。すると現実は違っていた。蒔かれていた平和と信頼の種はこの人々の心に深く根づいている。捕虜の帰国船がソ連から日本に到着した時には、保守系新聞が扇情的な記事を狙って特別な報道陣を送り出したという。が、次々と元捕虜が帰国してもそんな話はなかった。帰国者はソ連の優しい人々を思い出していた。思いやりがあったという少佐ペトロフのことが思い出される。この四国の島にペトロフ少佐の友だちがいるとは感動的だ。

ホテルの緑の中庭は私たちを見送りにきた人たちの車でいっぱいだった。「よく眠れましたか？」と坂本が聞いた。車の隊列が空港に向かう。台風が去り風もやみ、空は雲一つなく晴れ渡っている。以前と同様、私たちの前を赤と緑の旗をはためかせたオープンカーが走り、「我々はソ連とベルギーからの訪問者をお見送りするところです。我々は訪問者をお見送りしています」と仲間がマイクで紹介している。小さい店から出てきた人々が私たちに手を振った。職人たちは作業台の後ろから背を伸ばし、自転車に乗っている人も手をハンドルから離して手を振った。路面電車の乗客は窓から私たちの方を見て微笑んでいる。街には貨物車や自転車が見え、小工場で金属のふれあう音が聞こえる。農村地帯に入ると、台風通過の跡が明らかだった。農民が腰をかがめて水の中を探り、稲を取っている。「私たちは訪問者をお見送りしています」という声を聞いて、彼らは腰を伸ばし、大きな帽子の下から皺だらけの笑顔で私たちを見て、畑仕事で疲れた手を振ってくれた。

高知の空港は簡素で、小さい木造建物と平坦な飛行場があるだけだった。飛行場で私たちを青色のパナマ帽をかぶった少年少女が迎えてくれた。空港から遠くない耕地でお米を収穫している農家があった。私たちは近づいて、彼らと話をした。この家族は近くに住んでいて、家族みんなで耕作をしている。農家のお母さんらしい高齢の婦人が、藁を入れた籠を車の傍まで引きずって移動させている。農民たちや少年少女たちに別れの挨拶をして、私たちは青い山々や黄緑色の耕地が広がる四国を飛び立ち、大阪に向かった。

大きな米国旗がはためくビルと隣接する大阪空港の小さな建物で、東京行きの飛行機を何

時間も待った。乗客は待合室のテレビで昨夜の台風被害を伝えるニュースを見ていた。新聞によれば、22人が死亡して、40人が行方不明になり、137人が負傷したという。台風で3,000以上の家が壊れ、500ぐらいの船が転覆したという。九州や四国にも大きな被害があり、九州の近くではスウェーデンの石油タンカーが転覆し、鹿児島港で浚渫船が沈没、小豆島の周辺でも漁船が沈没したそうだ。

まもなく東京に向けて飛行機は離陸した。過去2日間を振り返りながら無言で座席に座る。40分後、山本が私に近づいてきて窓の外へ指差しながら「富士山、富士山」と教えてくれた。最初意味が分からなかったが、窓の外を見ると黒い頂上が切り取られた山が見えた。「富士山ですか」と聞いたら山本が頷いた。

ジャナキ・クリシュナン
ーインドとロシアの友好運動に捧げた人生

藤目ゆき

インドのチェンナイ在住のジャナキ・クリシュナンさんは2016年11月29日、85歳の誕生日を迎えた。ジャナキさんはチェンナイのロシア科学文化センター（RCSC）の創設者の一人であり、1970年からインド・ロシア女性協会（IRWA）の代表を務めてきた。彼女は人生をインド・ロシアの友好と文化交流に捧げた尊敬すべき女性として知られている。2003年にはモスクワ・プーシキン協会の「ベスト・ティーチャー賞」を受賞した。さらに2014年6月には、ロシア語教育のみならずインドとソビエト／ロシア両国に貢献した業績が高く評価され、ヴォルドグラード市から表彰を受けた。RCSCが催した2016年3月の国際女性デーの集いでは、女性が自らの人生、職業、目標を選択する権利を称揚するイベントが行われ、ジャナキさんはインドにおける女性の権利の保護への貢献によって特別賞を受賞した。

左からパンディオンさん、筆者、ジャナキさん、マンジューラさん、シュリニヴァサンさん。パンディオンさんの家で 2012 年 6 月撮影。

私は「冷戦時代の国際女性運動」の研究に必要な調査のために2012年6月、2013年9月、2015年2月にチェンナイを訪ねた。その3回の訪問の度に、ジャナキさんに全面的にお世話になった。80代に達する高齢ながら、自由闊達な精神の持ち主で、海外もふくめ

て各地に出かけて活発に運動を続けているジャナキさんにはいつも励まされる思いがした。そのジャナキさんが 2017 年 2 月にいよいよインド・ロシア女性協会の代表を勇退するという。隠居を決めたというよりも、インド・ロシア女性協会の新たな発展を期して若い世代を育てたいという考えのようで、長年にわたって築いたネットワークを駆使して今もレイジング・ファンドや集いの組織化にリーダーシップを発揮している。

モニカ・フェルトンを知るキイ・パーソン

インドを訪ねた筆者の主な関心事は、1950 年代前半に国際民主女性連盟（WIDF）や国際平和評議会（WPC）などのリーダーとして国際舞台で活動していたモニカ・フェルトンがどうして 1956 年以後というものインドに移り住み、その後の約 14 年間にインドでどのような活動をしていたのか、ということにあった。ジャナキさんはおつれあいの P.K.クリシュナン氏（1922 年 3 月 21 日～2001 年 9 月 6 日）と共にモニカがチェンナイで望む仕事ができるように支え、1970 年に彼女が他界するまで家族ぐるみで親しくつきあった人物であり、インド時代のモニカを知るための最善のキイ・パーソンであった。

2012 年の春、『マドラス・ミュージング』にジャナキさんが寄せたモニカ・フェルトンを懐かしむ記事を見つけてコンタクトを試みた私に、ジャナキさんがすぐに返信を下さったときの感激は忘れられない。私はそれまでインドへ行ったことがなく、どのような旅支度が必要なのかも見当がつかなかった。ビザを取るだけで右往左往したり気温が 40 度くらいだと聞いてびっくりしているような実情だったのだが、当時大阪大学人間科学研究科の大学院生でインド事情に詳しい渡辺真由子さんと大森恵実さんに助けていただいた。また大森さんのつてでチェンナイ在住のシュリニヴァサンさんとマンジューラさんがアシスタントを引き受けてくださった。ジャナキさんは RCSC に私を案内してご自身の活動経験とモニカの思い出を語り聞かせ、さらに自宅で催された ISCUF の会合にも招き、また、生前のモニカをよく知るインド共産党タミール・ナドゥ州委員長（当時）の D.パンディアン氏の家へも案内してくださった。

> モニカ・フェルトンは「フォーリナー（外国人）」ではあったけれども「ストレンジャー（ガイジン）」ではありませんでした。彼女には人間性への愛があふれていて、マザー・テレサとかナイチンゲールに並ぶような人でした。私たちを元気づけてくれました。自分の人生を社会への奉仕に捧げた人です。私たちは彼女を賞賛します。
>
> モニカ・フェルトンには会議や集会で会いました。会合で彼女が話しをするときは、決して聞きそこねないようにしましたよ。彼女の姿を見れば元気が出たのです。モニカ・フェルトンに一度会えば、忘れられません。彼女は私たちの記憶に刻み込まれました。彼女は皆と親しくなりました。当時は多くの同志がモニカ・フェルトンを知っていましたよ。最高指導者たちは皆、彼女を賞賛していました。
>
> （パンディアン氏、2012 年 6 月 21 日談）

その後の 2014 年、2015 年の訪問の際にも、私はジャナキさんの紹介で様々な人に会い、また色々な場所を訪れることができた。その間にモニカ・フェルトンが可愛がっていたというクリシュナン家の三兄弟、エッジさん・スリラムさん・ラビさんにお会いし、思い出話を聞かせて頂いたのも嬉しいことだった。2014 年 9 月の調査では当時バンガロール留学中でタミル語が話せる渡辺真由子さんにずいぶんお世話になったのだが、二人でエッジさんの家を訪ね、エッジさんの手料理とモニカ・フェルトンが好きだったというインディアン・ラム酒でもてなしていただいたことが懐かしい。2015 年 2 月の旅ではジャナキさんの家に宿泊し、お話を聴かせていただいたばかりか、チェンナイ市内の各地とチェンナイから 70 キロほど南にあるマハバリープラムのドライブに連れて行っていただいた。ここは石窟寺院や石彫寺院、といったインド中世建築発祥の地のひとつで、1985 年に世界文化遺産に登録されている。今では観光スポットだが、1960 年代には人気もなく静かな場所で、モニカもクリシュナン一家といっしょにピクニックを楽しんだそうだ。

モニカ・フェルトンと家族ぐるみの友人になったクリシュナン一家。前列左から PK の母パッタマル、PK、ジャナキ。後列左からラビ、エッジ、スリラム。モニカはよくエドワード・エリオット・ロードにあったクリシュナン家にやって来て、いっしょに食事をしたり、いっしょに出かけたりしていた。モニカと PK は政治談義に花を咲かせ、お互い譲らず言い争うこともあった。ジャナキやパッタマルとはくつろいでガールズ・トークも楽しんだ。パッタマルは英会話はできなかったが、片言や身振りで気持ちは伝わり、お互いに会うのが好きだった。子どもたちはモニカに西欧風の食事マナーやディケンズのようなイギリス文学を教えてもらったことも覚えている。

このようなジャナキさんのご協力によって、私は所期の目標以上にゆたかな調査結果を得ることができた。その成果の一端は、「モニカ・フェルトンの初期原水爆禁止運動への貢献」と題して『アジア現代女性史』第 9 号（2014 年度）に報告している。ジャナキさんにお教えいただいた、モニカ・フェルトンとつながりがあったドーラ・スカーレットのことや、モニカが 1960 年に取り組んだ女子教育事業家シスター・スバラクシュミの伝記の執筆などに関しても、遠からず調査成果を発表したいと考えている。

世界平和運動の一部だったインド・ソビエト友好運動

ジャナキさんとの交流が深まるにつれ、モニカ・フェルトン研究という当面の調査の目的を超えて、私はこの魅力的なインド人女性のライフ・ストーリーにしだいに心を惹かれていった。ジャナキさんの家にいた時、これまでの自分の歩みを本にまとめるつもりだとおっしゃったので心待ちにしていたところ、その半年後、『私のファミリー・ツリーの種・根・花(Seed, Roots and Flowers of My Family Tree)』ができあがった。子どもや孫たちに家族の歴史を残したいということで、表題の通りジャナキさんと PK の家族の歩みがたくさんの写真とともに記録されている。そこにはお会いした時にお話を聞きながらも十分理解できなかったことや、全く初めて知る話がたくさん出てくる。この本を参照しながら、ここに彼女の人生の軌跡をたどってみよう。

ジャナキさんは 1930 年 11 月 29 日、チェンナイより 300 数十キロ南のティルチで生まれた。父親は英領印度軍会計部に勤め、上海で働いたこともあり、開明的な人だったという。娘に教育を与えることに積極的で、ジャナキさんは早くから英語の本を与えられ、マドラスの英国系の名門中学グッドシェパード・コベントリに通った。13 歳のとき、数々の名誉ある賞を受賞した著名な医師だった叔父 T.S.タリマルティが、ジャナキさんにマドラス医大 3 年生であった PK クリシュナン氏との縁談を持ってきた。PK は、タリマルティ教授のお気に入りの優秀な学生だった。ジャナキさんは勉強をやめたくないと言い張って、勉強を続けることを条件として PK と 1944 年 10 月 29 日、13 歳 11 か月の時に結婚した。当時の法律では 14 才未満の少女の結婚を認めていなかったので、父親は軍会計部の職を失うわけにゆかないと、周囲に彼女の年齢を誤魔化したという。

ジャナキさんは希望通り勉強を続け、PK とともにマドラス学生会 MSO（Madras student organization）やインド・ソビエト友の会 FSU（Friends of Soviet Union）の運動にも参加した。1941 年 6 月のナチス・ドイツによるソビエト侵攻の直後、ソビエトを支持するインドの知識人たちが設立した組織である。ノーベル文学賞詩人タゴールの支持を得て、多数の著名な学者、作家、政治家、芸術家、弁護士たちが参加し、講演や写真展、映画上映会、出版物などを通してインドとソビエトの友好を発展させる取り組みを行っていた。資料 I は、1941 年 7 月の FSU の声明文である。ジャナキさんの生涯の仕事となったインド・ロシアの友好運動はそこから始まっている。

第二次世界大戦が終わりインドが独立を達成した後、FSU の活動はしばらく弱まっていたが、1950 年代の初め、FSU を継承してインド・ソビエト文化協会（ISCUS）が結成された。これがソ連崩壊後の 1993 年にインド文化協力友好協会（ISCUF）と改称して、今日に至っている。 PK はマドラス医大卒業後、数か月医学研究所の研究員として勤務した

後、マドラス総合病院で勤めるようになり、クリシュナン夫妻には1948年に長男エッジ、50年にスリラム、そして52年にラビが生まれていた。PKはISCUSの副会長になり、ISCUSの医療部門の責任者をつとめた。ジャナキさんもまたISCUSの活動に参加した。3人の子どもを育てながら、PKの患者たちがいる看護施設の食事の世話もしていたというから、親業と家業と活動の一人三役をこなしていたということだ。

ISCUSの中心は文化事業であったが、全インド平和委員会（AIPC）と連携し、世界平和評議会（WPC）がリードする世界平和運動の一翼を担っていた。WPC副会長だったモニカ・フェルトンがAIPCの集会の機会にインドへ来て、マドラスに住むラジャゴパラチャリにインタビューをしたいと希望した時、AIPCからクリシュナン夫妻にモニカの受け入れを依頼したのは、そんな平和運動のネットワークがあったからだった。1950年代にはインド中国友好協会も活動しており、クリシュナン夫妻はそれにも参加していた。マドラス州が周恩来たちの訪問団を招待した際には盛大な歓迎の集いを催したという。が、1962年の中国・インド紛争以降、両国の友好運動は難しくなった。インド中国友好協会もISCUS・AIPC同様、インド共産党の党員が指導的な役割を果たしていたが、中国との関係悪化・中ソ対立を背景にしてインド共産党自体が三分裂する。クリシュナン夫妻はそんな状況の中でソ連派の潮流になるインド共産党とISCUSに身を置き、ソビエト・ロシア友好運動を続けていった。

ジャナキさんの自宅で催されたISCUFの集い。2012年6月撮影。

ライフワークになったインド・ソビエト／ロシア友好運動

1960年代にはソビエトから多数の訪問者たちを迎えた。訪問者たちとの交流が深まるにつれて、ジャナキさんは本格的にロシア語を勉強したいと思うようになり、全インド・ロシア語協会（AIIRL）で勉強を始める。PKはそんなジャナキさんを喜んで応援した。彼は自分も1966年にソビエト医療訪問団に参加するなどインド・ソビエト友好運動への熱意は変わらなかったが、医師としての仕事も忙しかった。彼は貧しい人々からお金をとらない、診療が丁寧で診断が正確な名医として評判が高かった。ソビエト、イギリス、ドイツなどの大使館の顧問もつとめていたという。ジャナキさんは60年代末までにロシア語

教師の資格を得て、自分が教えるようになった。AIIRL の会長カルパーナ・ジョシがジャナキさんにとって「ロール・モデル」だったのだという。カルパーナは若くしてインド独立のために武装闘争に身を投じ、有名な 1930 年のチッタゴン兵器庫事件の被告の 1 人として投獄された運動家で、インド独立後に共産党に入り、その指導者だったジョシと結婚した。AIILP で学び始めたジャナキさんをカルパーナは暖かく励ましてくれたという。

1975 年に国際女性年の取り組みとして WIDF 会長のフレダ・ブラウン（写真 中央）をインドに迎える。Janaki Krishnan, Seeds, Roots, and Flowers of My Family Tree, p.133 より。

国際女性年の 1975 年、ジャナキさんはインド女性代表団の一員として初めてソビエトを訪問した。長男エッジの結婚式に間に合うように帰国できるはずだったのに、インディラ・ガンジーによる非常事態宣言で国境が閉ざされてしまい、とうとう式に出席できなかった。インドでは家同士のアレンジド・マリッジが普通であり、結婚式は一族の重要この上ないビッグ・イベントである。ところが慣習にも伝統にもまるで囚われないクリシュナン一家にとっては、世間ではとんでもなく由々しい事態と思われそうな「母親不在の長男の結婚式」も、面白かった家族のエピソードのひとつになっているようだ。

PK もジャナキさんも虚飾や因襲を好まず、息子たちが自由に自分の人生を生きることを望んだ。ジャナキさんが息子たちやその妻たちを愛し、誇りにしていることがお会いする折々に感じられたが、彼女にとって「息子の妻たち」が誇らしいのは、彼女たちがどんな家柄の出身だったかではなく、それぞれにしっかりと自分自身の職業を持っているということだ。それはジャナキさん自身が少女の頃から心に決め、希求してきた女性の生き方でもある。親業・家業・活動と三役をこなしながら勉強をし、ロシア語教師になったジャナキさんだが、40 代の終わりになってから、もっと思う存分勉学に集中したいと大学院へ通い始めた。1977 年〜79 年にかけてマナサガンゴトリ大学に通い、とうとう歴史学の修士号を取得している。ジャナキさんは 1983 年〜84 年にかけて 10 か月間モスクワへのロシア語留学も果たした。その後も何度もソ連・ロシアを訪ねている。チェンナイの RCSC はソ連／ロシアとの交流活動の拠点となり、語学学習や映画上映、舞踊の上演、女性の会や文学クラブ、チェス・クラブ、と、充実した取り組みが盛んに行われてきた。ソ連が崩壊した後も、そして PK が 2001 年に他界した後も、ジャナキさんはライフワークとしてこの RCSC の事業と ISFUC を守ってきた。

このようにしてジャナキさんは自分自身の世界を広げるとともに、若い女性たちが狭い世界に閉じこもらずに広い世界に飛び出していけるように応援してきた。自分の家のドア

を開けて街へ出よう。自分の街だけでなく他の街へも出かけよう。自分の国だけでなく外国のことも知ってみよう。そうして自分の目を開き、世界を広げ、広い考え方ができるようになろうではないか、と。そんなジャナキさんの姿に励まされた女性たちがインドの内外に大勢いることだろう。

私自身も、そのようなジャナキさんにお会いできて本当に幸運であったと思う。国際交流運動の重鎮として敬われているジャナキさんの、講演や発言に際しての堂々たる毅然とした姿勢や、若い世代の人々に語りかける優しくあたたかい態度はとても印象的だった。これからもお元気で活躍を続けてゆかれるようにお祈りしている。

このエッセイの最後に、資料を 3 点紹介しよう。資料 I は、前述の FSU が創立されたときの声明であり、ジャナキさんの長きにわたる国際交流運動の出発点になった歴史的文書である。

資料Ⅱは、2012 年第 20 回 ISCUF 全国会議（於・コルカタ、2012 年 12 月 9〜11 日）におけるジャナキさんのスピーチである。ここにはジャナキさんのゆるぎない歴史意識と彼女が何に価値をおいてソビエト／ロシアとの友好に生涯を捧げてきたかがよく表れている。

資料Ⅲは、その翌年 2013 年にロシア大統領府付属国民経済業経学アカデミーのヴォルゴグラード支部で開催された第 2 回国際フォーラム「国境なき対話」に招待されたジャナキさんが、インド・ロシア女性協会（IRWA）代表として行ったスピーチである。このフォーラムにはイタリア、ベルギー、ドイツ、フランス、ウクライナ、ベラルーシ、ヨルダン、カザフスタンなどからも代表団が参加し、女性と子どもたちに関する様々なテーマが討議された。ジャナキさんは、この時に、その優れた活動に対してヴォルゴグラード市長イリーナ・ソロウィオワから表彰を受けた。

資料Ⅰ　ソビエト連邦友の会（FSU)の宣言　1941年7月

ソビエトを支持する知識人たち

ナチのソビエト連邦に対する攻撃は、世界史の新しく重大な局面を開いた。今日、この戦争マシーン、戦争屋たちが前代未聞の大規模な戦線で猛威を振るっている。

この試練の時、ソビエトがその名誉とする巨大な道徳的・物質的成果に注目することが緊要だと私たちは感じている。私たちの中にはソビエト政権の諸側面に批判的な者もいるし、ソビエトが実践に適用しようとしているマルクス主義を支持していない者もいる。しかし帝政ロシアの暗い遺産と、それに続く悲惨な内戦と、生まれたばかりのソビエトに対する地球上のほとんどすべての強国による介入を思い起せば、ソビエトが実現したものは、ただ壮大にのみ描かれうるものである。

ラビンドラナート・タゴールはそれを熱のこもった言葉で証言し、そして今日の2人の指導的な科学的調査者—シドニー・ウェッブとベアトリス・ウェッブ—は、ソビエト社会主義共和国連邦に関する情報である『ソビエト共産主義—新しい文明』を出版した。

完全な平等

ソビエト連邦では、すべての工場、鉱山、鉄道、そして船積み場や貿易組織も、全体としての人民の財産である。この国の経済的・社会的な生活は、少数の人々の利益ではなく、万人の福祉のために計画されている。ソビエトの計画遂行のドラマは、社会主義的仮説をもたない人々さえをも掴んで離さない。人種や性別や国籍にかかわらず全市民が完全に平等であることが、彼らがこのコミュニティーのビジネスに参加することを可能にしている。

教育の機会均等が普遍的に提供され、学校を離れる年は17歳に上げられ、大学では学生に給付金が与えられる。すべての人に仕事が提供され、失業がない。他の場所ではどこでも頻発している経済危機はなくなっている。1日の最大労働時間は8時間で、平均すれば7時間以下である。すべての人に無償の医療が提供され、労働者は病気で仕事を休んでも働いているときと同じように賃金が払われ、それ以外に毎年有給休暇の権利を与えられている。公平な観察者の証言によっても、世界のどこにもソビエト連邦ほど女性と子どもたちが手厚く保護されているところはない。

構想の壮大さ、実践の細やかさ、その形式の科学性、ソビエトが試みようとしている任務は、過去においても現在においても、いまだいかなる国によっても試みられていない。

科学的精神

「我々が創造するに、抽象理論やテクノロジーの領域においてと同様に、公費の支出によって、これほど大きく、これほど様々な科学的研究が行われている国はない。イギリスやアメリカの科学者たちが現在不満を述べているような利益をあげようという衝動のために科学が阻害されるようなことは確かにほとんどまったくない。」

ソビエト共産主義

私たちインド人は、革命後、ソビエトが帝政ロシア政府が他の列強と共にアジア諸国で享受していたすべての「資産」と「協定」と「租界」と「特権」を放棄したというその偉

大な態度を忘れることはできない。

数多くの民族と何百万もの人民がツァーリに計画された後進性を非難されていたが、ソビエトによる民族的・言語的マイノリティの解放は高い文化を花開かせ、かつて迷信と暗黒の教会的反動が君臨していた地に、新しい知的生活が生み出された。ソビエト社会主義共和国連邦には185の民族と147の言語があるが、人種的・言語的な特権は存在しない。

女性の解放

女性の解放のための法律を採用した初めてのイスラム国家はケマル・パシャのトルコではなく、ソビエトのアゼルバイジャンである。ソビエトのウズベキスタンは、エミール（藩王）と彼のハーレムや宮廷のために8,000人の祈祷師がいるが医者は一人しかいないブハラ・ハン国と、どれほど大きく異なることか。

ウェッブ夫妻は次のように指摘している。「ソビエト連邦は平等によって『法律を持たない劣った民族』を脅しているにすぎないのだろうか？ しかし、ソビエト連邦は彼らの後進性が何世紀にもわたる貧困、抑圧、奴隷化の所産であることを認識しつつ、教育や社会投資、工業投資や農地改革において、そうした民族的後進性をその政策の主要な焦点として、共通の財源から優越的な民族よりも一人当たり相当な額を支出している」。

知識への愛

ソビエト社会主義共和国連邦における書籍の出版部数は、桁外れに多い。第一次五カ年計画の終了時、ソビエトの書籍出版はイングランド、ドイツ、日本を合わせた数よりも多かった。

ナチスに追放されたアインシュタインは、おそらく他のどこよりもソビエト社会主義共和国連邦で販売されている。彼の著作は1927年から1936年の間にソビエト連邦で5万5,000部販売された。

シェークスピアの生誕375年記念日は、彼の生まれた地では顧みられることがないままだったが、ソビエト連邦の至るところで労働者と農民によって祝福され、1939年の春にはモスクワで約20万人の人々がリア王を観劇した。小さな共和国であるアルメニアでは、シェークスピアの作品が過去5年間に3万2,000部販売された。

ソビエト人民は我々の言葉で「教養ある諸階級」を持っており、何も望んでいない。彼らは全面的に教養ある人民を求めており、すべての人々に余暇、安全、機会を与えようとしている。

新しい文明

ソビエトの普通の人々が、20年余りのうちに途方もない条件の中で、私たちが新しい文明と考えるものを創造した。そして、錯乱と堕落の世代に制圧されている私たちインド人でさえ、この文明が危機に陥っているときに平静のままではいられない。私たちが無力で不自由であっても、少なくともソビエトに私たちの好意を伝え、ソビエトに向けられた軍勢に対してソビエトが勝利を収める日を待望することができるのである。

資料Ⅱ　第20回ISCUF全国会議（於・コルカタ、2012年12月9〜11日）

第20回ISCUF全国会議が西ベンガル州のコルカタで開かれるのはただの偶然ではありません。

インドに2人の偉大な人物、すなわちラビンドラナート・タゴールとジョティ・バス同志を与えたのはこの州だということを、大いなる喜びと共に思い起そうではありませんか。この2人は共に、インドの進歩と自由のための闘いに援助を与えました。

ラビンドラナート・タゴールは、第1回ノーベル文学章受賞者であり、私たちの国歌の作詞者であり、インドの自由のために熱心に活動した堅固な信念をもった人物であり、人権侵害に反対して声をあげた人物であり、女性の解放のための偉大な戦士であり、カースト制度の根絶のために闘った傑出した人物であり、作家で詩人、偉大な教育者であり、そして最後になりますが、偉大な愛国者でした。

2009年にチェンナイで開催された前回のISCUF全国会議では、2010年5月から2012年5月まで全インドでタゴールの生誕記念日を祝うことが決定されました。

タゴールは作家・詩人であっただけでなく、正義を支持し、あらゆる不正義や抑圧に対して声をあげた人物でした。ISCUFに属している私たちは皆、インドのすべての州でタゴールの生誕記念をふさわしいやり方で最大限に祝福しようとしていることを喜び、誇りに思います。

ジョティ・バス同志に関して言えば、この友好運動に参加している私たち皆にとって改めて紹介するまでもないでしょう。彼は後にISCUS／ISCUFになるFSUの一部でした。ジョティ・バス同志はその全生涯を通して友好運動を支持してきました。彼は今年で98歳になります。1941年から2010年までジョティ同志は友好運動の強さの支柱でした。

私たちの母国インドに対するラビンドラナート・タゴール偉大な仕事や、ヒレン・マケルジー、スネハングシュ・カンタ・アチャリア、ブペンドラナート・ドゥッタ、ブペシュ・グプタ、ジョティ・バスその他のFSUの偉大な人物たちのことを思い起しつつ、私たちはこれら偉大な人々に敬意をもって頭を垂れ、自由、進歩、友好、世界平和に向けた彼らの努力に心から感謝するものです。

コルカタでの第20回ISCUF全国会議に集まった私たちは皆、ここに代表団、参加者、学生、芸術家等々が参加していることを喜び、誇りに思っています。

私たちは皆、それぞれが他の諸国との友好と文化交流という目標を助けるために私たちの生活を捧げることをこの会議で誓おうではありませんか。

今日、ISCUFは全ての諸国との友好・交流、文化協力を強めるために自らを捧げます。

インドの青年たち！ これは皆さんへの呼びかけです！ すべての諸国との友好を強化するというこの偉大な目標を助けるために前進し、最大限の努力をしようではありませんか！

ISCUF、万歳！
世界平和、万歳！
友好、万歳！

心が怖れをいだかず、毅然と高くたもたれているところ、
知識が自由であるところ、
世界が狭い国家の壁でばらばらにひき裂かれていないところ、
言葉が真理の深みから湧き出づるところ、
たゆみない努力が完成に向って両腕をさしのべるところ、
理性の清い流れが形骸化した因習の干からびた砂漠の砂に吸い込こまれ道を失うことのないところ、
心がますますひろがりゆく思想と行動へと、おんみの手で導かれ前進するところ—
そのような自由の天国へと、父よ、わが祖国を目覚めさせたまえ。

［ラビンドラナート・タゴールの詩集『ギーターンジャリ』から］

資料Ⅲ　講演：「平和と安全を支持する女性組織のネットワークの国際的な経験」第2回国際女性フォーラム「国境なき対話」、於ヴォルゴグラード、2013年

私たち世界の女性は、新たな世界戦争を止めるという困難な問題に直面している。どうすればそれができるだろうか？ それは可能だろうか？ これは簡単な任務ではない。

私たちはこの女性フォーラム「国境なき対話」が主催する会議に参加するために、そしてスターリングラードの戦いの70周年を祝うために、ヴォルゴグラードに集まっている。今日きわめて重要なものになっているこのテーマについての考えをまとめようではないか。「世界の女性たち―暴力から解放された世界のために」、そして私たち世界の女性が果たすべき役割を付け加えさせてほしい。

ヴォルゴグラードはツァーリツィンあるいはスターリングラードとしても知られている。現在私たちは皆、言うまでもなく、地元の人々が経験せざるをえなかった困難な日々について多くを読んでいる。それらを読むと、私たちの心は悲しみで燃え上がる。勝利の日まで勇気をもってこれらすべての日々を生き抜いた女性たちについて読むとき、私たちの心は誇りでいっぱいになる。スターリングラードは1925年4月10日にヨシフ・スターリンにちなんで名付けられた。ヴォルゴグラードで行われた戦争は、第二次世界大戦の重要な部分だと言われている。よくあることだが、最も被害を受けるのは一般大衆であり、普通の市民、女性、子どもたちである。この大戦は、言うまでもなく、民族主義的傾向とその特定の時期の緊張によって引き起こされた。ジューコフ司令官が率いるこの軍隊では、2000万人が亡くなったが、ドイツの退却に貢献した。南部では1943年1月にドイツが降伏し、北部では1943年2月に退却が行われた。この特別の打撃を受けて、ヒトラーは「戦争の神は敵の側に行ってしまった」と発言したと言われている。

アウシュヴィッツやブーヘンバルトの拷問収容所／死の収容所の日々を学ぶことでは第二次世界大戦の恐怖や平和維持の必要性を私たちに教えるのに十分でないとしたら、何がそして誰が世界平和の必要性を私たちに教えることができるだろうか？ 今日でさえ、ナチの収容所を思い出させるものとして、家族から引き離され、家族を見つける希望さえ打ち砕かれた、腕に番号の入れ墨をされた人々が多くいるのである。

ふたつの世界戦争では十分でないとすれば、なぜアメリカは真珠湾爆撃に復讐するために広島と長崎に原子爆弾を投下せねばならなかったのだろうか？ それらが私たちに平和の重要性を教えなかったとすれば、他に何がそれを教えることができるだろうか？

まず何よりも、私たちの子どもたちに、たとえまだ低学年であっても、戦争の恐ろしさ、軍拡競争の危険、他国の侵略への貪欲さの中で世界の様々な諸国で何百万人もの人々が虐殺されたことを教えよう。私たちはふたつの世界戦争、大量虐殺を引き起こした様々な戦争から、世界平和の真の必要性が生じていることを学ぶことができないだろうか？

私たちはベトナムやカンボジアの独房で泣き叫ぶが全く救われなかった人々の死の叫びを忘れることができるだろうか？ この歴史が私たちに教訓を与えるのに十分でないとすれば、私たちはそれを他の何に求めればよいのか？

戦争の真っ只中で、家族は引き裂かれ、再び見つけることができず、自分たち自身の国に立ち寄ることもできず、他の国に隠れ場を求めることになる。

ここに世界平和を強化するという私たちの任務があり、それに至る道筋がある。私たち

はそれぞれ、様々な組織、とりわけ女性組織を通して、もうひとつの世界戦争を阻止するというこの困難な任務を果たすべき重要な部分となっている。

女性には、常に複数の仕事を同時に行う用意をし、毅然としていなくてはならない、という教訓がある。女性が人生の軌道に責任があることを忘れてはならない。不幸にも、インドでは女性の堕胎や女性の嬰児殺しが驚くべき割合で増大している。政府はこの不幸な状況を止めるために法律を制定し最善を尽くしているが、十分に成功していない。

同様に、女性の権利に関する法律も、生活の場や職場で求められる平等を女性に与えている。女性に対する慈善ではなく、平等な尊厳の権利の表現としての一律給付年金の要求もある。インド大統領だったA・P・J・アブドゥール・カラム博士の「女性が尊敬されるとき、私たちの国も尊敬される」という言葉を思い起そう。今年3月中旬の国連会議でインド・イスラム諸国・西洋諸国が、諸国を貫いて宗教的、文化的、社会的な規範の違いを問わず、潜在的に広範囲にわたる女性に対する暴力と闘う枠組みの導入のために協力した。

ここに、世界平和に向けて活動する私たちの任務も始まる。私たちの子どもたちは、それぞれの国の未来の市民であるばかりでなく、世界の市民ともなることを思い起そう。世界平和への愛と世界が様々な戦争の中で通過しきたことに関する知識を子どもたちに説明することはきわめて重要である。

学校で子どもたちに平和の重要性を教えることから始め、家庭、学校その他の教育機関、職場、すべての都市、そしてもちろんそれぞれの国中で平和の重要性を教えるべきだ。

すべての市民は平和の重要性、戦争の恐怖、私たちがこれまで学んだ教訓を学ばねばならない。私たちは皆、「世界平和を守ろう」「もう戦争はいらない」「子どもを平和の中で成長させよう」「皆、世界平和のために活動しよう」というひとつの旗の下に団結しよう。

インドで、私たちは同じ考えをもつすべての組織をひとつの目的をもったプラットフォームにまとめるために共に活動している。私たちインド・ロシア女性協会（IRWA）、インド文化協力友好協会（ISCUF）、全インド平和連帯組織（AIPSO）はロシア科学文化センターと協力して、この目標の実現のために活動している。これらは全て首都ニューデリーに全国本部があり、各州に本部と地区本部がある。各地区や各州にいる事務所員がインドの他の地域のカウンターパートとの活動を継続的に点検する。それらはロシアとその他の多くの国と友好の結びつきがある。私たちが政策、文化、友好について学ぶのに役立つ活動のニュースと交流の流れは途切れることがない。それは私たちがそれぞれの国について大いに学ぶ教訓の流れが途切れることがないのと同様である。訪問団の相互派遣は私たちが出会い、考えを交換するものとして常に歓迎される。前述の私たちのすべての組織がそれを呼びかけ、訪問団を交換する準備を整えている。訪問団は、学生の訪問も奨励されるし、ダンス・グループや女性組織の活動家や専門家の訪問団も歓迎される。

私たちは様々なチャンネルを通して活動し、互いの言葉を学び、私たちの文化、芸術、音楽、スポーツについての知識を交流し、訪問団を相互に送ろう。そして、この友好を通して私たちが他の国々と声を合わせて、「もう戦争はいらない」「友好と平和こそを」と世界に向けて宣言するとき、私たちは誇りをもって「私たちはそれをした！」「私たちはそれを実現した！」と言うことだろう。

ジャナキ・クリシュナン
ーインドとロシアの友好運動に捧げた人生

執筆者・翻訳者 紹介(50音順)

◇ **池田高巌** (いけだ・たかね)
翻訳業。『アジア現代女性史』各号に以下の翻訳。「日本軍占領期と独立革命期のインドネシア鉄道労働者」4 号、2008。「戦争責任再訪：日本においてのアウシュヴィッツ」5号、2009。「朝鮮！～兵士たちを帰還させる方法～」ほか、7号、2012。

◇ **今岡良子** (いまおか・りょうこ)
大阪大学教員

◇ **木戸衛一** (きど・えいいち)
大阪大学教員

◇ **杜春媚** (ドゥ・チュンメイ)
ウェスタン・ケンタッキー大学准教授。 2009年にプリンストン大学より博士号授与。中国・東アジア近現代史専攻。

◇ **トルガー・エネビシ** (Tulgaa Enebish)
大阪大学言語文化研究科博士後期課程1年次、モンゴル国出身。2007年～2012年までモンゴルのNGO「持続可能な発展のためのジェンダーセンターGender Center for Sustainable Development (GCSD) の職員として活躍。

◇ **松田祐子** (まつだ・ゆうこ)
梅花女子大学非常勤講師。近著に、『主婦になったパリのブルジョワ女性たち－100年前の新聞・雑誌から読み解く』(大阪大学出版会、2009年)、『アニメで読む世界史』(藤川隆男編・共著・山川出版社、2011年)など。

◇ **藤目ゆき** (ふじめ・ゆき)
大阪大学教員

カバー写真 解説

（右上の写真）● イーダ・バクマン（左）とケイト・フレロン・ヤコプスン（右）

（左上の写真）● 朝鮮民主女性同盟会長 朴正愛（左）　文化宣伝相 許貞淑（右）

（下の写真）● 1975年に国際女性年の取り組みとしてWIDF会長のフレダ・ブラウン（写真 中央）をインドに迎えるジャナキ・クリシュナン（写真右側）

第十一号 ★
2017年3月20日発行
ISSN 1880－1102

編集者―「アジア現代女性史」編集委員会
発行者―アジア現代女性史研究会（代表：藤目ゆき）
カバーデザイン―岩見利子

〒565-0871 大阪府吹田市山田丘1番2号 大阪大学人間科学研究科 藤目研究室気付
e-mail: fujime@hus.osaka-u.ac.jp